Romance of 彼と彼女の Tale

SaGa Series
Male/Female Anthology

この PDF は Web 閲覧用に制作いたしました。
印刷・編集等は出来ません。

彼と彼女のRomance Tale

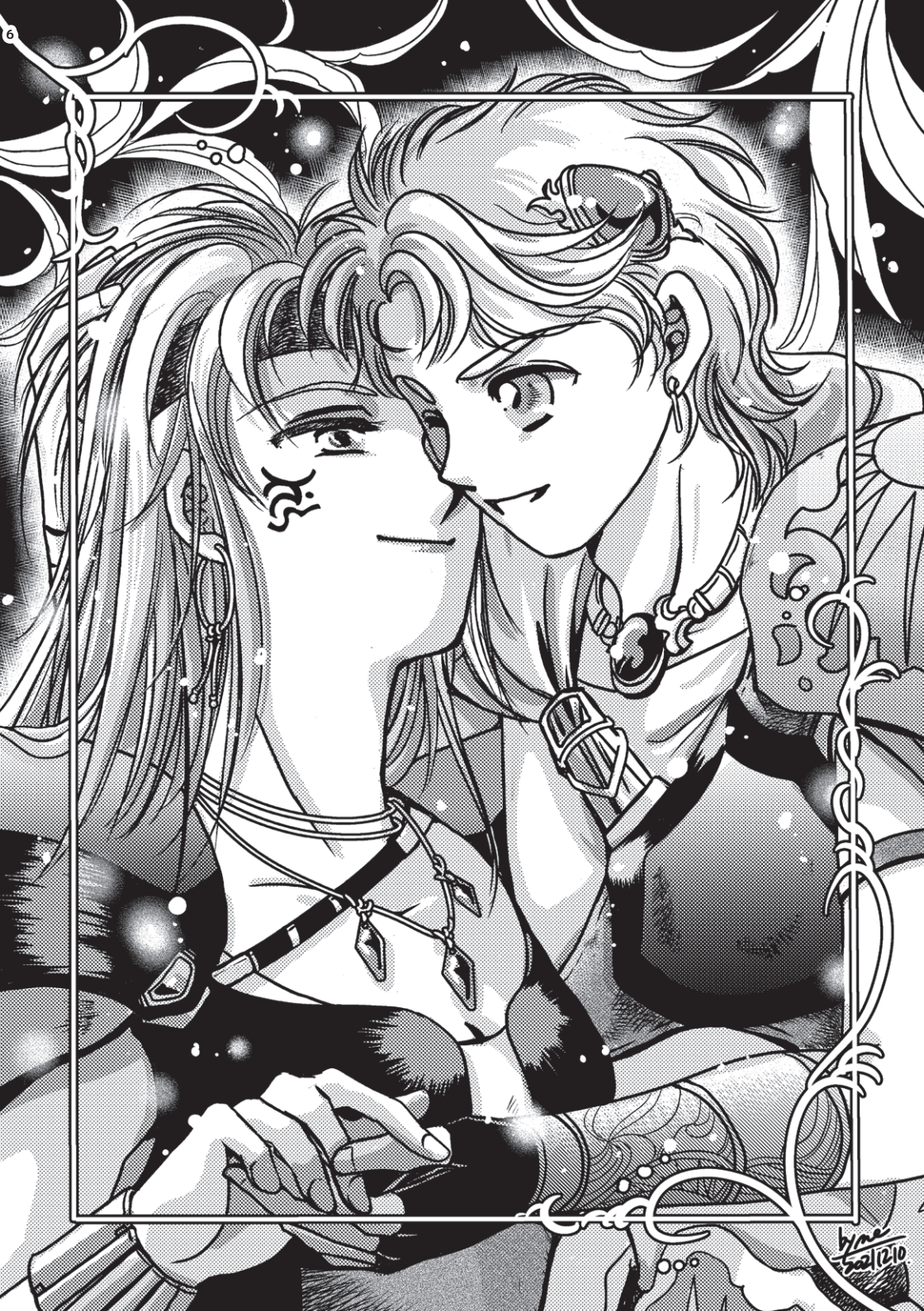
サガシリーズ男女カップリングアンソロジー

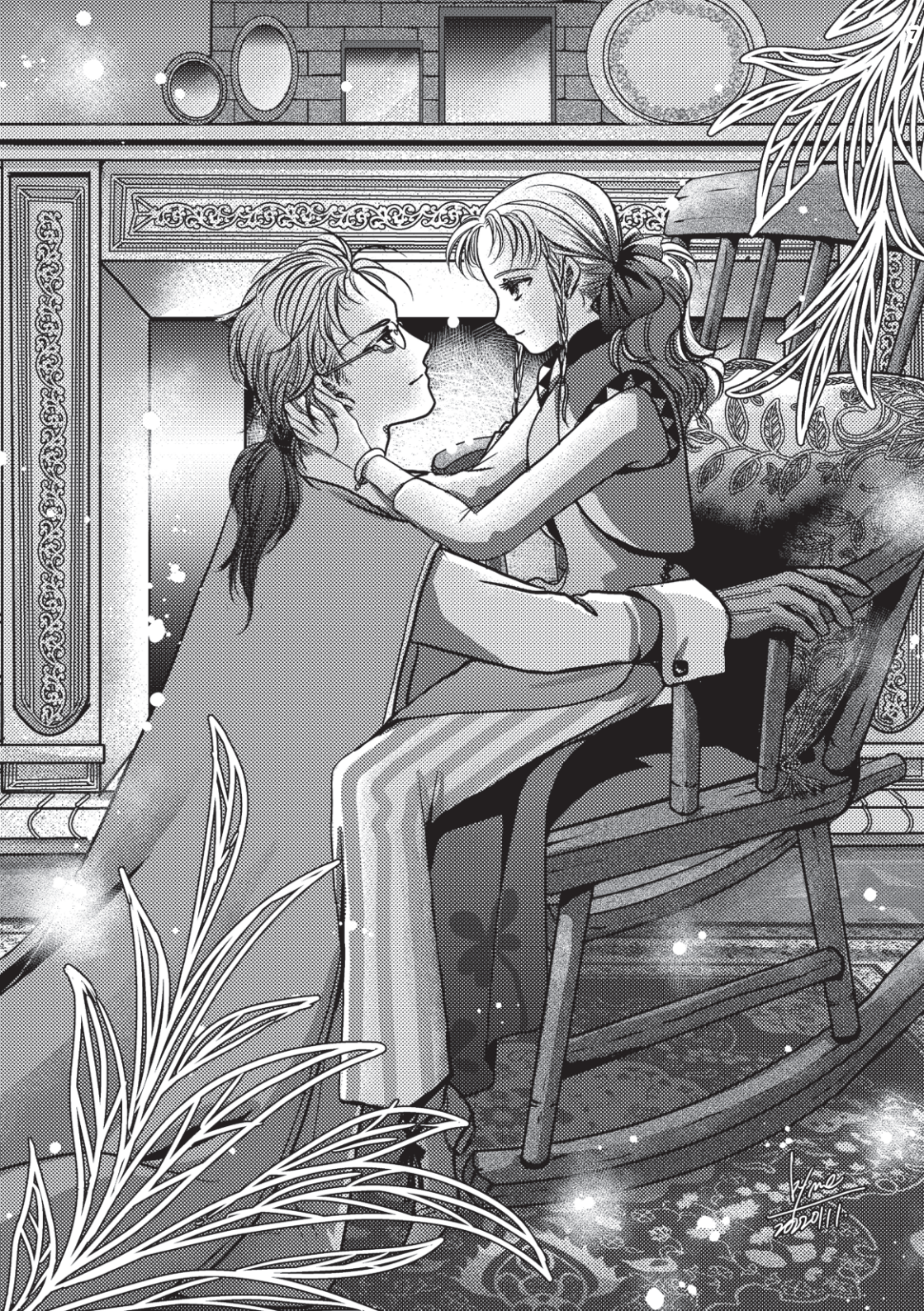
当アンソロジーはファンによる非公式の企画です。

Contents

006	I'm Me	Illust		アルベルト×シフ
		Illust		トーマス×サラ
008	月雲	Novel		バルテルミー×メリッサ
		Novel		サルゴン×エレノア
010	しいだ	Comic		スービエ×海の主の娘
015	マーレ	Novel		ギュスターヴ 13 世×レスリー
018	かいと	Illust		ジャン×ミリアム
019	いがらし	Comic		ミカエル×カタリナ
023	水波	Novel		鎧の王×村一番の美人 ※作品表現上、原作で名無しのキャラに オリジナル名をつけています
028	カシワメ	Comic		チアーゴ・リズボア×アングル
030	桃櫻奈直	Illust		グレイ×クローディア
031	じょぬ	Novel		ルージュ×アセルス
041	りほいみ	Comic	Talk	ボルカノ×ウンディーネ
			Talk	レオナルド×エリザベート
044	Tsubasa	Illust		ミカエル×カタリナ
045	出海尚也	Comic		ポルカ×ジョー
050	土取那智	Novel	Talk	ハリード×ファティーマ
056	こえだ	Comic		ブラック×マライア
066	くわんご	Illust		ユリアン×エレン
		Illust		レン×エミリア
068	黒猫	Illust		ゾズマ×零姫
069	冷茶	Comic		ヒューズ×アセルス
073	文月はるか	Novel		ハリード×エレン

077	Kyabia	Comic		イルドゥン×アセルス
083	たお	Comic		トーマス×サラ
088	藤凪みりあ	Novel		ボルカノ×ウンディーネ
094	アカツキユウ	Illust		レオナルド×エリザベート
095	パテ	Comic		シャール×ミューズ
105	MAI	Comic		レン×エミリア
112	そーか	Illust		ミカエル×カタリナ
		Illust		フェルディナント×ヒルダ
114	沖蠍	Comic		ルージュ×アセルス
116	新納ゆうま	Comic		ユリアン×エレン
118	響喜（hibiki）	Comic	Talk	ヴァッサール×聖王
121	ゆらい	Comic	Talk	ビューネイ×フォルネウス ※作中に流血表現箇所があります
127	時	Illust		ルージュ×アセルス
128	暇乃余和	Novel		ミルザ×アルドラ
136	沢木裕也	Comic	Talk	ボルカノ×ウンディーネ
		Comic	Talk	バルテルミー×メリッサ
140	sykariepy	Comic		ハリード×エレン
150	夏海（Natsumi）	Novel		ブルー×アニー
		Novel		ルーファス×ライザ
160	影下里緒	Illust		グレイ×クローディア
		Comic		ボルカノ×ウンディーネ
167	執筆者コメント			
177	主催後書き			


by me
2021/12/10



君が天使

月雲

「見て見てあなた！　空からきれいな光がさしてるわ」
メリッサが大きな声で呼ぶので、バルテルミーは慌てて家の外に出てみた。
「ほら見て。とてもきれいだわ。まるで光で出来た道みたいなの」
空を見上げると、厚い雲の切れ間から幾筋も光が漏れていた。光線は柱のようになって、放射線状に地表に降り注いでいる。
「ああ、珍しいね。これは天使の梯子だよ、メリッサ。いろいろな条件が全部揃わないと見られないんだ」
「天使の梯子……素敵な名前ね、あなた。でもあの光の道なら、天使も空から訪れてもおかしくなさそうね」
だってそれくらいきれいだもの、と言ってメリッサはバルテルミーの方を見ると顔をほころばせた。
天使の梯子を背にしたメリッサは、いつもに増して光り輝いて見えた。眩く見える彼女は、それこそ天使のようだ。その背に羽が生えていてもきっと似合うだろう。
「天使の梯子も綺麗だけど……俺にとっては、君が天使だな、メリッサ。君は天使よりも輝いているように思えるよ」
バルテルミーはメリッサの大きな目を見つめ、長い柔らかな髪を指に絡めながらしみじみと言った。見る間にメリッサの頬がほんのりと染まる。
「もうあなた。何言ってるのよ。わたしが天使って……恥ずかしいわ」
「思ったことを言っただけだよ、メリッサ。君は、本当に天使のようだから。……ずっと幸せにするからね、俺の天使さま」
バルテルミーは悪びれず笑むと、恥ずかしいのか青いエプロンを握りしめてあたふたしているメリッサを抱き寄せたのだった。

〈了〉

サルゴン×エレノア

あなたが蝶で、僕は花で。

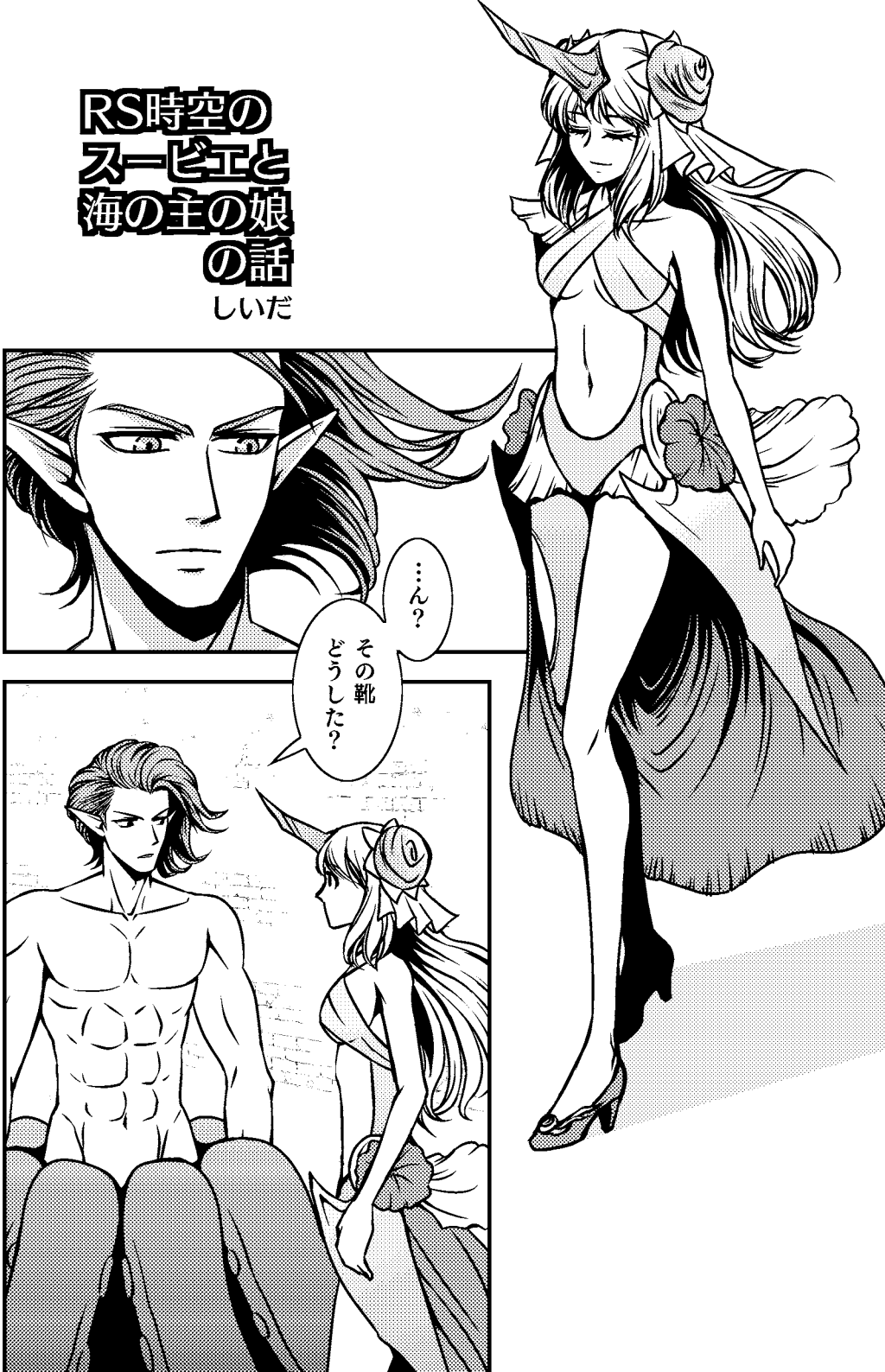
月雲

次の街を目指して、道なき道を歩いていたときだった。
「あ……綺麗な蝶ですね、エレノアさん」
色鮮やかで、艶やかな蝶がひらりひらりと舞っていた。
「あらほんと。綺麗な蝶ね、サルゴン」
蝶は咲き乱れる色とりどりの花の中から、ひとつの花を選んでとまった。きっと、蜜を吸っているのだろう。
「エレノアさんみたいな蝶だな」
艶やかで、華やかで。自由に舞うその姿はまるでエレノアのようだとサルゴンは思ったから。
「……あら、私が蝶みたい？　どういうこと、サルゴン？」
「え……僕、口に出してましたか、エレノアさん？」
「思い切り出してたわよ。さあ、私が蝶みたいって、どのあたりが？」
エレノアに顔を覗き込まれる。エレノアの瞳に映ったサルゴンの顔は真っ赤だった。
「その……あの蝶は自由で、綺麗で、華やかで……エレノアさんみたいだなと」
「あら、そう？　ありがとう、サルゴン」
エレノアは嫣然とサルゴンに微笑んでみせた。
「じゃあサルゴン。私が蝶なのなら、サルゴンは何？」
「僕ですか、エレノアさん？」
「そう。自分のことも何かに例えられるんじゃない？」
困った。サルゴンは視線をさまよわせた。そういう質問は想定外だったから。
蝶はまだ先ほどの花にとまっている。もしかしたら羽を休ませているのかも知れない。
ふと思った。エレノアが蝶なら、きっと花を選ぶだろうと。ならば、自分がなりたいのは。
「花です。僕は一輪の花になりたいです、エレノアさん」
「あら、サルゴンは花なの？」
「はい。エレノアさんが蝶なら、僕は花です」
あなたに選んでもらえる花に、僕はなりたいから。
「そう。綺麗に咲くのよ、サルゴン」
「はい、エレノアさん！　きっと美しく咲いてみせます！」
サルゴンとエレノアは、それからしばらく蝶と花の話を続けたのだった。

〈了〉

RS時空のスービエと海の主の娘の話

しいだ



リズが見立てて
くれたのだけど
…変？
いや別に
そういう意味で
訊いたんじゃない
似合ってる
と思うぞ
そういえば
ずっとその姿
なんだな
気に入らないとか
言ってたよな？
え？
ええ
でも

——この姿でいると

この世界でも
あなたの隣を
歩けるから——

元の世界に戻ったら…

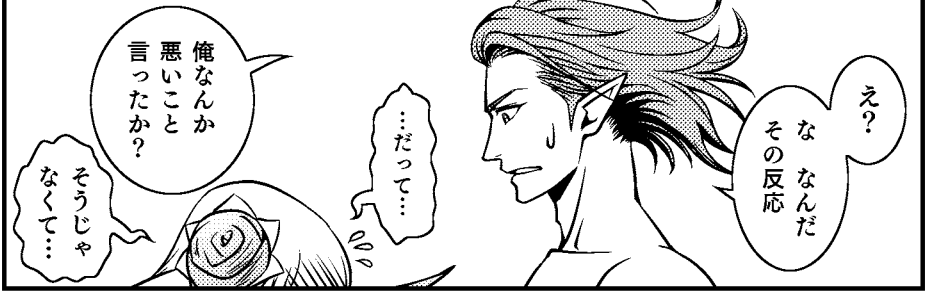
どっちの姿であなたに会えばいい…？

…？　それはお前自身が楽なほうでいいんじゃないのか？

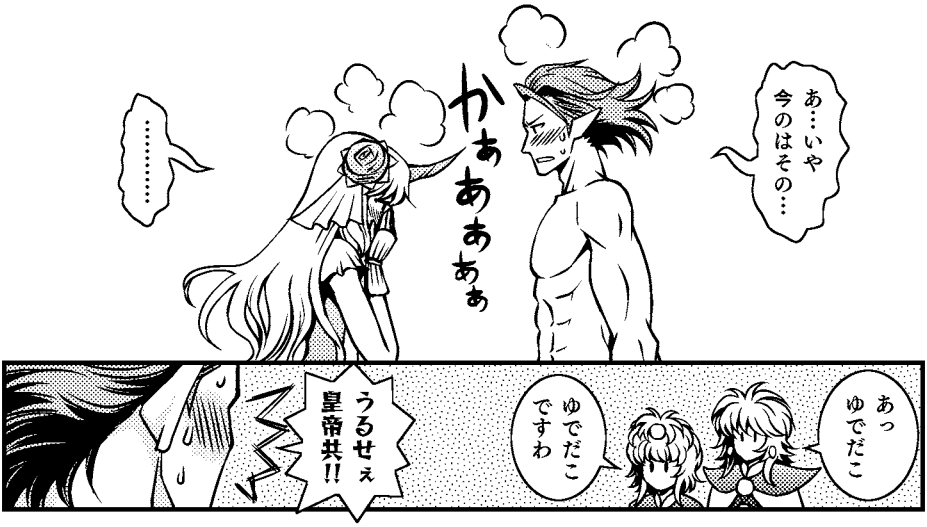
俺が選ぶことじゃないだろう？

まぁ俺はどっちの姿でも綺麗だと思うがな

ぼっ


え？
な なんだ
その反応
…だって…
俺なんか
悪いこと
言ったか？
そうじゃ
なくて…

……!!
ほっ


あ…いや
今のはその…
かぁぁぁぁぁ
……
あっ
ゆでだこ
ですわ
うるせぇ
皇帝共!!

ギュスターヴ13世×レスリー

ゆるやかな坂道をあなたと

マーレ

大きな布袋を落とさないように胸に押し付けるように抱え、右肘からぶら下げた籠には細々とした食品や日用品、部屋を彩る為の花。布袋にはみずみずしい林檎がごろごろと入っている。

レスリーは痺れそうになる左腕を少し動かして袋を抱えなおした。大方の買い物を済ませたところ、青果店の気の良い店主から声を掛けられ、ぜひソフィー様にと林檎をいただいたのはいいが、さすがに少し重い。一度荷を置いてから改めて受け取りに行けばよかったなと思ってもみるが、ここから屋敷まではあとわずかの距離であったので引き返すのも今更だった。

「大変そうだな」

背後から聞きなれた声がした。振り向くのも億劫で、その声の主――ギュスターヴが目の前に回ってくるのをレスリーは視線だけで追う。手製の剣片手に、先程まで洞窟でモンスター狩りでもしていたのだろうか、服の端々が汚れていた。いつも連れているフリンは近くにはいないようだった。

「ギュス……」

ギュスターヴはレスリーの正面に立つと、彼女を上から下まで面白そうに眺め、じゃあ頑張れよ、と何食わぬ顔でそのまま歩き去ろうとする。

「ちょっと！　少しくらいは手伝ってくれても」

「冗談だよ」

眉をつり上げるレスリーにけたけたと笑いながら、ギュスターヴは彼女の腕から袋と籠をひょいっと取り上げた。

「あ、全部じゃなくても」

「いいから」

「そう？　……ありがとう」

だからいいって、と聞こえるか聞こえないかの声で応え、ギュスターヴはさっさと屋敷の方へ歩き始める。軽々と荷を持つ大きな背中にしばし気をとられていたレスリーは、はっとして慌てて小走りで彼の後を追った。横に並びたつと、さりげなく歩調を合わせてくれるのがわかって、少しくすぐったい気持ちになる。

しばらくの間、言葉なく歩いていくと、レスリーはギュ

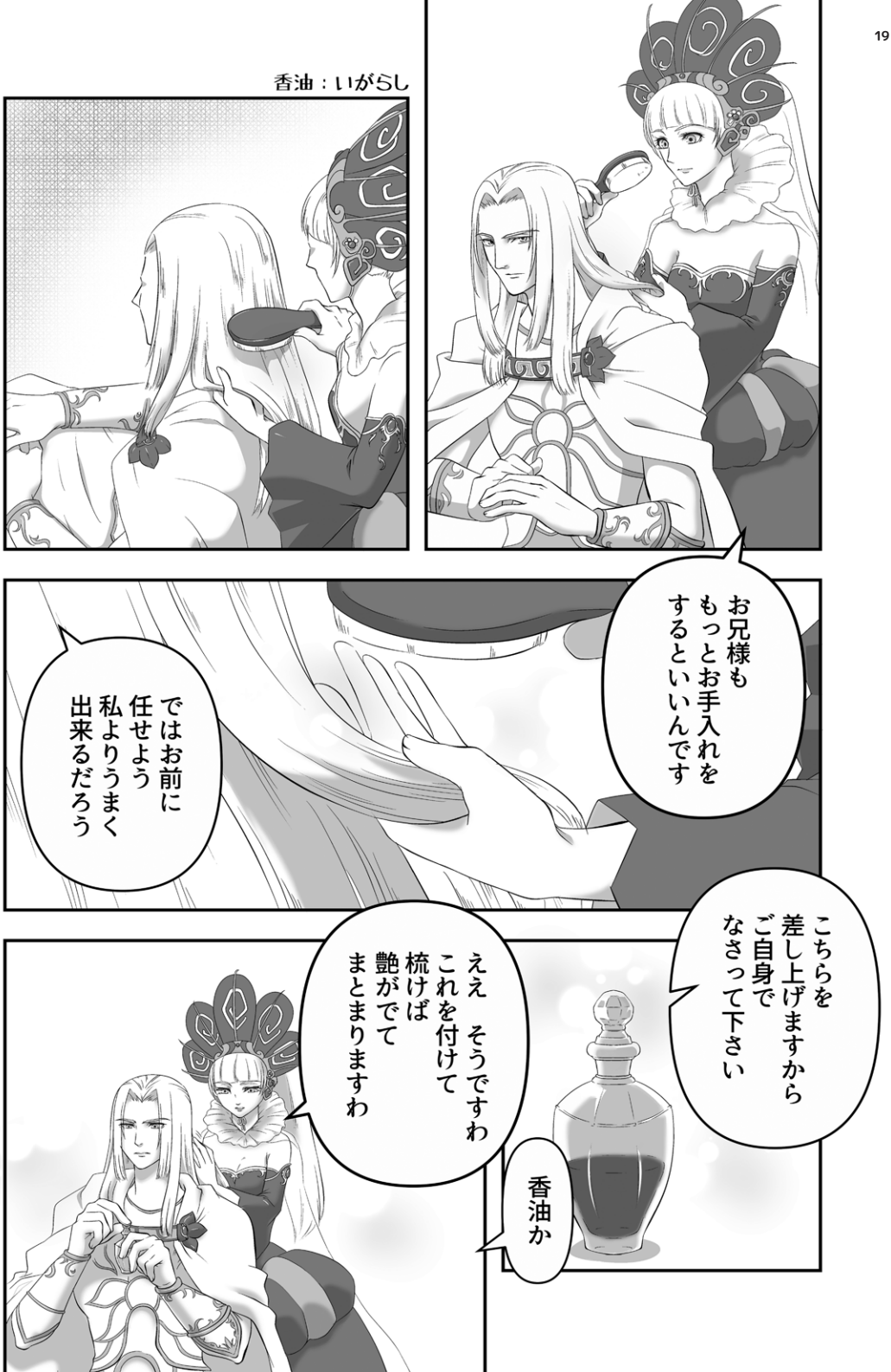
スターヴが口を開いては噤むことを繰り返していることに気づく。じっとその横顔を見つめてみると、彼はその視線を感じとり観念したかのように口にした。
「その、母上は……」
あぁ、とレスリーは頷く。
ギュスターヴの母、ソフィーが体調を崩してからしばらくたつ。床に臥せることが増え、レスリーも彼女のお世話をする為に常時傍にいることになった。
ただでさえほっそりしていた身体が痩せていく様を直視するのが耐え難いのだろう。日に日にギュスターヴがソフィーと顔を合わせる回数が減っていた。母一人子一人で育ってきたのだ。彼女に何かあればと思えば、はっきりと病状を聞くのも怖いのかもしれない。
レスリーは彼に笑いかけた。できるだけ自然に、でもほんの少しだけ大袈裟に。
「今日は随分とお加減がよろしそうよ。何か甘いものが食べたいですねってお話もしたから、いただいた林檎で何かつくろうかしら」
「……そうか」
ギュスターヴは頬をゆるませて安堵の表情を浮かべた。その顔を盗み見てレスリー自身も少しほっとする。
ソフィーの目前では決して見せないが、ギュスターヴが痛々しい程に張り詰めた顔をしていたのを何度か垣間見たことがあった。彼の気持ちを思うと軽々しく慰めるのも躊躇われた。ソフィーの病が治癒し、二人とも心から笑えるようになればいいのにとレスリーは願う。
ソフィーの世話をしているとはいえ、レスリーが彼女の病を癒せるわけではない。だからこそ、せめて彼女ができることはなんでもしたかった。ソフィーの為にも、ギュスターヴの為にも。

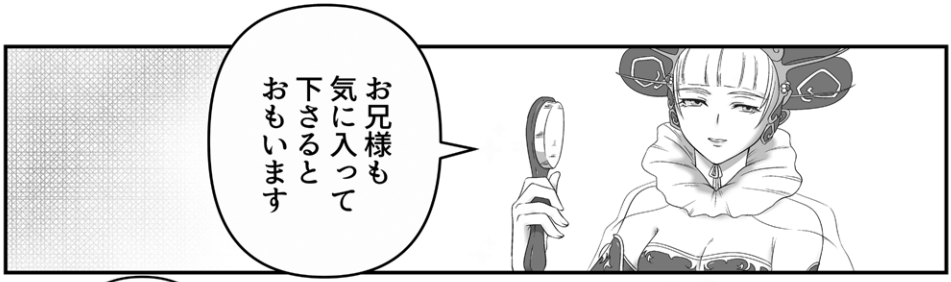
「林檎で何が作れるんだ？」
「そうね、そのまま食べてもいいし、焼いてもいいし、アップルパイ……は少し重たいかしら？　すりおろして蜂蜜を垂らしてもいいかもね」
余ったらジャムにして、と話し続けるレスリー。相槌をうちながらゆっくりと歩くギュスターヴ。そんな彼らを少し離れた場所から見つめる二人組がいた。
「あいつはあれでほんとうに気づいてないのか？」
フリンに引き止められたケルヴィンが胸の前で腕を組んで首をひねった。彼からすれば、レスリーの想いが誰に向いているかは明らかだ。そしてギュスターヴの彼女に対する特別な感情も。

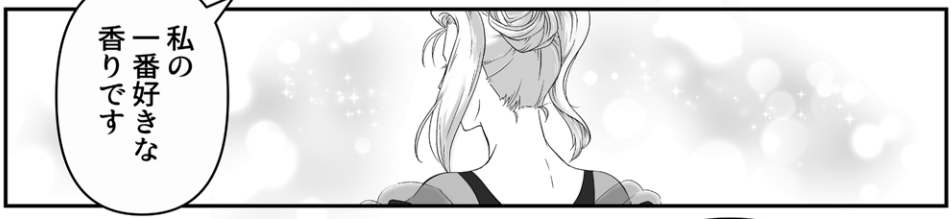
「うーん、どうかな……？」
フリンは曖昧に笑い返した。彼にはまだ『そういうこと』はよくわからなかったが、ギュスターヴがレスリーに向ける眼差しのあたたかさに、彼の胸もまた明るくなるのだった。

了

Romancing Saga -Minstrel Song-
Jean ♥ Myriam
2022.xx.kaito


香油：いがらし
お兄様も
もっとお手入れを
するといいんです
ではお前に
任せよう
私よりうまく
出来るだろう
こちらを
差し上げますから
ご自身で
なさって下さい
香油か
ええ　そうですわ
これを付けて
梳けば
艶がでて
まとまりますわ


お兄様も気に入って下さるとおもいます


私の一番好きな香りです

なるほど確かにこの香は好ましいな

衣類には何もつけてないわ
ねーねーカタリナってなんかいい匂いするけどコロンとかつけてるの？
えーじゃあなにつけてるの？
すん
くんくん

髪のケアに香油を少し…
じゃあ髪のばしなよ！カタリナって髪長い方が絶対似合うよー
そ…
そう考えておくわ

カタリナの帰還が少しでも早いといいですわねお兄様

そうだな

お兄様からカタリナの臭いがする！疑似的に二人が一緒に居る様に感じる！これよ！

これからもずっと、あなたと共に

水波

※話の都合上、村一番の美人に名前（セーラ）をつけています。
※また原作にいないキャラ（村一番の美人の友人）が出てきます。ご了承下さい。

冒険者さん達のおかげで、私は心から愛する人と結婚することができました。村の皆さんやお城の皆さんから盛大に祝福され、私はようやく安心して暮らすことが出来るようになりました。

これで愛する鎧の王とずっと一緒に居られる。もうそれだけで私は天にも昇る気持ちになっていたのです。――けれど、この時の私に言いたい。現実はそんなに甘くないのだと。

＊ ＊ ＊

「……はあ」

城の一角に王が作ってくださった私専用の庭。そこには私が植えた色とりどりの花が咲いています。美しいその花たちは私の心を癒す存在ではあるけれど、溜め息が溢れてしまいました。

「もう五日も王とまともに顔を合わせられないなんて……」

村にいた時、王は三日に一度は会いに来て下さっていました。でも、それは王が私のために時間を作ってくださっていたのだと今ならわかります。

この世界には三人の王がいらっしゃり、それぞれ土地を治めていました。けれど、剣の王も盾の王も殺された今、この世界を治めるのは鎧の王ただ一人。今は他の王が所有していた土地などの引き継ぎに追われていて普段よりも輪をかけて忙しくされているのです。彼の部下の皆様もそうです。何も知らない村娘だった私の入る隙などこれっぽっちもありませんでした。

「はあ……」

不甲斐なさからか、気が付けば溜め息ばかりが出てきます。何か私にも手伝うことができればいいのに。仕事を手伝えなくて申し訳ないことを伝えれば王は「そなたがいてくれるだけで余は幸せだ」と仰りました。けれど、私は貴方の力になりたいのです。

私にできることはなんだろうと考えた結果、掃除や洗濯、炊事なら今までやっていたし私でもできると思って申し出てみました。しかし「お妃様にそんなことはさせられません！」と恐縮され断られてしまいました。

あまりにも遣る瀬無くなった結果、村を出る際に会えなくなるなら文通をしよう、と言ってくれた親友に先日手紙で愚痴ってしまいました。その返事はもうきてもいい頃ではありますが、中々来ません。あんなことを書いてしまって愛想を尽かされたのかなと書いたことを後悔してしまい、また溜め息が溢れてしまいます。

「はあ……今日は何をして暇を潰そうかしら……」

「お客様！　お客様！　勝手に出歩かれては困ります!!」

途方に暮れていたその時、兵士さん達の慌てる声が聞こえてきました。誰かいらっしゃったご様子です。城の隅っこに居たものですから全く気づきませんでした。王妃として挨拶せねばと立ち上がれば、聞き覚えのある懐かしい声が届いてきます。

「あのねえ、アンタたち城で生活してるんならあの子の居場所くらい把握しておきなさいよ馬鹿じゃないの!?」

「なんだと!?　小娘の分際で生意気な……！」

「あら、客に手をあげようっての？　王妃様の友人に手を挙げたらアンタの王様の名誉に傷が付くんじゃなくって？」

「ぐぐぐ……」

会話から漂う不穏な気配に慌てて駆け寄ればギリギリどうにか間に合ったようです。ああ、何もかも懐かしい。その声も、その姿も。

「アン！　アンなのね!!」

「セーラ！　よかった会いたかった!!」

私は村での大親友だった彼女の名前を叫びました。すると私の声に彼女はすぐに身を翻し、私たちは互いに抱きしめあったのです。

＊＊＊

「もー、ほんと頭固いわねここの兵士！　アンタの部屋に行ったらいなくてパニクるし私が探すって言えば勝手に動くなって怒るし」

「だってそれが仕事だもの。もしも不審者だったら、城の中を勝手にウロウロされたら困るわ」

「ま、アンタに無事に会えたから別にいいけどね」

とりあえず私の部屋へと案内し、友人と久しぶりに話したいからと兵士さんやメイドさんに説明して二人きりにしてもらいました。アンはと私はテーブルを挟んで私は相向かいに座りました。

「でも驚いた。こっちに来るなんて。ここまで来るの大変だったでしょう？」

「まあね。でもどうしてもアンタに直接会いたかったから。あんな手紙貰ったら確かめたくもなるわよ」
　ふふんと得意げに言う彼女の言葉に、私は気づけばボロボロと大粒の涙を溢していました。遠路はるばる会いに来てくれただけでも嬉しいのに、私のことを心配してくれていたのです。
「アン……よかっ、よかった……」
「やだもう泣かないでよ！　……全く、アンタのその我慢出来るところはすごいけど、溜め込んで自分がやばいことになったら元も子もないんだからね？」
　アンがそっとハンカチを渡してくれました。ありがたく借りて溢れてくる涙を拭いますが、あっという間に濡れてしまいます。
「うん……うん……ありがとう……」
「まあ、とりあえず溜めてること全部この大親友に言いなさいな。話なら幾らでも聞いてあげるわよ」
　彼女のその言葉に私はまた涙が溢れてきて、私の方へと身体を寄せてくれた彼女の胸を借りて、子どものようにわんわん泣きじゃくってしまったのでした。そしてゆっくり、自分の思っていることを彼女に全て伝えたのです。
「……なるほど。つまりアンタは忙しくしてる王様の手伝いがしたいと」
「うん……」
「そのこと、王様には言ってみた？」
「私が仕事を手伝えなくて申し訳ないですって言ったら『そなたがいてくれるだけで余は幸せだ』って仰ってたから……なんだか言い出せなくなって……」
「王様も王様ね!?　っていうかあんたたちもうちょっとちゃんと話をすべきだわ。一方通行にも程がある！」
「でも、今はとても忙しそうにされているから……」
「は？」
　その時、アンからは低く地を這うような声が聞こえてきました。あ、これはとても怒っているときの声です。
「五日もまともに顔を合わせない夫婦なんて夫婦の意味がある？　時間は作り出すものなの。待ってくれるものじゃないわ」
「う、うん」
　ずいっと前のめりになってアンが言います。その怒りのオーラと彼女自身の迫力に私は後ろにのけ反りながらコクコクと頷きました。
「セーラ、いい？　アンタもっとワガママ言っていいの。もうアンタを縛るような存在はここにはいないわ。仕事が忙しいのを言い訳に家族に迎えた者をほったらかしにするような輩は論外にも程があるわよ」

「……いいの、かな。もっと話がしたいと言って」
「いいのよ」
私のポツリと呟いた言葉に、彼女は微笑みながら肯定してくれました。そこから自分の思いが、やりたいことが、堰を切ったかのように出てきます。
「貴方の仕事を手伝いたいって言っていいのかな」
「いいんじゃない？　そうすれば一緒にいる時間も増えて一石二鳥よ」
そして、ニコニコと笑ってアンが肯定してくれたことに勇気をもらった私は、ついにずっと言えずにいた思いを口にしていたのです。
「もっと、もっと、ずっと一緒にいたいの！」
「……だそうですよ王様。この子の話、ちゃんと聞いてました？」
「えっ」
アンのその言葉に驚いたと同時に、私の部屋のドアが勢いよく開かれました。するとそこには、我が最愛の王がいらっしゃったのです。そうして王はゆっくりと私の元へ歩いてきました。
「セーラ、ごめんね騙すような形になっちゃって。アンタからの手紙を受け取ってから私、直接王様と手紙でやりとりしてたの」
「ええっ」
「我が妻よ……そなたの言い分も聞かず、すまなかった。もっとそなたの話を聞けば良かったのだな」
「いいえ、いいえ、私の方こそきちんと言えば良かったのに！」
「ほら、だからちゃんと話せって言ったでしょう？」
私たちの話を聞いて、アンがふふんと得意げな顔で言います。
「……アン……ありがとう」
「んじゃ、私は帰るから。あとは夫婦水入らずでどうぞごゆっくり？」
「え、あ、アン!?」
そうして、彼女は笑顔で手を振りながら部屋を後にしました。後には、私と王が二人きりで残されます。久しぶりにきちんと拝見した王の姿は、何処か疲れたような、けれども嬉しそうなご様子でした。
「いい友人を持ったな」
「はい……あの、ええと」
完全に二人きりという空間に、私の方が無駄に緊張してしまって、何か話さなきゃ、けれど何を言えばいいのかとしどろもどろになっていると、王の方が私に尋ねてきました。

「我が妻よ。私の仕事を手伝ってくれるという話は……本当か？」
「えっ!?　は、はい。政の話はさっぱりな小娘ですが、貴方がどんな仕事をどんな風に行っているのか知りたいですし、貴方の手伝いをしたいのです」
　私が王の目を見ながら震える声で伝えると、王はゆっくり頷いてから答えて下さいました。
「そうか、そなたはそんな風に思ってくれていたのだな……明日から、早速手伝ってもらっても良いか？」
「もちろん！　今すぐだって構いません」
　王から直接仕事を手伝う許可をいただけて、私は舞い上がってしまいました。私が張り切って準備をしようとしたその時、王が笑って声をかけてくださいます。
「ありがとう、我が妻よ。だがな、今日は大臣たちに叱れてしまったのだ。今日はもう休めと」
「えっ、あ、あのどこかお加減でも悪いのですか!?」
　嬉しい気持ちから一転、まさかの出来事に身体が溶けて消えるような恐怖に襲われます。何処か具合が悪いなら、お医者様や薬を手配せねばと看病のことを考えはじめたその時、王が少し言いにくそうに口を開いたのでした。
「いや、その、体は大丈夫だ。ただ……」
「ただ？」
　私が鸚鵡返しに尋ねると、王は顔を少し背けながら、喉から絞り出すような声で言いました。
「……そなたが、恋しすぎて仕事に手が付かなくなってしまったのだ……」
「まあ！　それなら私も一緒です。私も貴方が恋しすぎてずっと貴方のことを考えていたのですから」
　まるで子供のような顔で可愛らしいことをいうものだから、私はいじらしくなってそのまま我が最愛の人をぎゅっと抱きしめていました。そうして王も私を抱きしめて下さいます。
「これからは、こうなる前にもっと色々話そう。それに……もっとこうして、触れ合いたい、と思う」
「私もですよ。もっとたくさんお話して、触れ合いたい」
　そのまま私たちはしばらくお互い見つめ合い、ゆっくり顔を近づけ口付けを交わしました。これからもずっと、共にいるのだと願いを込めて。

【終】

密航旅行 by カシワメ
いい天気だねー
ついたよー
私の旅立ちにはなかなかではないか

父に海賊って以来だよ
私に海鮮料理
させるとは、全く変わった事
を覚えさせてくれたよ

ゼーニャ追われた密航者の
お手製料理で船旅
これも悪くないね
操船以外
かちっきしず

ふっ

また
一緒に帆を上げ
ようね

面白い。
次はもっと楽し
ませておくれよ

みたいなもの

ルージュ×アセルス

まわる夕焼け

じょぬ

ルージュはろくに行き先も確認せずシップに乗り込んだ。早く、一秒でも早く、ここを離れなくては。逃げ出したことは、まだ気づかれてはいないようだ。

ルージュは九歳。マジックキングダムの裏の学院で魔術を学ぶ術士の卵だ。学院の外に出ることは校則で禁じられている。ましてやマジックキングダムの外に出るなど、どんなに寛大な処分が下ったとしても退学は免れないだろう。三女神への信仰心を重んじる厳格な国だ。脱走者の末路など、恐ろしすぎて想像もできない。それでもルージュは逃げ出してしまった。もう、あとには引けない。

「ルージュ、実はあなたには双子の兄がいるのです」

「兄さんの名前はブルーといいます」

「双子として生まれた者には、大切な使命があります」

「双子の兄弟を殺して完璧な術士になるという使命です」

昨日、教授から告げられた言葉が心の中で渦を巻いていた。期末試験の成績優秀者に対して行われる「優秀者面談」でそう告げられたのだ。彼女はあくまでもそれが当たり前のことであるかのように語った。

「でも、先生。人を殺すことは、悪いことですよね」

膝が震えるのを懸命に隠しながら、ルージュは尋ねる。教授は淡々と答えた。

「そうですね。ただし、マジックキングダムで双子として生まれた術士が片割れを殺すのは、例外です。この国では何よりも正しいことです。三女神様の思し召しなのですよ」

夜が明けて、気がつけばルージュは寮を飛び出していた。学院を囲む壁は高い。ルージュは初めて使う術で壁の一部を壊し、抜け出した。そしてシップ発着場を目指してひた走ったのだった。

到着したのはマンハッタンだった。初めて見る摩天楼にルージュは目を奪われる。大人たちが、どこへ向かうのか足早に通り過ぎていく。ルージュは人混みに流されるように歩き、多くの店が立ち並ぶ場所へと迷い込んでいた。階段をいくつか上ると、青い海と街並みを見渡すことができた。いくつもの橋に人々が行き交っている。

海はただ青く、否が応でも双子の兄のことが胸をよぎる。

会ったこともない兄がいるということ。その兄が、自分とは対照的な青の名を持つこと。青は殺さねばならない色だということ……。
「ねえそこの君」
ルージュに声をかけてきたのは中年の男だった。突然のことにルージュは戸惑う。
「タレントになる気はない？　君みたいにかわいい子だったらすぐに売れっ子になれるよ」
ルージュには意味がよくわからない。
「まずは養成スクールに入所して、簡単なレッスンを受けてもらうんだ」
答えあぐねていると、男は慇懃無礼な笑みを浮かべる。
「最初の一ヶ月は無料だから、ぜひ契約してほしいな。こんなチャンス、逃したら損だよ！」
「ちょっとやめなよ。その子、困ってるでしょ」
凛とした声が、しつこい男を遮る。栗色の短い髪が朝日にまぶしい、年上の少年だとルージュは思った。ルージュよりも頭ひとつ分、背が高い。険しい顔で男をにらみつけている。男はたじろぎながらも、図々しく話を続けた。
「そういう君もかわいいね。タレントになってみない？」
「クーリング・オフ」
冷やかに返されて、男は言葉に詰まる。
「う……」
「あれ、こんなところに防犯ブザーが……」
カバンにつけられた何かを見せられると、怪しい男は慌てて逃げていった。
「アセルス!!」
「大丈夫?!」
どこかから少女が二人、心配そうに駆け寄ってきた。
「大丈夫大丈夫、ごめんね、この子ほっとけなくて」
アセルスと呼ばれた年上の少年は少女たちに笑みを向けてから、かがんでルージュの顔を覗き込んだ。
「あなたは大丈夫？」
「は、はい……」
「よかった！　いやだよね、ああいう悪い人、女の子がひとりで歩いてるところ狙うんだから……」
ルージュは考える。女の子がひとり、とは……？　誤解に気付いたルージュは遠慮がちに訂正する。
「あの……僕、男ですけど……」
「ええっ?!　男の子なの?!　……ごめんね、間違えちゃった……。髪、長いから……」
肩ほどの長さで切りそろえた髪は、キングダムでは短い部類に入る。これでも他のリージョンでは長いほうなのか、とルージュは少し驚く。

「いいんです。それより、お兄さん、助けてくれてありがとうございました」
ルージュは頭を下げる。しばしの沈黙。
「……お兄さんって、私のこと……？」
もしや、とルージュは気まずくなる。
「私は女だよ!!　スカート履いてるのに……」
アセルスは困り顔だ。友人たちはその肩をそっと叩いて励ましの言葉を送る。
「あきらめなさい、アセルス」
「男子よりも男らしい、それがアセルスのチャームポイントだから！」
「いいけどさー。慣れてるから」
「えっと、アセルス……お姉さん。ごめんなさい、僕、他のリージョンに来るのが初めてだから、いろいろと知らないことばかりで……」
ルージュが慌てて謝ると、アセルスは明るく笑う。
「あ！　ごめんごめん！　全然気にしなくていいよ！　私、よく男に間違われるから慣れてるの！」
その笑顔で、気まずい雰囲気がほどけていく。ルージュは、よかったと胸をなでおろし……そしてなぜか、もう少しこの人と一緒にいたいと、そう思い始めていた。
「それじゃあね。変な人には気をつけるんだよー！」
「あの！」
二人の友達とともに去っていこうとするアセルスを、ルージュは呼び止める。ありったけの勇気を振り絞った。
「僕も一緒に行ってもいいですか……？」
アセルスと二人の少女が顔を見合わせる。アセルスは、また少しかがんでルージュと目を合わせた。
「あなたのお名前は？」
「ルージュ」
「ルージュくんのおうちはどこなの？」
「ルミナス」
ルージュは嘘をついた。マジックキングダムの名を出せば、教授たちに見つかる可能性が高くなるのではないか。そんな不安が胸をよぎったからだ。
「じゃあ発着場まで一緒に行こう」
「僕、帰りたくない」
「どうして？　……おうちの人と喧嘩したの？」
ルージュは曖昧にうなずいた。本当のことなど話せるわけがない。アセルスが振り返って友人たちに言う。
「連れて行ってあげようよ！　困ってるみたいだし……！」
「大丈夫だよ」
「私も構わないよ」
少女たちは優しかった。

アセルスが手を差し伸べる。
「行こうか、ルージュくん」
「うん」
ルージュはその手をとる。こうして、ルージュは年上の少女三人と共にこの大都会を歩くことになった。

「私たち、修学旅行でマンハッタンに来たの」
「今日は自由行動なの。好きな三人で班を作って」
歩きながらアセルスたちが今日の目的を話してくれた。
「博物館か美術館に、二ヶ所以上行くこと。あとは自由」
「だから急いでマンハッタン科学博物館とトリニティ現代美術館をまわって」
「そのあとパレットタウンに行くんだ」
「パレットタウン？」
「そっか、ルージュくん知らないんだね。マンハッタンで一番大きい遊園地だよ」
「私、観覧車乗りたい！」
「ジェットコースターも乗らなきゃね」
アセルスたちは楽しそうだ。遊園地というのがどういう場所かルージュは知らないが、彼女たちの様子を見ていると期待に心が弾んでくる。
そのとき、ぐぅと腹の虫が鳴った。恥ずかしくなってルージュはうつむく。そういえば朝から何も食べていない。
「おなかすいてるの？」
アセルスが朗らかに笑う。
「ちょうどよかった。私たちもお茶しよう！」
「今デニーズでシャインマスカットやってるよね」
「パフェ食べたい～」
少女たちもアセルスに賛成し、あっという間にルージュはデニーズとやらの席に座らされていた。
「はい、ルージュくん、メニューどうぞ」
「めにゅうってなんですか」
万事が万事この調子だったが、アセルスたちは嫌な顔ひとつせず、いろいろなことを丁寧に教えてくれた。メニューにはたくさんの色鮮やかな料理が載っていて、その中から自由に選べるということ。少女たちのお目当てのシャインマスカットは期間限定のデザートだということ。
寮での給食に慣れきったルージュには、自分で食べたいものを選ぶということすら新鮮だ。アセルスにも手伝ってもらって生ハムとサラダの朝食に決めると、テーブルに置かれたボタンで店員が呼び出される。アセルスがてきぱきと全員分の注文を済ませる。さりげなくルージュの分のデザートも注文されていた。背の高いグラスに白と黄緑色が交互に盛り付けられていて見た目にも美しかった。

初めて見るパフェというものをルージュが不思議そうに見ていると、白は生クリームで黄緑色はマスカットだとアセルスが教えてくれた。学院で食べたことのある葡萄は紫色のものばかりだったから、黄緑色のものもあるのかとルージュは驚く。マスカットの爽やかな甘さを味わいながら、会話も弾んでいた。

「アセルスさん、クーリング・オフというのはどういう術なんですか？　詠唱しただけで敵が逃げていきましたが」

「うーん、ああいうキャッチセールスにしか効かない言葉かもね」

「キャッチセールスというのはモンスターですか？　あの人はモンスターなんですか？」

「ルージュくんって面白いね！」

アセルスが術士ではなく、防犯ブザーも術具ではないことを、アセルスは楽しそうに教えてくれた。

博物館も美術館も、ルージュにとって目新しいことばかりで興味深かった。外の世界がこんなに面白いなんて、それまで想像もできなかった。ルージュは校則を破ってしまったことへの不安などすっかり忘れてしまっていた。

まだ日の高いうちにルージュたちは目的の遊園地に到着した。ルージュはジェットコースターで絶叫し、メリーゴーラウンドで目を回し、お化け屋敷ではアセルスにしがみついて震えていた。アセルスたちにとても心配されたが、ルージュは心から遊園地を楽しんでいた。

いつしか遊園地には西陽が差していた。アセルスたちが最後の乗り物に選んだのは観覧車だった。まるで巨大な車輪だ。見上げれば頂上は遥か高く、夕焼けを背にいくつものゴンドラがゆっくりとまわる。

はしゃぎながら乗り場への階段を駆け上がり、アセルスたち三人は次々と観覧車に乗り込んでいく。動き続けるゴンドラにうまく乗ることができず、ルージュはひとり取り残されてしまった。

「みんなは先に行ってて！」

言うやいなや、アセルスが閉じかけた扉を半ば無理やり開けて飛び降りてきた。

もし怪我でもしたら、と心配でルージュは目を覆いたくなったが、アセルスの身のこなしは軽やかだった。

「ルージュくん、大丈夫？　ごめんね、慣れてないんだもんね。今度は乗せてあげるからね」

アセルスが突然、ルージュの両脇の下に手を差し入れて後ろからしっかりと抱きしめた。ルージュは狼狽して言葉も出ない。どうして、いきなり、何のつもりで、少しいい匂いがする。

「そろそろだよ！　いち、にの、さん！」
ひょい、とアセルスがルージュを持ち上げる。とん、と観覧車の床に足がつく。続けてアセルスも乗り込んだ。
「乗れたね、ルージュくん！」
アセルスは朗らかに笑う。抱っこされてしまった。もう九歳にもなるというのに。恥ずかしくて心臓が早鐘を打つ。
「ルージュくん、どっか痛くなかった？　大丈夫？」
「は、はい、大丈夫です……」
向かい合って一息つく。夕陽に照らされて、アセルスの栗色の髪がきらきらと輝いていた。
「ルージュくん、予想より重かった……。烈人くんと同じくらいかなって勝手に思ってたからさ……」
「れっとくん？」
「あ、近所の子でね、よく一緒に遊ぶんだ。弟みたいな感じ。六歳なの。ルージュくんは、いくつ？」
「九歳」
「やっぱり烈人くんより大きかったかあ……いつもの調子で抱っこしちゃったから……なんかごめん」
「そんな、謝らないでください。僕のせいでお友達と別々になってしまって、本当にごめんなさい」
「ルージュくん！」
アセルスがまっすぐにルージュと目を合わせる。
「私は全然、気にしてないよ！　だからルージュくんも気にしないで、楽しもう！　ごめんごめんって言い合ってるうちに一周しちゃうよ」
笑顔がまぶしくて、ルージュは目を逸らす。
「……アセルスさん、ありがとうございました」
「どういたしまして。ほら、外、見てごらん」
道行く人々が、ひしめき合う建物が、豆粒のように小さく見える。空は美しい茜色に染まり、摩天楼の向こうでは海が黄金色にきらめいていた。小さな箱の中でふたりきり。胸が高鳴る理由など、ルージュにはまだわからない。ふわふわと浮かぶような、名前を知らない心の動き。きっとこのゴンドラが空に浮かんでいるからだ。まわって、ゆれているからだ。きっとそうだ。そうに違いない。
眼下の景色についての感想をひとしきり語り合うと、アセルスが何気なく話し出す。その話題でルージュは一気に現実に引き戻された。
「ルージュくんって、きょうだいはいるの？」
「いないよ」
ルージュは嘘をついた。
「そっか。私もいないんだ。もうひとりくらい、ほしかったかも」
アセルスはまた窓の向こうを見る。

「烈人くんはさ……、あ、さっき話した近所の男の子ね。烈人くんとはしょっちゅう会ってるし、小さい頃からずっと面倒見てるから、ほんと弟みたいな子なんだけどね。同じ家に帰るきょうだいがいたらなあって時々思うんだよね」

きょうだいとは、そういうものなのだ。たとえ血を分けたきょうだいがいなくとも、慈しみ可愛がる対象を、弟みたいな存在と呼ぶのだ。それなのに自分はどうだろう。実の兄を殺すことが正義であり使命であると教える大人たちの元で育てられてきた。一歩でも外の世界に出てみれば、そんなことが正義であるはずがないことは明白なのに。

ルージュは賢い少年だった。相手に合わせて場を持たせるために何を言えばいいか、すでに心得ていた。

「僕は……お兄ちゃんかお姉ちゃんがいたらよかったなって思います」

「わかるー!! 宿題教えてもらったりとかできるし、いいよねー!」

嘘に嘘を塗り固めても、このひとときを楽しいものにしたかった。その気持ちだけは嘘ではなかった。

アセルスが姉だったらどんなによかっただろう。マジックキングダムではないリージョンで、使命など課せられずに、この明るく優しい人の弟として生まれていたら。考えても仕方のないことだ。ゴンドラはもうじき地上に戻る。彼女たちと過ごせる時間も終わりに近づいていた。

ルージュたちが遊園地を出ると、美しい夕焼けを背にひとりの女性が立っていた。

「ルージュ。帰りますよ」

マジックキングダムの担任の教授だった。とうとう見つかってしまった。

「おうちの人?」

アセルスが尋ねる。

「……先生です」

ルージュはうつむく。教授は静かに待っていた。ルージュは振り返り、アセルスを見上げた。

「アセルスさん、僕を……」

僕を連れて逃げてくれませんか。そんな言葉が喉から出そうになる。しかし逃げてどうなるというのか。どこまで逃げればいいのか。そんな、あてもない逃避行に、この優しくて凛々しい人を連れていくわけにはいかない。そんな宿命を背負わせてはいけない。

伝えたい気持ちをすべて飲みこんで、ルージュは言う。

「アセルスさん、みなさん、今日は僕を助けてくれてありがとうございました」

「どういたしまして」

アセルスとルージュは握手を交わす。

「じゃあね、ルージュくん！　またどっかで会おうね」
「さよなら、アセルスさん」
　また会いたいとルージュは思った。おそらくもう二度と会うことはできないだろうことも、わかっていた。

　教授がゲートの術を使い、ルージュはマジックキングダムの学院に連れ戻された。
「ルージュ。夕食は私の部屋に運ばせますから来てください。優秀者面談の続きがあります」
　罰を言い渡されるのだろうか。不安に思いながらも、ルージュは言われた通り教授の部屋に向かった。
「僕はやっぱり退学になるのでしょうか」
　ルージュは尋ねた。運ばれてきた二人分の夕食がテーブルに置かれている。
「……退学には、なりませんよ」
「でも、校則では……」
「ルージュ。心配しないで。私は怒っていないから、今日のことを話してごらんなさい」
「怒ってないんですか」
「ええ。だから、話を聞かせて。ごはんも食べましょう。冷めないうちに」
　ルージュはしばらくの間、教授の言葉を信じられずに黙っていた。優秀者面談の一環として教授と一緒に夕食をとるというのも、学院の外に出たのに教授が怒っていないというのも、彼の持つ常識ではありえない話だった。教授は微笑む。
「あのお姉さんたち、優しそうでしたね。お名前はなんというの？」
「えっと、いちばん髪の短い人がアセルスさんで……」
　戸惑いながらも、ルージュは一日を一緒に過ごしてくれた年上の少女たちのことを思い出すと楽しい気分になってくる。教授に促されるままマンハッタンでのできごとを話した。
「博物館では大昔の生き物の化石があって……」
「遊園地のお化け屋敷が怖かったです」
「アセルスさんが観覧車に乗せてくれました」
　いつもは厳しい教授が嬉しそうに話を聞いてくれる。きっとひどく叱られると覚悟していたのに、なんと素晴らしいひとときだろう。アセルスたちと一緒に食事をしたときと同じように、教授との夕食も心から楽しかった。
「ルージュ、食後のお茶は何がいいかしら。まだ紅茶は早いかな。ジュースのほうがいい？」
「ジュースがいいです」
「マンゴージュースがあるのよ」

教授が運んできたのは、鮮やかな黄色の飲み物だった。
「きれいですね」
「ちょっとお高いのよ。駅ナカの成城石井で買いました」
「マンハッタンで、ですか」
「そうよ」
そういえば、博物館に向かう途中、電車を乗り換えたときにそんな名前の店を見かけたような気がする。ルージュを探しに来たのだろうに、教授がそんな寄り道をしていたというのは意外で、なんだか親しみがわいた。
「先生、ありがとうございます。いただきます！」
すっかり心が弾んでいたルージュは、少しも疑問を抱かず、そのジュースを口にした。
ルージュはまだ知らなかった。キングダムの大人が、目的のためにはどんな手段も厭わないということを。例えば、子供の飲み物に魔法薬を盛るようなことさえ、平気でやってのけるということを。子供を油断させるためだけに、楽しい夕食の席を設けてみせるということも。
「先生、僕……少し……眠くなって……」
「そう？　大丈夫ですよ。ここで寝ていいからね」
「ありがとう……ございます……？」
それを最後にルージュは意識を手放した。

目覚めると朝だった。すぐそばに教授がいた。
「ルージュ。昨日のことを覚えていますか」
「……僕は……」
なぜ教授の部屋にいるのか、そのあたりの記憶がどうも曖昧だった。
「僕は昨日、優秀者面談のために先生の部屋に来ました。双子の兄さんがいるって話を聞いて、その後……」
教授は黙ってルージュを見つめていた。
「その後、どうしたんでしょう、僕」
ルージュが恐る恐るつぶやくと、教授は柔和な笑みを浮かべた。
「期末試験の疲れが出たのでしょう。丸一日、ここで眠っていたのですよ」
「丸一日……ですか?!」
「ええ。面談に来たのはおとといのことです。起きないから心配しました。体の調子はどうですか」
「……たぶん、なんともないです」
「ならよかった」
叱られるかと思ったが、教授は優しかった。
丸一日ここで寝ていたというのは驚きだ。しかし彼女がそういうのだから、そうなのだろう。眠りすぎたせいなのか、少し気怠い。

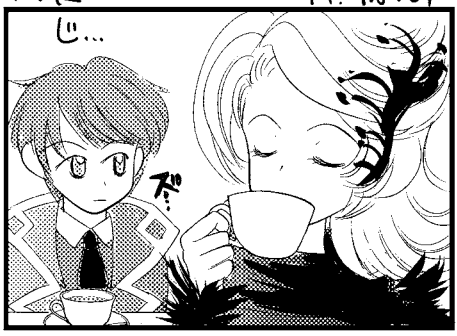
そして、つかみどころのない、小さな違和感があった。
「先生、僕、誰かにまた会いたいって思ったような気がするんです。でも、それが誰のことなのか思い出せない」
しばらくの沈黙があった。
「……ごめんね、ルージュ……」
教授は小さくつぶやくと、ルージュを抱きしめた。そんな行動は、いつも厳格な彼女には似つかわしくない気がした。ルージュは戸惑う。彼女は声もなく震えていた。
「先生、どうして泣いているんですか」
彼女は答えない。きっと、幼い彼には話せない何かがあるのだろう。賢いルージュは問いただすようなことはせず、待っていた。
「ルージュ。あなたが会いたいと思ったのは、きっと双子の兄のブルーです。生まれる前はずっと一緒だったのですから、また会いたいと思うのはとても自然なことです」
長い沈黙の後、彼女は口を開いた。いつもの厳格な微笑みをたたえていた。
「あなたが完全な術士となるためには、双子の片割れのブルーに会って、戦わなければなりません。ブルーに勝つことで、今まであなたに多くの学びを与えてくださった女神様に恩返しができるのですよ」
ルージュは考えた。そんな使命と、自分の心に、何ひとつ折り合いをつけることなどできていない。しかし、女神様の与えた使命ならば、それは大切にしなくてはいけないことだ。もし逆らって退学にでもなれば、生きていくすべなどルージュにはないのだから。
「はい、先生」
ルージュはいつだって、おとなしく聞き分けのいい子供だった。そうやって生き抜いてきた。ほかの生き方など知らない。

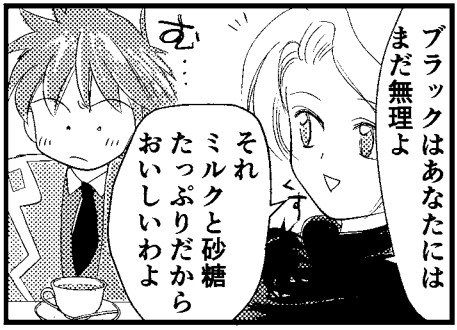
運命の糸は複雑に絡み合う。アセルスと再び出会うことになるなどと、ルージュには知るよしもない。少年の日の優しい思い出は、故国の狂気によって記憶の彼方へ溶け去ってしまった。やがて、一度ならず二度までも、ルージュとアセルスの絆はマジックキングダムの呪縛によって脅かされることになる。そんな未来は露知らず、幼いルージュは使命を胸に努力の日々を送り、アセルスはありふれた高校生活を楽しむのだった。
再会の日まで、あと十三年。

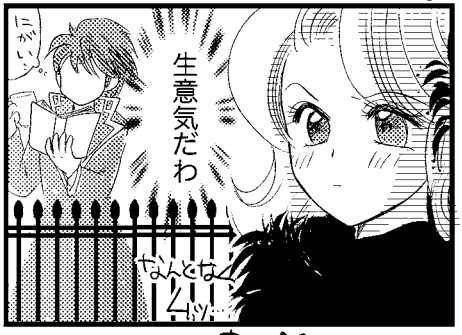
終

成長

作.りほいみ

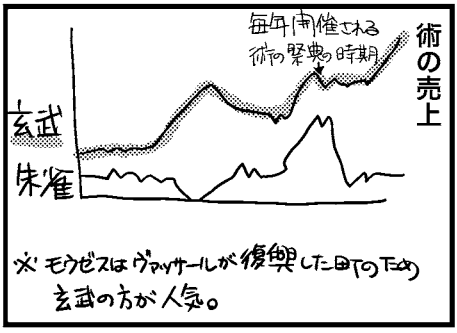


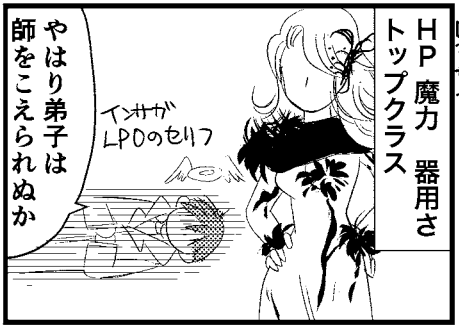


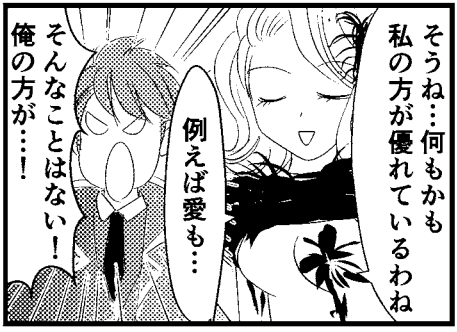


キュン♥

あなたを超えたい







おしまい

ボルウン良いよね…!!

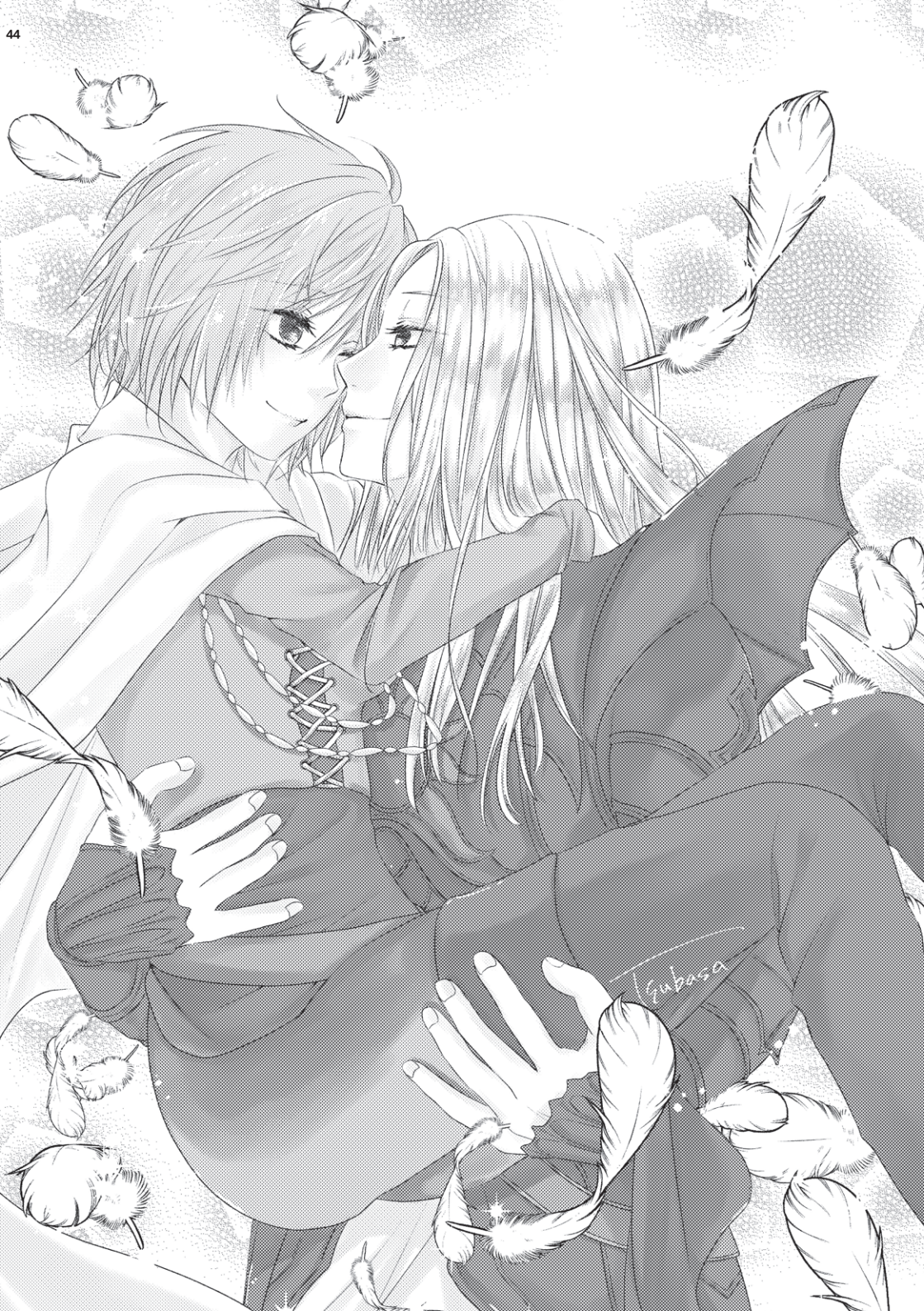
ロマサガ3当時よりウンディーネとボルカノがケンカしてて「元師弟!? めっちゃ年齢離れてやないか??
仲良くケンカしはる状態だけど この2人何?」と思っておりました。
そしてエンパラーズサガで「ウンディーネ追憶」のイラストを
見…「えっ! この見た目、ボルカノ何歳なんだよ!!
ウンディーネの服もけしからん!! こんな師が
となりにいたらボルカノは正気を保てないじゃん!」と非常に興奮したのを覚えています。(メーテルとてつろうみたいな差…!!)
テキストも「やっぱり生意気」ですって! やっぱりって何!!!
RSでは子供育てちゃってるし…すごい展開でビックリ!
あとですね、私ずっと小林さんボルカノを待ってるのですが
画集にはついに入ってなかったのがしょんぼり。イメージ画で
「対決」とか「共闘」

あっ「休戦」でも良いよね!!

って題名で載ってないかなぁーとめちゃ期待しましたね…。いつか見たいです!! 単体でももちろんOK!!

2022.3

サガスカのレオナルドxエリザベートも大スキです!!少女マンガだよ…!!ぶっきらぼうだけどリサの体を気使ったり…イイよ!!リサの「レオにくっつくな!!」もかわいい!何よりセリフの悪霊イベはもうもだえまくり!!はじめからラブラブなおすと、ずーっと2人イチャコラしてる様にしか見えないです(笑)。
レオリサもすき…!!
Reho


Tsubasa

振動覚

出海尚也

旅の途中、とある宿屋にて…

ちょっとジョー、あなたねぇ！

いつもいつもお兄ちゃんにひっつきすぎ！

ええー

あんたも一応年頃の女の子なんだからもっと気をつけないと！

そんなんじゃ嫁の貰い手いなくなるわよ！

いーよ！そしたら　ポルカ私と結婚しよーよ

こら！ジョー！

はいはい、アホな冗談言ってんなよ

こら

俺は寝るよ、おやすみな！

…とは言ったものの…

ギン
ギン
ね、寝れねぇ
ええええーーーーー

むくり
いつもならすぐに寝れるのに…何故なんだ

まさか、さっきのジョーとの会話が気になってるのか？
…あんなのよくあるジョークだろ結婚だなんて…

……

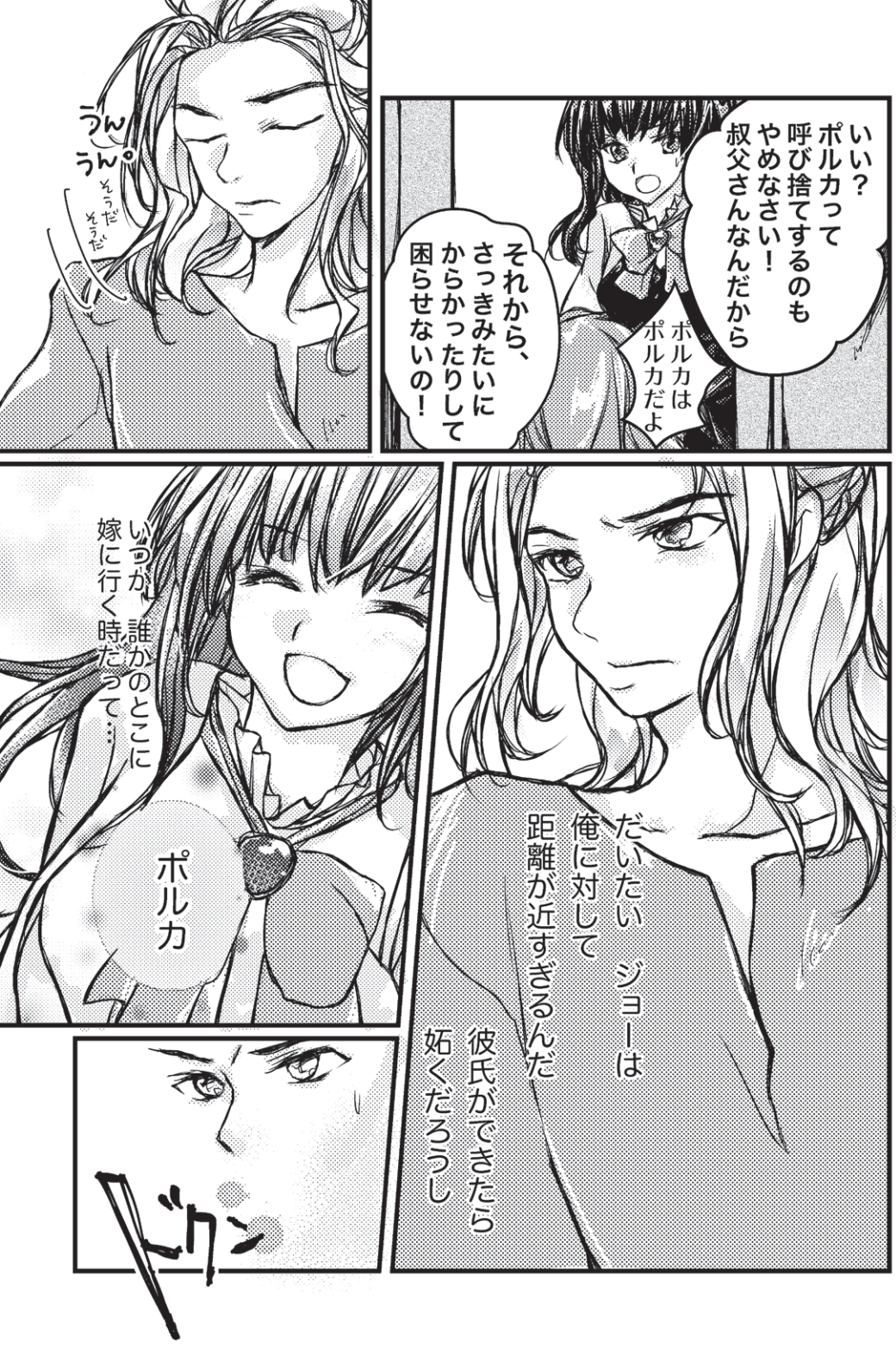
水でも飲んでくるか…

ふらっ…

ザウッ
ジョーは…
ここだいたい…
…いつも…

そっ

リズとジョーまだ話してるのか…


いい？ポルカって呼び捨てするのもやめなさい！叔父さんなんだから
ポルカはポルカだよ
それから、さっきみたいにからかったりして困らせないの！
うんうん
そうだそうだ
だいたいジョーは俺に対して距離が近すぎるんだ
彼氏ができたら妬くだろうし
いつか誰かのとこに嫁に行く時だって…
ポルカ
ドクン

それに冗談なんかじゃない、私は　本気で…
ギィー
なんだ、今の…
あっ
あっ
ポルカ？起きたの？
ごらっ
ジョー
むっ…
ポ…
ポ…
ポルカおじさまっっ！！！
!?
ぽかん…
…ぶはっ
なんだそれ、ジョー！
くはー
…

そんな無理矢理変えなくてもいい、

ポルカはポルカだし

ジョーはジョー、

そのままでいい、

…そうだろ？

うんっ！

モー お兄ちゃんはジョーにベタベタだから！

ポルカ〜 スキスキ

はいはい

ところでさっきの胸の痛みは何だったんだ…

それの正体に気付くのは、もっと ずーーーっと先の話…

我が春の再来よ

土取那智

唐突に、姫がすぐ傍にいるような気がして俺ははっと周りを見渡した。

いやそんなはずがあるわけがない。ここは買い出しに立ち寄った、ロアーヌの町にある道具屋だ。辺りを見渡してもそれらしい客はいない。当たり前だ。どうして俺は姫がそばにいると錯覚したのだろう。少し考え、それはどこからか懐かしい何かの香りからそう思ったのだと気がついた。

俺は道具屋の中を見渡してその匂いの元を探る。辿り着いたのは棚に並んだ香水だった。その瓶からほのかに香るやわらかな花の匂いに、愛しい人の面影が頭に浮かんだのだ。

「おや、その香水が気になるのかい旦那」

「いや……気になる香りだっただけだ」

店主に声をかけられ、首を横に振る。旅の最中で不必要なものを買うわけにもいくまい。断ろうとするが店主は構わず話を続けてきた。

「随分とお目が高い。それは貴族にも卸している高級品だよ。無論値は張るが、目利きの旦那になら特別にお安くしておくよ。恋人への贈り物にでもどうだい？」

にこにこと愛想よく話す店主の言葉から、瞬く間に過去の記憶が蘇ってきた。

（ああ、そうだこれは）

今は遠い昔の記憶、故郷のナジュ王国がまだあった頃の話だ。

『姫、これを……』

『あら、なにかしら？』

まだ若かったあの頃、想いを寄せていたファティーマ姫への初めての贈り物。その時の香水がこのような香りだったことを思い出したのだ。あの頃は貴婦人への贈り物への知識に疎く、散々悩んだ末に瓶の形のかわいらしさから選んで贈ったのだった。けれどもその瓶に詰められていた愛らしいその花の香りは、結果的に気品ある姫の華やかさを引き立てるものとなった。姫はこれをいたく気に入り、俺と会うときは必ずこの香りを身に着けてくれるようになったものだった。

そんな愛おしい思い出が蘇ると同時に胸に痛みが走る。

あの日俺の贈り物を喜んでくれた姫はもういない。戦争に負けて国は滅び、俺はすべてを失った。故郷も、家族も、戦友も、それまで当たり前にあったなにもかもが戦火の中に消えていった。そして、国が滅んでからの姫の消息を知るものは誰もいなかった。報せがないのならばきっと姫は生きている。そう信じて愛する人の行方を追うことだけが、あの頃の俺にとってただひとつの生きる希望だった。それがなければ、王国復興にも祖国を滅ぼした神王教団への復讐にも立ち上がる力が沸き上がらなかっただろう。

だが、いくら探せども姫のその消息をつかむことはできなかった。わずかな希望の光はゆっくりと絶望の闇に飲み込まれていった。愛する人との思い出を愛おしく思えば思うほどに、それはもう取り戻せない幸せでことを痛感してしまい胸が締め付けられる。

「――いや、俺には贈る相手がいないからな。遠慮させてもらおう」

胸を締め付ける痛みを振り払うように俺は首を横に振り、逃げるように店を後にした。愛おしい香りにこれ以上触れているのがいたたまれなかったからだ。

――そしてそれから。俺は次第に世界の滅亡に関わる戦いの運命に巻き込まれていくのだった。そして仲間らと共にそれに立ち向かい、死闘の果ての勝利を収めた後。もう二度と取り戻せないと思っていた愛しい人に再会する悲願が叶うことを、この時の俺は知る由もなかったのだった。

◇　◇　◇

アビスでの戦い、そして世界再生から月日が流れた。今の俺はロアーヌの町に居を構えている。もう根無し草の生活ができなくなった俺は、仲間との縁もあってここにひとまずの住まいを置くことにしたのだった。

「ただいま戻りました」

「お帰りなさい、ハリード」

帰宅しドアを開けると、出迎えてくれるあたたかな微笑み。それは、再会してから共に暮らすようになったファティーマ姫様だった。国を失い教団からの目を掻い潜って生きていた彼女は、身一つで生きていくために俺の知らないところで市井の生活の中に隠れ住んでいたのだと言っていた。そんな姫様からは夕食の美味しそうな匂いがした。今日は肌寒いからかスープの匂いが台所から漂ってくる。スープの蒸気にトマトの酸味の効いた香りが混じっているのに思わず頬が緩む。すっかり所帯染みた恋人の姿を、王国のあったあの頃だったならばとても考えられない光景だと思えて苦笑が浮かんだ。

「姫、今日はお土産を買ってきました。これを」

俺は片手に抱えたものを差し出した。それは、帰り道に

ふらりと立ち寄った店で購入したものだった。
「まあ、なにかしら？」
姫様はそれを受け取ると、開けてみても良いかと伺いを立ててから袋を開けた。そして、その中身を見るより先にその香りですぐに気付かれたようだった。
「ハリード、これ……」
「懐かしいでしょう？　つい思い出してしまって、また貴女に贈りたくなってしまったのです」
袋の中にあったのは香水だった。瓶からふんわりと香るその匂いは、この辺りで暖かくなる時期に咲く花のものだった。
「ふふっ、そうね。また貴方にこれを贈られる日が来るだなんて」
それは、かつての日に俺が初めて姫様に贈った香水だった。そう、あの日道具屋の店先で見つけたのと同じものだ。今再び巡りあったそれを見つけた時、嬉しくなって思わず衝動買いをしてしまった。計画性のない散財などらしくもないことをしてしまったが、姫にあの頃と同じ香りを纏って欲しい気持ちが抑えられなかったのだ。
けれども、喜んでもらえたのもつかの間。姫は残念そうに眉尻を下げて言った。
「でも、ごめんなさいエル・ヌール。折角贈ってくれたのは嬉しいのだけれど、私はもうあの頃のような少女ではないのよ。今の私にこの香りは似合わないと思うわ」
「そう……ですか」
姫に指摘されて肩を落とす。言われてみれば確かに、この香水の香りは甘く瑞々しく、これをつけるならば若い娘の方が似合うだろう。初めて香水を贈った頃ならともかく、離れていた間に歳を重ね大人の女性となった姫様には不向きになってしまった。わかってはいたことだが、実際に言われると情けないことに気落ちしてしまう。
（まあ、俺が勝手に贈りたいと思っただけだからな）
所詮は俺のエゴだ。それに喜んでもらえないのも致し方ない。落胆をなるべく潜めて香水の瓶に手を伸ばした。
「余計な買い物となってしまいましたね。これは明日にでも店に返して、今の貴女に相応しい香水を選び直してきます」
「ああ、いいえ。そういうつもりではなかったのです」
姫は香水を持つ手を引っ込めて自分の方へ引き寄せられた。
「確かにこれを身につけて外に出るのはもう年甲斐もなくて少し気恥ずかしいわ。
けれども、この香りは今も好きなのよ。これは香り袋にして家の中で楽しみたいと思うのだけれど、それではいけ

ないかしら？」
　俺の顔を覗き込んで首を傾げて尋ねる姫様に、俺は頷かないわけにはいかなかった。
「いけないことなどありはしません。貴女に喜んで貰えるならばこの上ない光栄です」
「ありがとう、エル・ヌール。この香水は思い出の香りですもの、また贈って貰えて嬉しいわ。あぁ、あの頃の思い出が蘇るよう」
　そう嬉しそうに微笑む姫に、俺は目を細めながら彼女に頷いた。
「えぇ、俺もです姫」
　姫とあの頃の思い出を分かち合える幸せにはにかみながらも、同時に思い出したのはもう希望も抱けなかったあの日の胸が裂ける思いだった。
「……けれども、実は俺がこの香りと再会したのはこれで二度目でした」
「え？」
　思わず口をついてしまった言葉。それがどういう意味なのかと首を傾げる姫に俺は続けた。
「以前この香りに出会ったのはまだ貴女と再会する前の頃でした。その時もこの香りに貴女との思い出が蘇り、愛おしく思うと同時に……胸を刺すような痛みに襲われたのです。そんな愛しい思い出ももう取り戻せない過去で、貴女はもういないのだと痛感するだけでした。それが、ただただ苦しかった」
「ハリード……」
　悲しそうに見上げる姫。しかし俺は姫と手を重ねそっと握りしめた。
「けれども今日再びこの香りと再会した時、ただただ愛しい気持ちだけが蘇ってきたのです。前にこの香りに出会った時と今は違う。今は貴女がそばにいてくれて、愛しく懐かしい思い出を分かち合うことができる。それが嬉しくて、貴女にまたこの香水を贈りたくなってしまったのです」
「……ふふ、そうだったのね。私も同じ気持ちです。今こうして、貴方と遠い日の愛しい思い出を分かち合えるようになったことがたまらなく嬉しいのですよ」
　そう言って微笑む姫の笑顔が愛おしくて、俺は彼女の背中に腕を回して抱き締めた。
「今日この香水を買った時、店主からこの香りの花の事を聞いたのです。この花は、この国で冬が去って雪が溶けて暖かくなり、春の訪れとともにいち早く開花する春の再生の象徴なのだと」
　冬という季節は砂漠の国で生を受けた俺たちには馴染みが薄いが、それでも今ロアーヌで春夏秋冬（ひととせ）の生活をしてい

れば身を切るような寒い冬も身をもって知ることとなる。冬の寒さは心まで冷えるかと思うほど厳しい。寒さに不慣れな南方育ちのこの身なればなおさらだ。

「俺は、こうして貴女と再び巡り会うまでは長い冬の中にいました。長い放浪の旅の中に、まったくの喜びがなかったとまではいいません。けれども、俺の心の中にはいつでも国を、家族を、友を、そして愛する貴女を失った悲しみがありました。ですが、俺は貴女と再会が叶った。貴女を取り戻したことで長い冬が終わり、俺に春が再来したのです」

「エル・ヌール……」

抱きしめた姫が、香水を持ったまま腕を背中に回して抱きしめ返してくる。それが嬉しくて、抱きしめる力が強くなる。

「貴女は俺の春です、ファティーマ。この胸の底から暖かくなるこの温もりを、もう二度と手放したりなどはしたくありません」

「私だってそうよ、エル・ヌール。他の何もかもを失ってしまったけれども、貴方だけでも取り戻せて本当によかった。もう二度と、離したりなどはしないわ」

そうして縋るように、温もりを分け合うように俺と姫はしばし互いに抱きしめ合った。

外ではロアーヌの町に積もっていた雪が溶け始めている。出先で大地から新たな芽吹きが顔を出しているのを見かけるようになった。寒い冬が終わり、暖かい春が近づいて来ている。そうしたら、異国のこの場所ではこの香りの花が咲くだろう。その時には彼女と花を見に行きたい。愛らしい蕾が色とりどりに花開く様はきっと壮観だろう。あるいは花束にして贈るのもいいかもしれない。両手いっぱいの活きた花の香りを胸いっぱいに吸い込んだ彼女はきっと花のように美しく微笑むのだろう。

雪解けの季節、愛しい温もりを抱きながら俺はそんなことを考えていた。

ハリ姫語り

ハリ姫とは

ロマサガ3のハリード×ファティーマ姫の
カップリングのこと。
ハリードは戦争で祖国が滅んだ王族の生き残り。
ハリードの旅の目的は国を滅ぼした教団への復讐、
祖国復興、そして戦争で生き別れになった
恋人ファティーマ姫を見つけることです。
その行く末がどうなるかは、ぜひロマサガ3
ハリード編本編をプレイして頂ければ幸いです。

・互いを想い合う深い愛情

本編中に出番の少ないファティーマ姫ですが、
その人柄を伺える設定はあります。
練磨の書に記載されたハリードの好みのタイプ
が「優しい人（姫）」とあり、ファティーマ姫
が心優しい人物だったのが伺えます。
ですが、回想シーンで姫も「私は普段のあなた
の優しさも好き」とハリードに告げる場面があり
ます。
互いに相手を「優しい」と思うほど大切に想い
合っている2人の関係が堪りません。

・特別な呼び名、呼べない名前

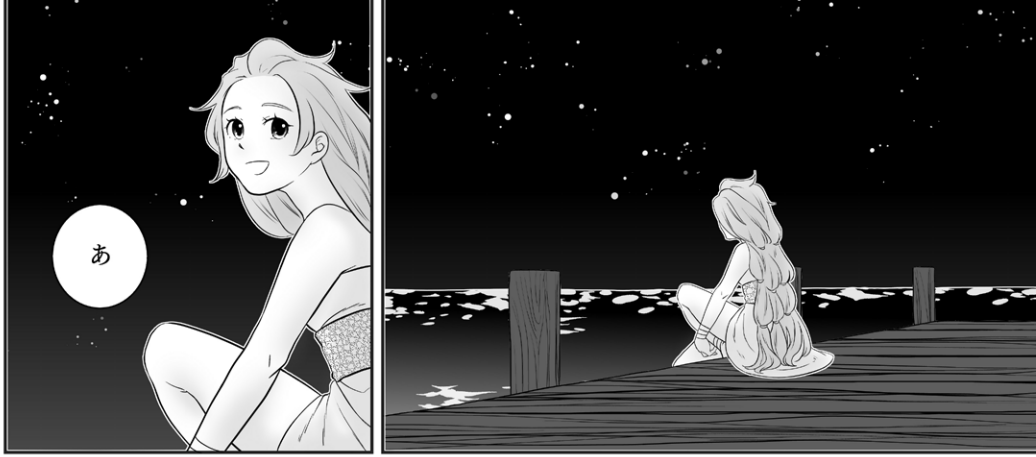
ファティーマ姫はハリードの事を「エル・ヌール」と
呼びます。直訳すると「光」。エル・ヌールはハリード
の本名説もありますが、私は姫のつけた特別な呼称説
を取っています。それは国を導く光と言う意味なのか、
それとも貴方が私の希望の光という意味なのか、想像
は膨らみますが愛の籠った呼称には違いありません。
逆にハリードは姫に「姫はやめて。ファティーマと呼ん
で」と言われます。姫を敬うがあまり恋人でありながら
距離を置いてしまうハリードに姫様は不服の模様。
結局それは改められることもないままに2人は引き離され
てしまいます。

・ゲーム本編のハリード

戦争で国を失って10年、ハリードは生き別れたファティ
ーマ姫を探し続けました。本当に生きていると信じてい
たのか、ただ希望に縋りたいだけだったのかその本心を
知るのは彼のみでしょう。
ですが、それがたとえ執着だとしても忘れられない
愛する人を一途に想い続けるハリードを素敵だと、応援
したいと私は思うのです。どうか、その一途な愛が報
われますようにと願わずにいられないのです。
なお、私は姫の生存ルートもあると信じている派です。

結論:ハリ姫再会して。そして幸せになって。

以上を、私のハリ姫プレゼンとさせてもらいます。　土取那智



彼女の知らない彼のこと　written by こえだ

こんばんは

若い娘がこんな時間にこんなトコで

酔っ払いに絡まれても知らねェぞ

なんだか目が冴えちゃって

元の世界でも眠れない時は波の音を聞いてたの

不思議……違う世界なのに海だけは変わらないんだね

明日も行くのか？

うん 約束してるから

昨日もねハーマンと一緒に海に出たんだけど

獲った魚がこんなに大きくて

よく見たら卵持ってる雌だったの

ふーん？

帰って調理してくれたんだけど

料理できるの？意外！

チッ

って言ったら睨まれちゃった

アレ？

でもすごく美味しかったわ

また明日も獲れたら作ってもらおうかな

好きなんだな

あいつのこと

うん

他の皆と一緒にいるのももちろん楽しいけど

一番落ち着くのは彼のとなり…

——じゃあ

俺のことも好き？

俺も「ハーマン」なんだけど

ぁ…

なんなら

キスでもしてみるか？

――ッッ

こっ
こういうのはっ
お酒の勢いじゃなくて
す好きな人同士でするものだから…
だ、だから…あっ あの
わたし…もう部屋に戻るね
おやすみなさいッ

好きなモン同士
ねぇ……
昔を過ぎた俺に
そんな立場も
なければ
可能性の
欠片もない
離れる世界で
いくら繋がろうが
虚しいだけと
判っていながら

あーあ

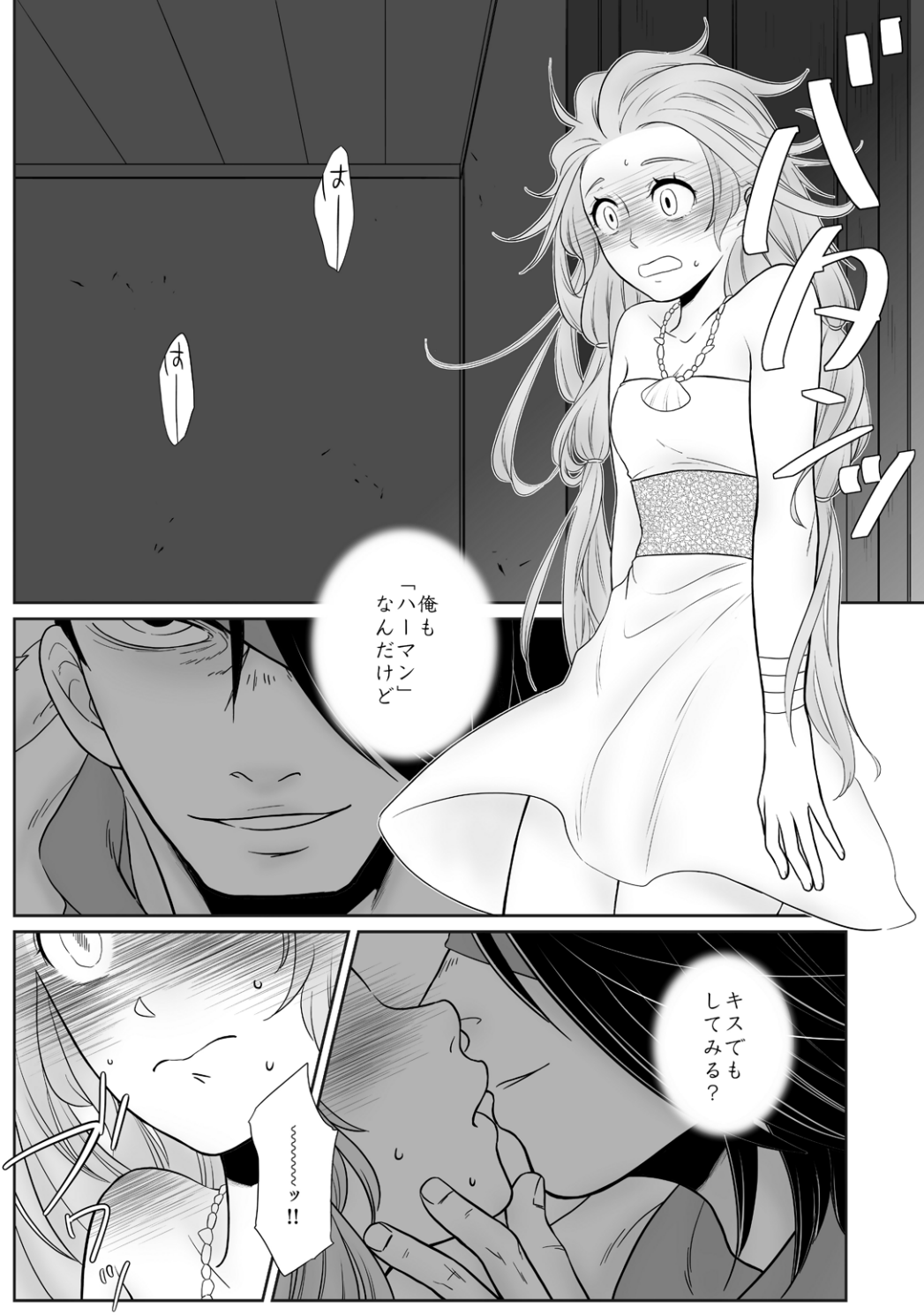
酔ってんなぁ

カリ

チャ

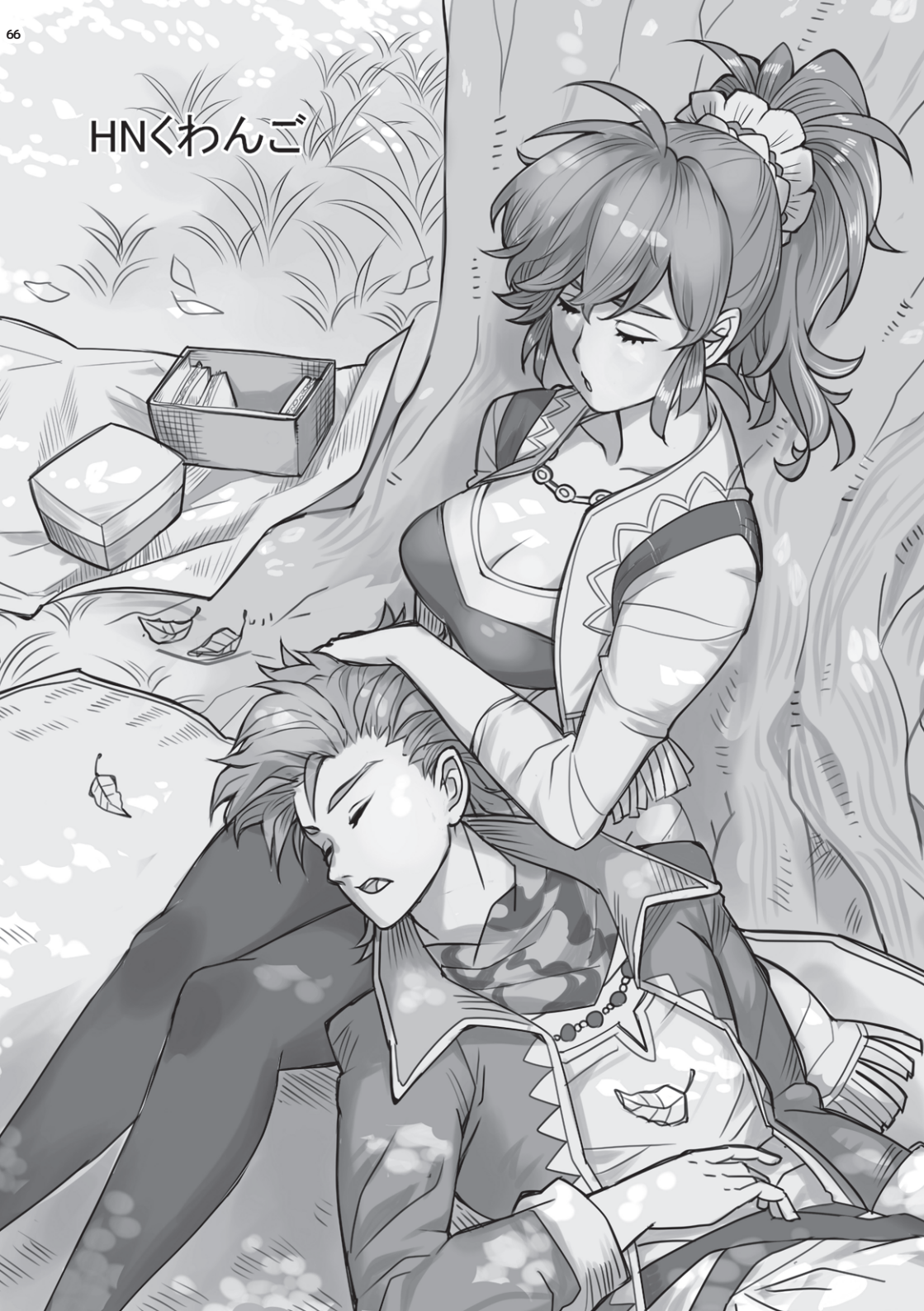
バタバタ

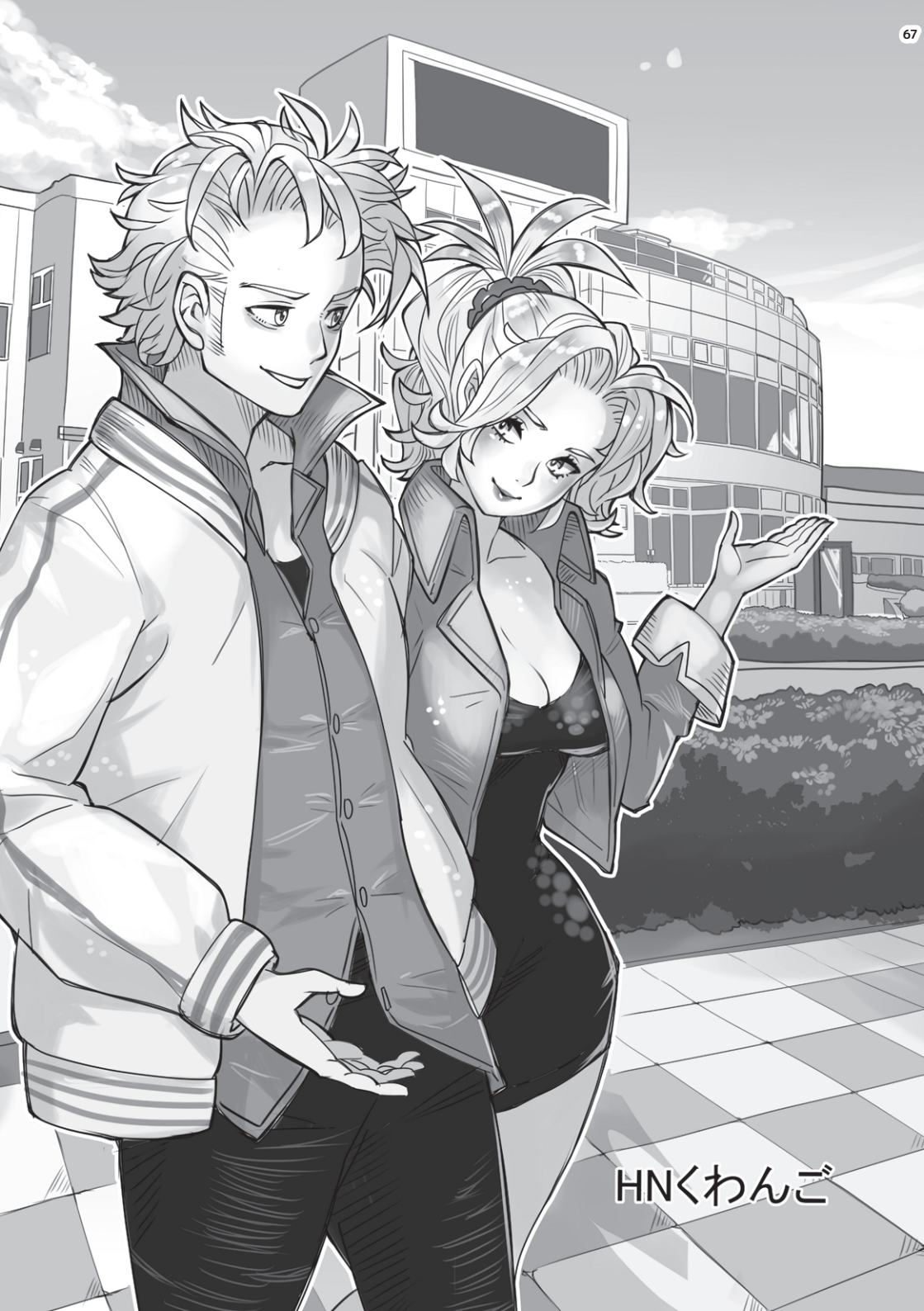
バタ


バタッ
は―
は―
俺も「ハーマン」なんだけど
キスでもしてみる？
ぐるぐる
ッッッッッッッッッ!!

……明日から

どんな顔して会えばいいの……？


HNくわんご


HNくわんご

つんつん

ヒューズ……

わたしのほうが目上だって、言ったよね

じゃあ……、

◆気休めでなく願いをこめて／冷茶

パシリ

してくれる？

ぱ……。

……いいぜー言ってみな

Crepe

MENU

……あれ。

食べたいっけど……。
お～～女子らしい
わたしが行って、並んでる女の子達を怖がらせたらいけないし……ていうか……。
……。
魅惑の君の血のせいで、普通の女の子達はイチコロなんだって
これ以上ヘンな被害拡めたくないから
ねっ！
おねがい
……
……わかった
しかし俺があの中に並ぶのも別の意味で問題だな？？
キュ～～
ぐぐ～～～～
はしっ
ん、なんだコットンまで
「ジャケットを脱いで行け、オトリ捜査の基本だ」？
みゅ みゅ みゅ
キュキュキュ
ぐぅ～～
ギュ～～
……あそうか

んじゃ、アセルスはジャケットと一緒に待っててね
う、うん！
どうぞレディ
もぐもぐ
あとコットンがいたから不審がられなかった！
あ！ありがとう……！
デートだって言ったらおススメ教えてくれたぜ～～あのコ達

……
……俺には、君もあのコらと変わらない普通の女の子にしか見えないが……
早く堂々とあの中に混ざれるようになるといいな
……うん……
でも、デートなら今日みたいなのが紳士なんだ
まーーーーなっ
しかし一緒に並ぶのもありだろ？
ふふ……そうだね

ハリード×エレン

第四のゲートとランスのあいだ

文月はるか

何を見てもサラを感じ、サラを想う。

寒い時節のはずなのに、そうと感じない。それどころか、どうやってタフターン山から帰還を果たしたのか、ところどころ記憶がない。四つ全てのアビスゲートを閉じたというのに、エレンはすっかり気が滅入っていた。

まさか、最愛の妹が宿命の子だったなんて。何故どうしてサラがという自問自答ばかりで何も頭が働かない。少し一人になりたいと仲間たちに告げ、魂が抜けたようにふらふらと、ロアーヌの街を歩き回る。休んだ方がいいことは分かっていたが、じっとしてはいられない。道を行く人から、いま自分がどんなふうに見えているのだろうかと気にかける余裕も、彼女にはなかった。

不意に目の前に、ふわりと赤いものが舞い上がった。

風船だ。反射的に手を伸ばし、ぎりぎりのところで捕まえた。近くにいた持ち主が、嬉しそうに目を輝かせる。片手で数えられる年齢くらいの女の子だ。泣き出しそうだったのから一転、はにかんだ笑顔が可愛らしい。

「はい、どうぞ。しっかり持ってね」

また飛ばしてしまわないよう、しゃがんで注意深く持たせてやる。

「ありがとう、おねえちゃん」

「どういたしまして」

上手く笑えている自信はなかったが、エレンも今出せる精一杯の力で笑顔になった。そして、気をつけて遊んでねと手を振って、小さな後ろ姿を見送った。

おねえちゃん

お姉ちゃん

無邪気な一言が、エレンの心に深く響き渡る。

脳裏にこだまする呼び声はあの女の子のものか、それとも、サラだろうか。

わたし、おねえちゃんだよ。いっぱいあそぼうね、まってるよと母のお腹に話しかけた日々。
今か今かとその時を待ち、ようやく産声が聞こえたこと。
シノンの森の中で迷子になって大泣きしているサラを見つけた時、ほっとして自分の方が泣きそうだったこと。
仲良く並んだ子供部屋のベッド。明かりを消した後、家族に見つからないよう小声でシリトリを続けた夜のこと。
張り切りすぎて大量にリンゴの皮を剥いてしまい、二人してベント邸に駆け込んだこと。
泣いたり笑ったり。お姉ちゃん、お姉ちゃんと言いながら後ろをついてくる。昨日のことのようにはっきりと、幼い頃からのサラの姿が脳裏に浮かぶ。これでもか、というほどに。
家業の手伝いに自警団の見回り活動に、いつも助け合ってきた。二人を知る誰もが認める、仲の良い姉妹だった。最後のアビスゲートを閉じた暁には、シノンで当たり前の日常に戻れると思っていた。二度と会えなくなるなど、まだまだずっと未来の話のはずだと、信じて疑わなかった。
（なんで、あんたはいないのよ……）

もうどれくらい歩いただろうか。
宵闇が静かに街を浸していった。宿に戻ったところで休める気はしないなと思っていると、パブの看板が目に入った。
（ここでサラと、後にも先にもないぐらい大喧嘩したっけ）
そういえば喉が渇いたしお腹も空いた。こんな時でもだなんて、あたしは何で生きてるんだろう。サラがいないのに。重い足取りで、ふとそんなことを思う。
入ってみると、あいにくカウンターしか空席がない。申し訳なさそうにする店員に、座れればどこでもいいと伝えて、エレンは店の奥へと進んだ。
するとカウンターの片隅に、見知った人物がいる。
「ハリード……」
今はとにかく何かにすがりたい。そんな思いで、まずはその名前を呼んだ。

「お前、いったい何処をほっつき歩いていたんだ……まあいい、座れ」
無言で頷き、たまたま空いていた隣席に腰掛ける。と同時に、深いため息を吐いた。
「一人になったらなったで、落ち着かなくて」
「あれで冷静になれという方が無理だろう」
先ほどの店員が新しいグラスを運んできた。ハリードは慣れた手つきでワインを注ぐ。注ぎ終わるや否や、エレンはグラスの半分ほどを勢いよく飲んだ。ロアーヌ名物のワインだったが、もはや味などどちらでもいい。
「わけわかんないくせに一人でどっかに行くなって、何回言ったと思ってんのよ……」
エレンは吐き捨てるように呟く。
ハリードはというと、姿勢良く腰掛け、無言でグラスを傾けている。いつもなら、サラも子供じゃないだろう、と嗜めそうなところだ。
彼はそっとグラスを置いた。持ち方や置き方の一つ一つから、そこはかとない気品が滲み出ている。普段の鮮やかな剣捌きと身のこなしからは想像がつかないくらいに。
「エレン、守るべき人を守れなかったという事実は、身を斬られるような苦しみだ。そのくらいは俺でもわかる。ましてや、お前とサラは家族だろう」
「そうよ、あたしの妹。ちょっと恥ずかしがりだけど、どこにでもいる普通の子なのに」
なのに、どうして選ばれてしまったの。
どうしてサラだったの。
「きっとあの子、怖くて泣いてるわ……」
絞り出すようなエレンの声は震えている。
「お前の所為ではない」
遠慮はいらん、思いきりやれとでも言うように、大きな手が背中をさすってくれるのが分かった。
張り詰めていた気持ちが、ぷつりと切れる。
妹のため、村のために強くあらねばならない。そう思って何年も封じていたものが、まぶたの裏から溢れ出した。
（サラ……）

静かな泣き声を、喧騒が覆い隠す。

「そろそろ起きろ」
耳元でハリードの声がする。ひとしきり泣いた後は疲れと酔いから、いつの間にか寝落ちてしまったようだった。
（げ、あたしとしたことが……）
なんとか気合いを入れて立ち上がり、店を後にした。外の冷たい空気に触れて、ようやく酔いが冷めていく。

「少しは落ち着いたか」
「……おかげさまで」
ハリードと二人で宿までの道を歩きながら、エレンは一体どうしたことだろうと思っていた。ひたすら強がることもできたはずなのに弱音を吐くなんて。泣くなんて。よりによって、このおっさんの前で。自分自身のことにもかかわらず、いまひとつ理解が追いつかない。
「アビスなんて、どうすりゃいいの……」
「その事だがな。明日ここを発ってランスに向かうぞ。ヨハンネスに会ったところで手がかりが掴めるかは知らんが、目の前に道があるうちは全力で走れ」
聞こえた通りだ。まだ、まだ手立てはきっとある。
「これ、いつかと同じ流れね。ついでいいからさ、一緒に来てよね」
「高いぞ」
前金じゃなくて成功報酬だ、サラを取り戻してからならと考えてあげてもいいと、エレンは早口でまくし立てた。
（あーあ。サラが見てたら何言われんのかしら……）
ほのかな希望にほんの少しだけ、気持ちがほぐれる。

吹く風は冷たかったが、ロアーヌに確実に、春が近づきつつあった。

白薔薇
今日は一緒に来て
くれないのか？

えぇ
今日はイルドゥンと
お出かけください

さぁ用意が
出来ましたよ

とても良く
お似合いですよ
アセルス様

う…
な、なぁ私
変じゃないか？

お二人で
お話したいことが
あるのでは
ないですか？

ふふ
大丈夫ですよ

ニ

二人の願い事

2022. Kyabia

バン

イルドゥン準備出来たぞ!!

晴れ着を着せてもらった

ジーナに仕立ててもらったんだ！素敵だろ!!

どゃぁ!!

馬子にも衣装ってやつだ！

ご自分で言うんですか？

フッ…

!!

まったく騒々しいことだ

なっ…何かズルいぞ
イルドゥン！
私よりも
目立ってる

妖魔は何を着ても
優れた着こなしが
出来るのだ

さぁ
行くのだろう
神とやらに
願う場所へ

あ…あぁ
行く!!

…

何故このような
遠い場所へ

良いのか
ここで？

私もう人間じゃないし
知り合いとも会いそうで行きづらい…
ぎゅ。
誘ったのは私なのに…ごめん
実はまだ願いも決まっていないんだ
何を今更
人間に戻ることが願いではなかったのか？
今はちょっと違う
人間には戻りたいよ
でも…
でもっ…

人間に戻って
しまったら
もう白薔薇やイルドゥン
妖魔の他の皆とも

このまま

一緒に
いられなくなって
しまうだろ!!

情が
芽生えたか
人間らしい

それは
嫌だっ……!

半妖としての生を

何を悩んで
いるのかと思えば
顔を上げろ

受け入れる事が出来たなら

全く
お前は…

いつもの
強気なお前は
どこにいったのだ

この先も
永遠の時を共に過ごせるのに

いっ
イル…

…だが

妖魔は
神頼みなどしない

今だけは
お前の為に
神に祈ろう

お前の
思うままに
願うといい

イルドゥン
私の願いは…

どうか

貴方の願いが叶いますように

END

ありがとうございました！
kyah.

トーマス×サラ

Modest sweetness

たお

わぁ…

トムのおうちの薔薇、本当にきれいだよね

……

フリ

はわっ

庭師が丹精込めて育ててくれているお陰だな

すっ

そんなに驚かなくても

……だって…

ぎゅっ…

少し前まで…片思いだと思ってたし…

…こんな風になれるなんて思ってなかった…から…

慣れないか？

……

……うん

慣れて貰わないと

俺が困るかな

…!!

だ…
近すぎ…無理…むりっ
誰か来たら…
誰も来ないよ
えっ…
……っ

……
えっと

……いつまで
こうして…？

ん？
サラが
慣れるまで
かな

ふぁ〜

…慣れる前に心臓が
どうかなっちゃうよ…

ドキドキドキドキ

――でも…

……心地いい…

パンプキンパイが焼いてあるから

戻ってお茶にしようか

……！

——うん

あっ

私もねチーズタルト作って来たの

甘さをかなり控えてみたんだけど

トムの好きそうな味に出来たと思うんだ

end Taosozz

終わりと始まりの向こう側

藤凪みりあ

朱鳥術士ボルカノは、とある秘密を抱えている。

ボルカノが廊下の角を曲がろうとした瞬間、横から黒い影が飛び出してきた。もちろんボルカノは、それを華麗に抱き止めようとしたのだが……

「うぐっ！」

抱き止めるどころか、受け身を取る暇もなく、ボルカノの身体はあっさりと弾き飛ばされた。

いくら長身の成人男性とはいえ、部屋に引き籠り続けている術士の力など、しょせんはこんなものである。

「んっ……、ご、ごめんな、さ……」

一緒に廊下に倒れた影――黒のマントを羽織った女術士は、ボルカノの姿を確認した瞬間、はっとするように言葉を止めた。

「……本当にごめんなさい、ボルカノ」

申し訳なさそうに、気まずそうに、女術士――うら若きウンディーネは、改めて謝罪の言葉を口にした。

ボルカノは黙って立ち上がり、あえてウンディーネに視線を向けず、その場を去ろうとする。

……この女とは、決して口を利きたくはない。

たとえ、自分と出会う前の過去の彼女であろうと……、いや、過去だからこそ、関わる訳にはいかない。

「……あ、あの！」

呼び止めようとするウンディーネの声が聞こえるが、ボルカノは無視を決め込んで廊下を歩く。

――だが。

「貴方って、本当に器の小さい人ですね」

その、あどけない子供の声に、思わずボルカノは足を止めてしまう。

振り返らなくとも、解る。

この声の主は――幼い頃の自分自身だ。

「大丈夫ですか、ウンディーネ先生？」

「ええ、ありがとう……」

背後から聞こえる二人の声に、ボルカノは心の中で大きなため息をつく。今日はなぜ、関わりたくはない相手ばかり現れるのだろうか。

「貴方の考えている事は解っていますよ、大人の僕」
決して振り向こうとしないボルカノの背に、幼い声が投げかけられる。
「ですが、もし過去の自分と干渉してはいけないのなら、僕たちが同時に喚ばれる事がおかしいでしょう？　この召喚システムを生み出したのが何者であれ、この程度で歴史が歪む危険な作りだとは思えませんよ」
得意げな口調でつらつらと語った後、その子供は、更に付け加えるように言う。
「少なくとも僕なら、そんな雑な術式は組みません」
「まるで、全て理解しているとでも言いたげな口ぶりだ。思い上がるなよ、未熟者」
この子供と口をきく気は無かったのだが、思わずボルカノは吐き捨てるように言葉を返してしまう。
とはいえ、これ以上付き合うつもりもない。ボルカノは今度こそ、その場を去ろうとした……はずだった。
「昔から何も変わってないわね、貴方」
真正面から投げかけられる、苦笑交じりの声。
その声を聞いた瞬間、ボルカノの胸の内に、様々な感情が湧き上がる。
コツコツとヒールを鳴らしながらボルカノの目前に現れたのは、誰よりも関わりたくはない相手。
背後の未熟者たちとは一線を画する、本物の実力と経験を兼ね備えた稀代の術士。魔王の盾を巡り、ボルカノと何度も死闘を繰り広げた宿命の敵。
「――ウンディーネ」
思わずボルカノは、その術士の名を口にする。
きつい化粧に縁どられたウンディーネの青の瞳は、ボルカノを一瞥し、その向こう側へと視線を移した。
「こんな冷たい男の事は放っておいて、早く行きなさい。貴女、急いでいるんでしょう？」
「あ、ありがとう、ございます……」
うら若きウンディーネは、複雑そうな口調で答える。
やはり彼女にも、未来の自分に対しては、思うところがあるのだろうか。
二人分の足音があわただしく遠ざかると、目前のウンディーネが改めてボルカノへ視線を移し、意地悪そうな笑みを浮かべた。
「全てを理解したつもりの未熟者……。貴方、私が思っていたよりも、自己分析が上手いのね？」
「それは、あの子供に告げた言葉だ」
「けれどあの子は、過去の貴方でしょう？　賢しい口を利く過去の自分を見て、それが幼稚であると認められるのはとても立派よ」

当然ながら、それは誉め言葉などではなく、ボルカノをからかう為だけの言葉だろう。
「私が、生意気な子供だったのは事実だ。無邪気で天真爛漫で、元気のあり余っている過去の貴女とは違って」
皮肉たっぷりにそう告げてみせると、ウンディーネは視線をぷいっと逸らした。自分の過去の姿を見て、いたたまれない気持ちになるのは、お互い様らしい。
「まあ、何にせよ……」
と、ウンディーネは、仕切り直すように言う。
「あの二人から距離を置くべきだという、貴方の判断は正しいわ。子供の貴方はああ言っていたけれど、万全を期すに越したことはないもの」
その言葉に、ボルカノは小さく頷いてみせる。
過去の者に、未来を悟らせてはならない。
たとえそれが、どのような内容だとしても。
「それに、私と貴方も、必要以上に干渉すべきではないわ。私たちは魔王の盾を狙う敵同士。今はただ、休戦を余儀なくされているだけ。……そうでしょう、ボルカノ？」
「当然だ、貴女と馴れ合う気など、更々無い」
そう言い放ち、ボルカノはウンディーネを睨みつけた。
――だが。
こうしてウンディーネと顔を合わせ、いかにも憎悪を滾らせたような態度を取る度に、思う。
自分も彼女と同じ時間軸から召喚されていれば、こんな想いを抱く必要は無かったのにと。
朱鳥術士ボルカノは、とある秘密を抱えている。
魔王の盾を巡る争いの果てに何が待ち受けていたのか、ボルカノは全て知っている。
当然だ。ここに居るボルカノは、その争いよりも少しばかり先――世界の再生が行われた後の時間から、呼び出されたのだから。
今でも、はっきりと覚えている。
決闘の果てに、この身を貫いた氷の刃の感触。
戦いに敗れ、地に伏しながらも、せめて最後まで誇り高き術士であろうと顔を上げ、憎悪を込めてウンディーネを睨もうとした、その時。
ボルカノは、確かに見たのだ。
その青い瞳に涙を湛えながら、じっとこちらを見つめるウンディーネの姿を。
『貴方の負けね、ボルカノ』
まるで勝者の責務を果たそうとするかのように、ウンディーネは毅然と言い放つ。けれどその声は微かに震え、大粒の涙が白い頬を伝った。
――それが、死の直前のボルカノの記憶だ。

しかし、それで終わりではない。
あの時ボルカノは、確かに死んだ。どのような術を用いようと、彼の事を生き返らせる事は不可能なはずだった。
だが、こうしてボルカノは生きている。
死者が蘇生するなど、本来ならば在り得ない。だが、それを覆すものが、この世に一つだけ存在する。
『これは……、宿命の子の持つ、再生の力……？』
蘇ったボルカノは、瞬時に真実を悟った。世界が再生の力によって蘇った際、ボルカノの命も呼び戻されたのだと。
けれど、本来であれば、自分が再生の力の恩恵を受けるはずがないという事も、解っていた。
死食、アビス、そして運命の子。世界再生に関わるそれらとボルカノの死は全くの無関係であり、こうして自分が生き返るのは道理に合わない。
しかし、ひとつだけ、可能性がある。
もし、宿命の子の持つ再生の力が世界を覆った瞬間に、ボルカノの蘇生を願った者が居たなら。そんな、絵空事のような奇跡を、本気で信じて祈るような奇特な者が居たとすれば。その願いの心が再生の力と結びつき、こうして生き返る事も、在り得るのかもしれない。
けれどその仮説には、大きな穴がある。ボルカノの復活を心から祈るような者が居なければ、そのような奇跡は起こり得ないのだ。
天涯孤独であり、友と呼べる存在すら居ないボルカノの為に心から祈る者など、居るはずがない。
そう。そんな者が居るはずがないと、思っていた。
だが――
「貴方に、魔王の盾は渡さないわ」
ウンディーネの冷たい声が、ボルカノを現実へ引き戻す。
「せいぜい、ここで術を磨いておくことね。私達はいつか必ず、盾と誇りを掛けて戦う事になるのだから」
ウンディーネの冷徹な眼差しが、ボルカノに突き刺さる。その言動から察するに、ウンディーネは魔王の盾を巡る争いを繰り広げていた時間から召喚されたのだろう。
こうして舌戦を繰り返す度、ボルカノは思う。
この冷ややかな青の瞳が、いつかボルカノの為に涙を流す事になるなど、誰が想像できようか。
「それはこちらのセリフだ。その時が来れば……、私は、貴女の事を殺してみせる」
こうして過去のウンディーネと対峙し、あの頃のように冷徹な言葉を浴びせる度に、ボルカノの心は激しく乱れる。
かつてのボルカノは、術士としての誇りだけを礎にして生きてきた。
術士としての名声だけが、ボルカノの求める全てであり、

ボルカノにとってのウンディーネは、それを得る為に乗り越えるべき壁でしかなかった。
しかし。
今、ボルカノは、ある事を確信している。
もし、死んだ私の復活を、心から祈る者が居るとすれば。
それは――貴女なのだろう、ウンディーネ？
それは妄想、あるいは幻覚とも呼べる程に突拍子もない推論だ。ボルカノにとってのウンディーネが障害物でしかなかったように、ウンディーネにとっても、ボルカノは単なる敵でしかないはずなのに。
どうして貴女は、私の復活を祈ったのだ？
私達は、只の敵同士では無かったのか？
それとも、貴女は、私の事を――
「貴方に、私が殺せるのかしら？」
目前のウンディーネが鼻で笑い、ボルカノの意識がまた、現実に引き戻される。
「その覚悟がいかほどのものか、楽しみにしているわ」
そう言ってウンディーネは踵を返し、コツコツとヒールを鳴らしながら立ち去る。その後ろ姿に名残惜しさを感じている事に気付き、ボルカノは心の中で苦笑した。
「ここに居るのは、過去の貴女なのだから――」
ボルカノは、自分に言い聞かせるように、小さく呟く。
「――この記憶も、感情も、すべて私の胸の内に眠らせ、貴女の好敵手として振る舞い続けてみせる」
ウンディーネが、どのような想いで復活を祈ったのか、ボルカノには解らない。
だが、それが何であれ、その純粋な祈りに報いたいと、柄にもなく思ってしまったのだ。
この世界に召喚されたボルカノは、全てを隠し、異世の戦士としての役割を果たす決意をした。元の世界でバンガード復活に手を貸し、その後もアビスを巡る戦いに身を投じたウンディーネのように。
朱鳥術士ボルカノは、とある秘密を抱えている。
真実を隠し続けるのはとても苦しく、けれど、そのもどかしさの奥に、不思議な暖かさを感じていた。

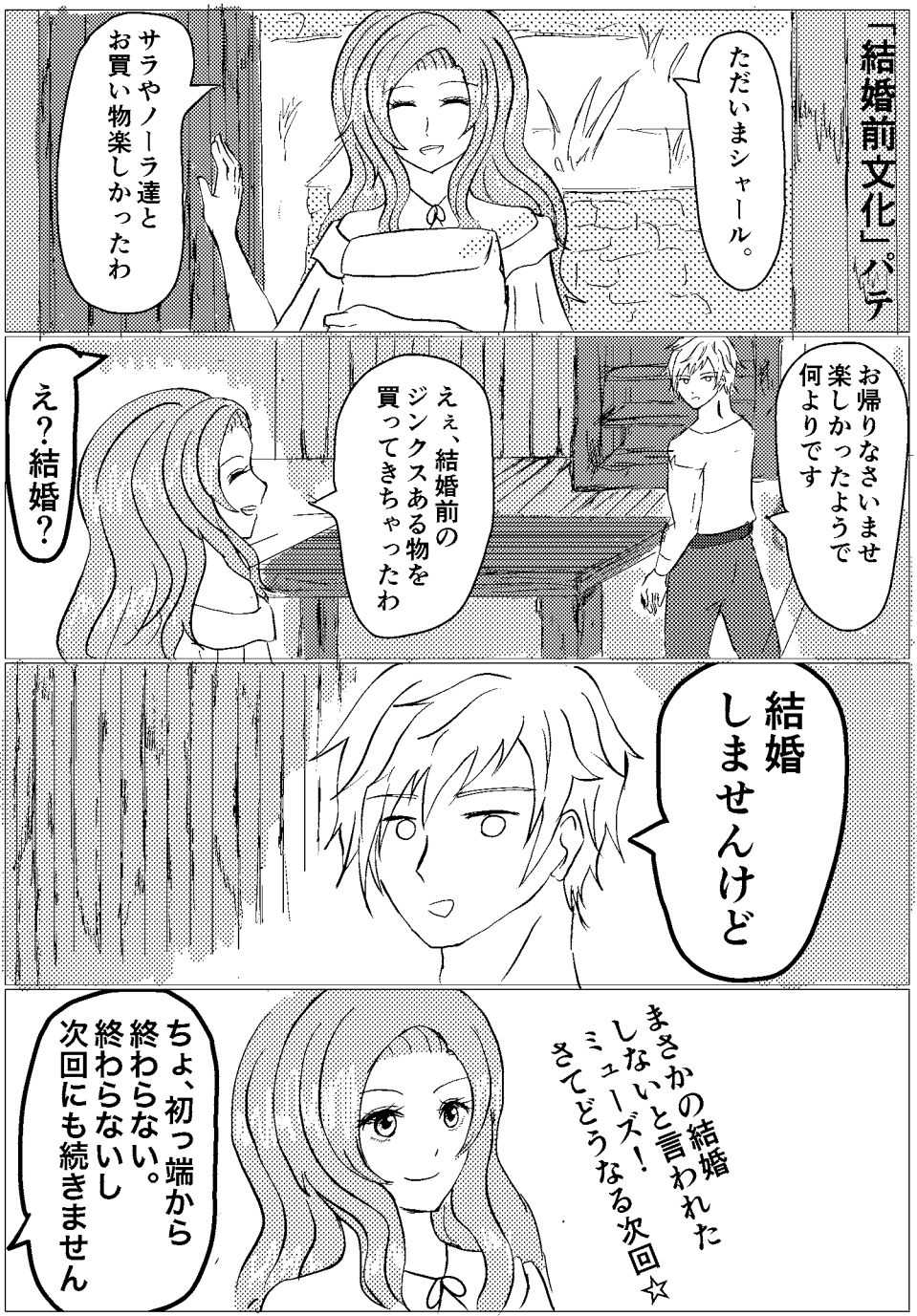
＊ ＊ ＊

「……本当に、不器用な男」
私室に戻ったウンディーネは、いつものようにソファに深く腰掛け、煙管をくゆらせながら呟いた。

「貴方ったら、本心を隠すのが下手過ぎるのよ。見ているこっちが、はらはらしちゃうわ」
先ほどの出来事を思い返しながら、ウンディーネはため息をついた。ウンディーネが思い出していたのは、ボルカノと過去の二人とのやりとり……ではない。
「だって、あんな思い詰めた顔をされたら……。私の決心が、鈍ってしまいそうになるじゃない」
玄武術士ウンディーネは、全てを理解している。
あのボルカノが、どの時間軸から召喚されたのか。
かつて自分達がどのような戦いを繰り広げ、そして、その結果に何が残ったのか。
『貴方に、魔王の盾は渡さないわ』
ボルカノに告げたこの言葉も、普段の言動も全て、自分がどの時間軸から召喚されたのかを隠す為のフェイクだ。
どうやらあのボルカノは、ウンディーネよりも少しばかり過去から呼び出されたらしい。言動から察するに、彼は自分が生き返った後の世界の事を、多くは知らない。
モウゼスの地で結ばれた、和睦協定。
そして――
「こんな事、今の貴方には絶対に教えられないわ。もし全てを知ってしまえば、きっと貴方は恥ずかしがって、私を更に遠ざけようとするもの」
その感情に気付いたボルカノが、どれほど不器用なのか、ウンディーネは誰よりも理解している。
たどたどしい言葉、緊張で震える指先、そして、初めて触れた素肌の暖かさ。初めて見る彼の表情が、どれだけ愛らしく、そして魅力的だったか。脳裏に淡い記憶がよみがえるが、それら全てを意識から切り離す。
「私には、異世の戦士としての責務がある。だから今は、かつての私に戻らなければならない。己の術を研ぎ澄ます事だけに集中する、冷徹な術士の私に」
ウンディーネは煙管を吸い、ゆっくりと紫煙を吐く。
「だから今は、あの頃の関係に戻りましょう。私達の未来の続きは、全てが終わってから――ね？」
そう呟いて、ウンディーネは柔らかな笑みを浮かべた。
玄武術士ウンディーネは、全てを理解している。
だからこそウンディーネにとっては、今の歪な関係すら、愛しく幸福な時間に感じられた。

《完》

@akatsuki-yu
Yu


「結婚前文化」パテ
ただいまシャール。
サラやノーラ達とお買い物楽しかったわ
お帰りなさいませ楽しかったようで何よりです
えぇ、結婚前のジンクスある物を買ってきちゃったわ
え？結婚？
結婚しませんけど
まさかの結婚しないと言われたミューズ！さてどうなる次回☆
ちょ、初っ端から終わらない。終わらないし次回にも続きません

何度も言ってますが私は貴方の従者なのです

結婚とかそんな立場ではありません

えぇ〜

というより私何も言ってないのに何で結婚という展開になってるんですか？

何言ってるの

もう五年ずっと一緒に暮らしてるのよ？

今更言葉なんてなくてもお互いの気持ちなんてわかりきってるでしょ？

恋する乙女と思いきやめちゃくちゃ男前じゃないですか・・・

そういえば人形って何の事何ですか？

えぇ、結婚前に2人に似た人形を用意して結婚を成立させるという文化があるらしくて・・・

ほら、シャール人形よ

だうっ

かなり不気味！

やたら頭が傾いてるな・・

な、なんですか この怖い人形は！

お店で見つけて 少し似てると 思って買ってきたの だけれど・・・・

いや、この最高に アンバランスな 腕はなんですか

アラケスだって 流石にこんな 腕してませんよ・・・

パンッ

パンッ

ふふ、貴方のその 逞しい腕に助けられて いると思ってノーラに 細かった腕に綿を詰めて 貰ったのよ

ノーラ絶対 ふざけてるじゃ ないですか・・・

美学って 言ってたわよ

美学の美の字も 伝わらない・・

もちろんペアで 必要だから 私に似た人形も 買っているのよ

ごそ

ごそ

これよ

スッ

怖すぎる！

何で呪いの人形 みたいな感じ なんですか!?

呪いじゃないわよ ブライダル人形よ・・・ 自分に似てる人形が いいっていうから 一番長かった病弱な 時に似た方がいいかなと

似せるところが 色々おかしい気が・・

因みにこれ実用性を考えて中に物が入れれるのよ！
シャールの胃袋を掴めるようにってノーラがつけてくれたの
絵面的に何か複雑な気持ちになります・・・
ふふ、私もいつかシャールの胃袋掴みたいわね
腹を刺されるという事ですか？
違うわよ料理的な話よ・・・
いやさっきの流れ的にそうなりますよ・・・
ちなみに私の方も実用性を考えているのよ
あれ、うまく刺さらないわね・・
こうでいいわね・・
ほら花瓶になってお花を刺せるのよ！
ズーン・・
いや実用性を求めたせいで植物に寄生された人形みたいになってる！

もう、さっきから否定ばっかりね

ハッ！

確か従者でありながらミューズ様に対して失礼な言動が多すぎた

己の立場を忘れそのような振る舞いをしてしまうとは

ミューズ様申し訳あ・・

まぁ

貴方は真面目めで頭が硬いとこはあるけどそこも大好きよ

好っ

だからこの人形にも頭に石詰めて硬くしてるのよ

ゴォ

ブンッ

いやもはや鈍器！通りでさっきからやたら首傾いてるなと思ってたんですよ！

それと他にも必要なことをおこなって結婚成立させる文化もあるみたいで・・・

他にも？

えぇ、他所の文化ではまず8人の生き血をかき集めて・・・

結婚の話どこに行ったんですかね？

その血で描いた魔法陣の上に立って魔導書に書かれた呪文を唱えると結婚が成立するらしいわ

いやそれ絶対呪いの儀式じゃないですか

魔王殿あたりが丁度良さそうよね

やりませんよ!?

冗談よ

他には結婚前の男女で腕を組みながら長距離歩くと結婚成立という文化もあるらしいわ

うで組み～♡

キャッキャ

ウフフ

それなら簡単そうよね！

ドンッ

さぁシャールも隣に並んで

腕組み

それだと多分成立しないと思います

あとは男性と戦って女性が勝ったら結婚成立という文化もあるらしいわ！

さぁシャール私の胸に飛び込んで来なさい！

えぇ・・

ちょ！待っっっ！締まってる締まっ・・

ふふふ最近エレンに護身術習ってたのよ

それはこちらとしても有難いですがっ

ギギギギ

シャールを倒せるくらいには出来る様になりましょうって

いや自分で言うのもあれですが私を倒せるほどって結構スパルタですよね

大丈夫よエレンがシャールさんは抵抗しないからって

護身術の意味！

ミューズ様先ほどから呪いの人形とか呪いの儀式とか・・・一体どうしたのですか？

呪・・・結婚の話しかしてないのだけれど・・・

間違えました結婚の儀式の話などどうしたのですか？

いえ、ただ結婚という話になるとシャールは立場がどうタイミングがどうとか色々理由付けてはぐらかして来ると思ったから・・・

よくわかってるじゃないですか

だからいっそ決断出来るように・・

文化的既成事実でも作ろうかと思って・・・

文化的既成事実・・・

これで婚約の準備は出来たわね
いや何もできてないですよ!? これで出来てたらダメな気がする！
それに結婚はできないと言ってるじゃないですか
もしルートヴィッヒと決着がついて屋敷が取り戻せてたら話は別だったかもしれませんが・・
もしルートヴィッヒと決着がついたらって・・
でも貴方ルートヴィッヒと絶対に決着付けるつもりよね？
そぉ～～ですけどぉ・・・・
自分の言った事の意味に気が付いた

って事は結局は結婚するって事よね？

スッ

サッ

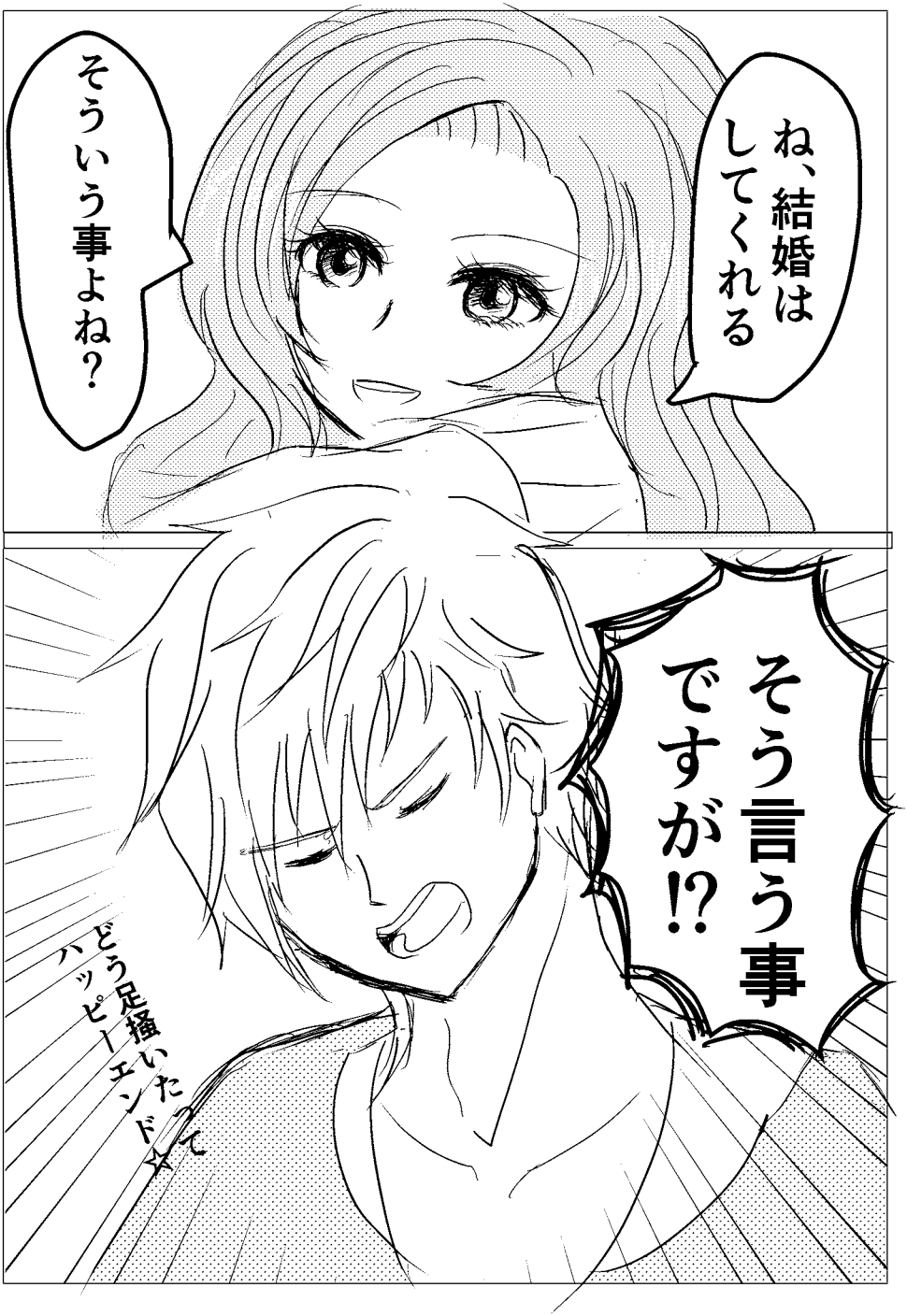
私は屋敷を取り戻せるって心から信じているのよ？

スッ

サッ

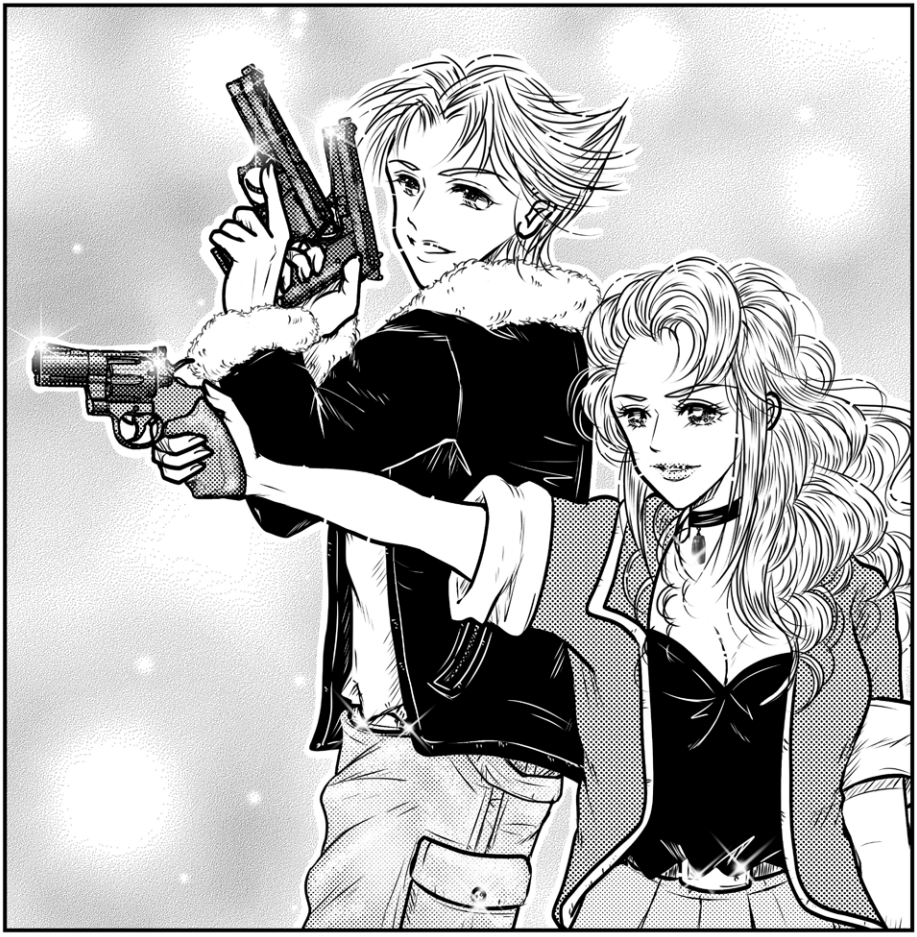
今はそういう時期じゃないだけであってそういう事なのよね？

結婚しないって事じゃなくて全てを整えたいって事なのよね？


ね、結婚はしてくれる
そういう事よね？
そう言う事ですが!?
どう足掻いたって
ハッピーエンド☆

Until the Canmber is empty

～薬室(チャンバー)が空(から)になるまで～



SaGa Frontier Ren&Emilia

Presented by MAI

銃は嫌い――……。

ドウッ
ドウッ
カウッ

ズブッ…
チュイィ…

エミリア、今日はもう止しなよ…。

疲れてるんだろ？かなり的を外してる…。

はぁ
はぁ

どうして当たらないの?!

…悔しいっ！アニーやライザみたいに…

もっと上手くなりたいのに！

そして早く――……

ジョーカーに復讐したいのに!!

私の日常を…愛する人を…

奪った仇(かたき)!!

銃は嫌い――…。

空虚(むなし)さも憎悪(にくしみ)も――…

撃ち抜いてはくれないから!

エミリア…

エミリア、ただいま。

遅くなってごめん!

ベッドで休んでくれてても良かったのに…。

あ…ごめんなさい！

私…寝ちゃって…。

すまない…。急な大捕り物になってさ…

犯人確保したんでやっと帰って来れたよ…。

そう…遅くまでお疲れ様。

今…、昔の夢を見てたわ…。

夢？どんな？

おかえりなさい…。

レン…！

可愛い奥さんがこうやって待っててくれるんだ。

どんな事件があっても…

元気で家に帰らなくちゃな！

レン…、今日は随分銃を撃ったのね…？

火薬の匂いが強いわ…。

うん、薬室が空になるまで…。

そんなに?!

レン…本当に無事で良かった！

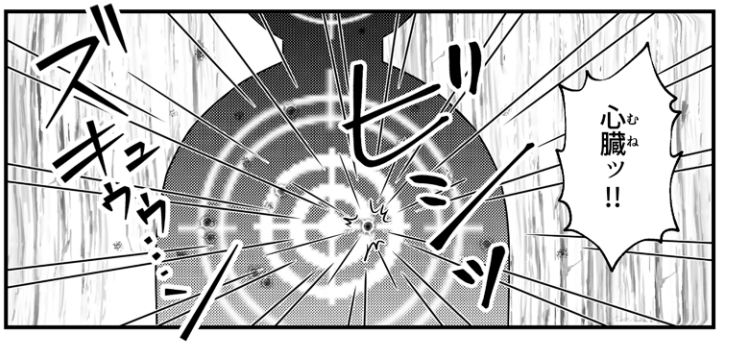
銃は嫌い――…。

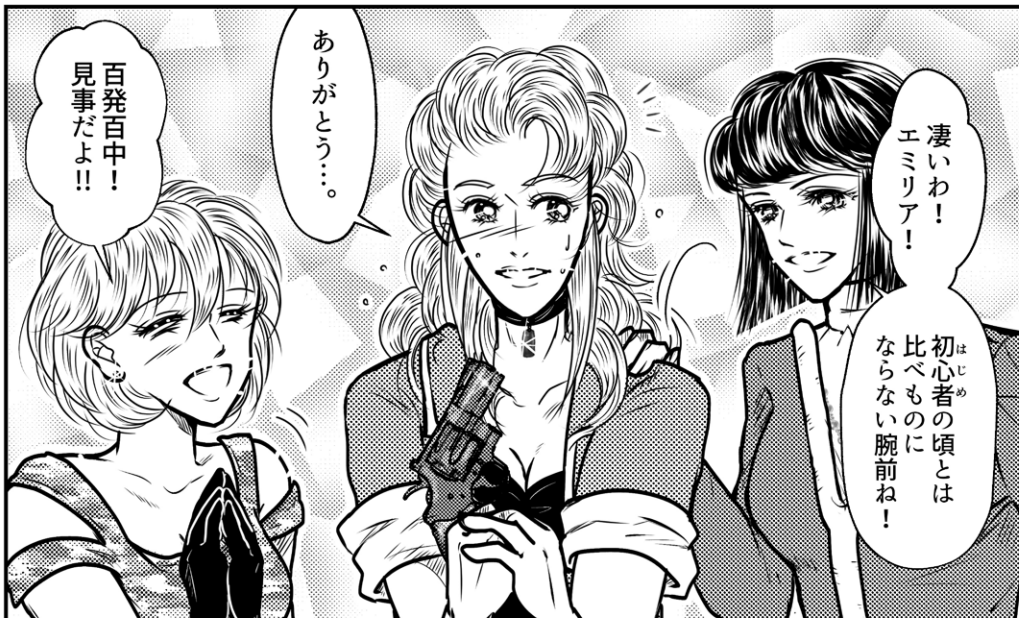
労わりの夫婦の会話も物騒なものになる…。

でも、「今の私」になら分かってあげられる…。

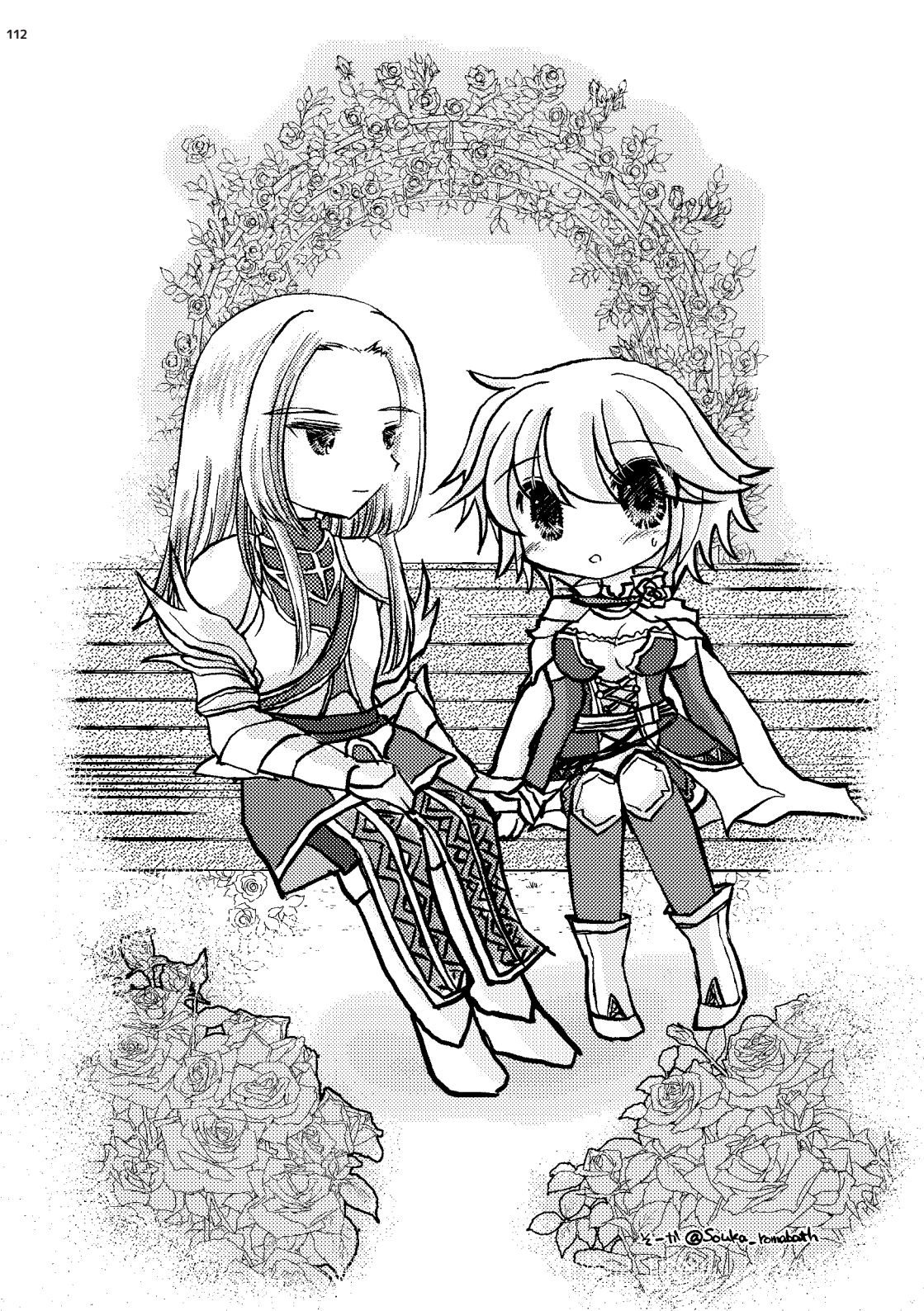
どれだけ大変な逮捕劇だったのか…！

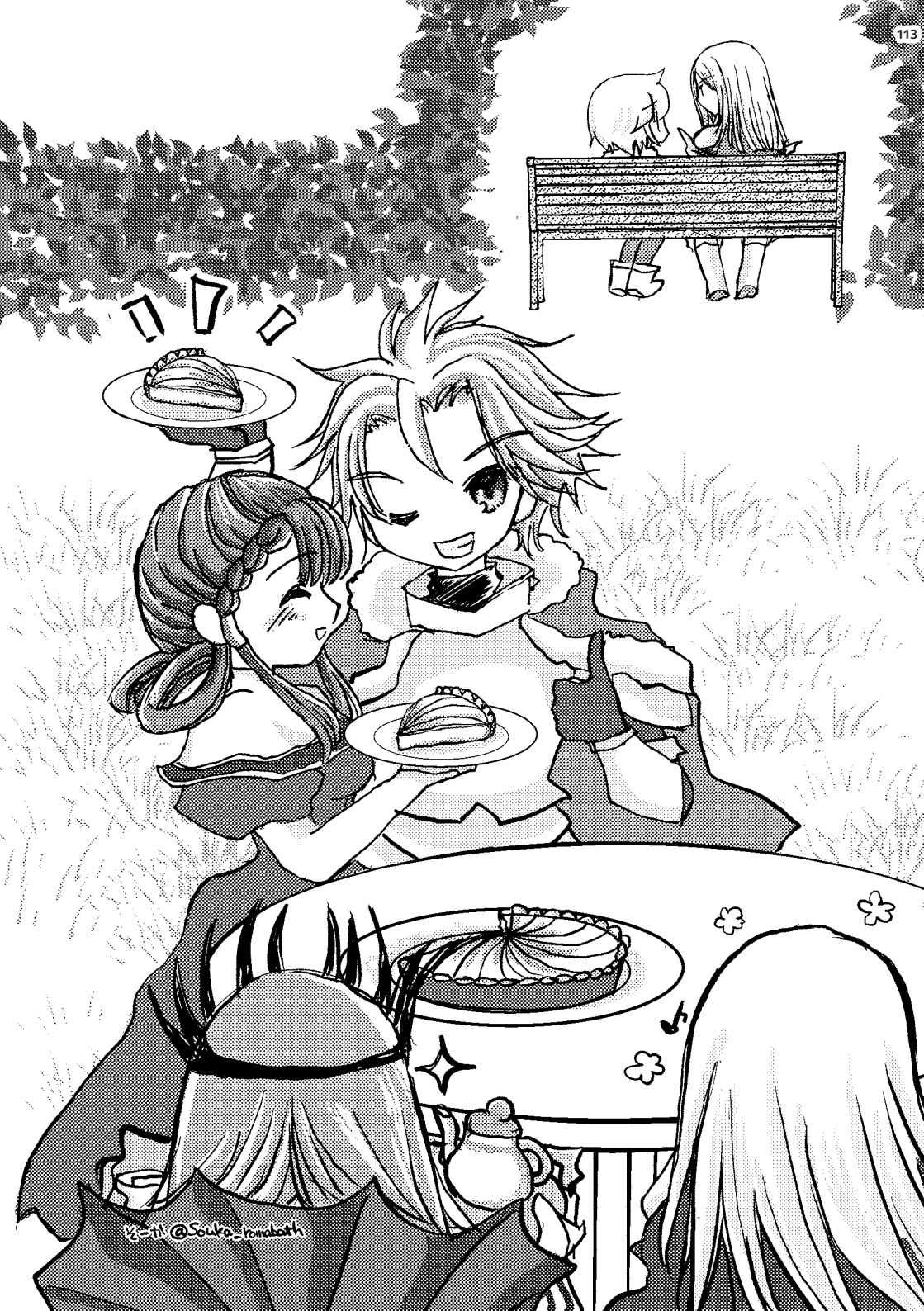
腕ッ！
ガウッ
ドウッ
ガウッ
脚ッ！
額ッ！


心臓ッ!!
ヒッ
ズキュウウ…


凄いわ！エミリア！
初心者の頃とは比べものにならない腕前ね！
ありがとう…。
百発百中！見事だよ!!

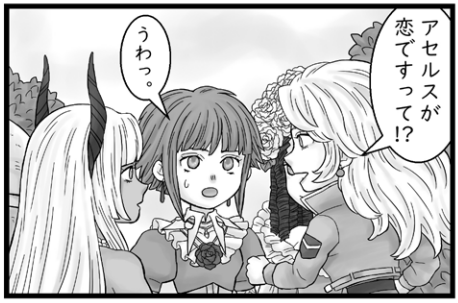
薬室が空になるまで練習してみたけど…
本当に大変だっただろうな…。
レンは昨日、これを実践したのね…。
それでもエミリアは練習を怠らないから偉いわ！
今は家族を護るための銃術だものね？
そうね…取り戻した私達の幸せを…
もう誰にも奪わせないために！
それでも…銃は嫌い――…。
それにIRPOの夫が――…
一流のメンテナンスをしてくれるんですもの！
冷酷にはなり切れない…。
いつも愛しい人の事を考えてしまうから――。
END

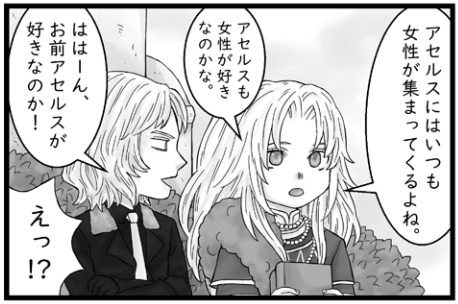

@Souka_romaboth

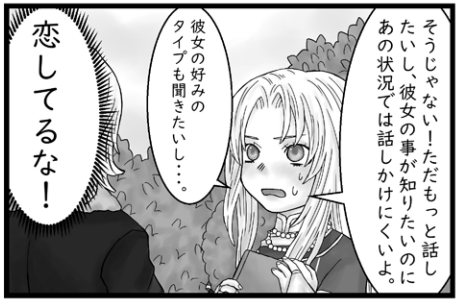

ケーキ @Souka_romabath

恋

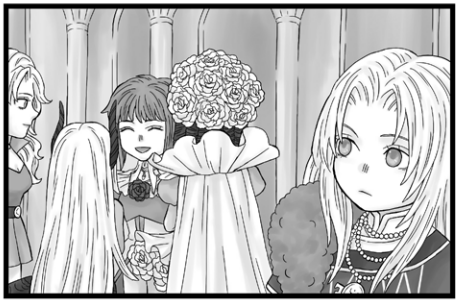
アセルス様はルージュ様の事がお好きなのですね。
なっ何で分かるの!?

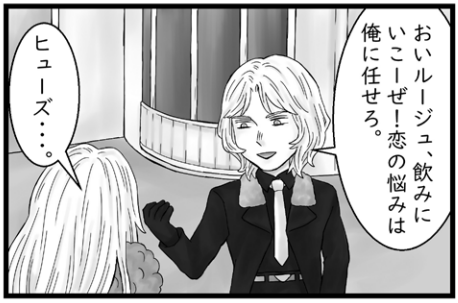

アセルスが恋ですって!?
うわっ。


アセルスにはいつも女性が集まってくるよね。
アセルスも女性が好きなのかな。
ははーん、お前アセルスが好きなのか！
えっ!?


そうじゃない！ただもっと話したいし、彼女の事が知りたいのにあの状況では話しかけにくいよ。
彼女の好みのタイプも聞きたいし…。
恋してるな！

相談



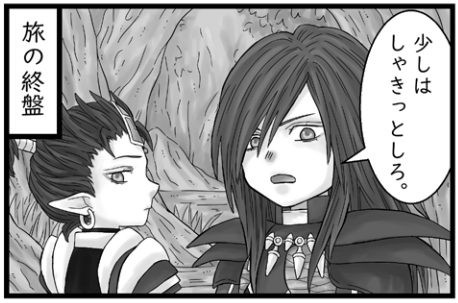

おいルージュ、飲みにいこーぜ！恋の悩みは俺に任せろ。
ヒューズ…。

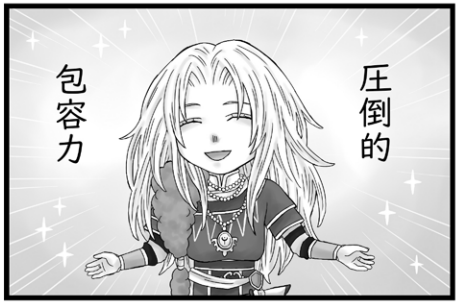
傍観してるだけじゃ親しくなれねぇぞ？向こうから話しかけたくなる様な男になれ！
一体どうすれば？

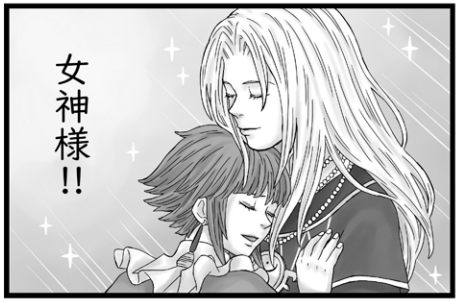
アセルスが戦闘で頑張った後にハグするんだ。
ハグ？
抱きしめるんだよ。
えっ!?
女の子同士でハグしてんだろ？
う、うん。
大丈夫かしら？
お前の武器は笑顔と優しさだ。いつも通り自然に振舞ってりゃいい。後は……

頼りたい

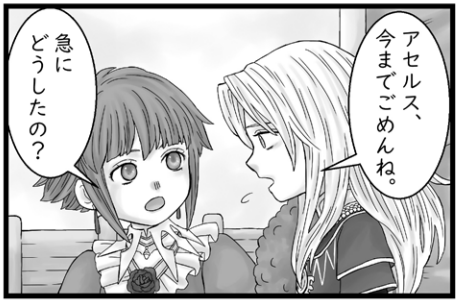
旅の序盤
アセルス様ー！
頼りにしてますわ。

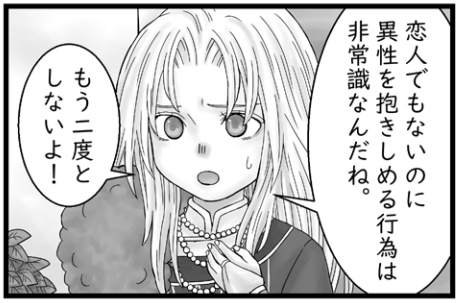

旅の終盤
少しはしゃきっとしろ。


圧倒的
包容力

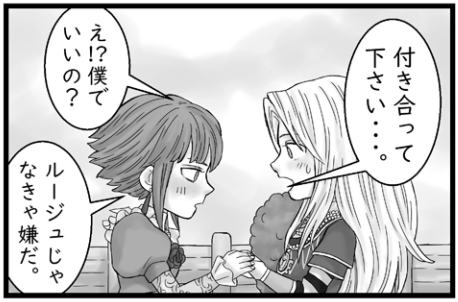

女神様!!

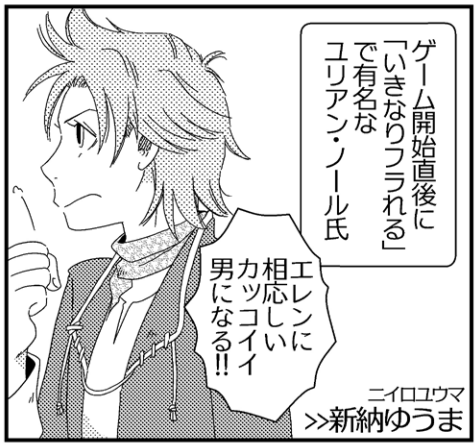
おめでとう

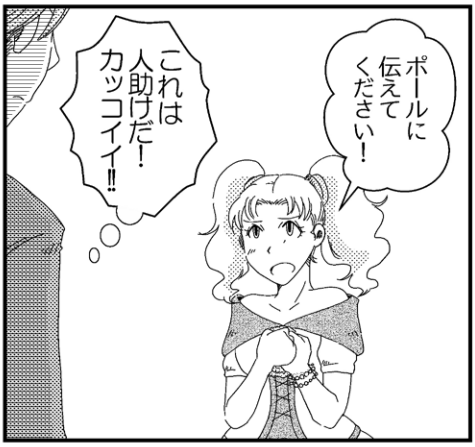

アセルス、今までごめんね。
急にどうしたの？


恋人でもないのに異性を抱きしめる行為は非常識なんだね。
もう二度としないよ！

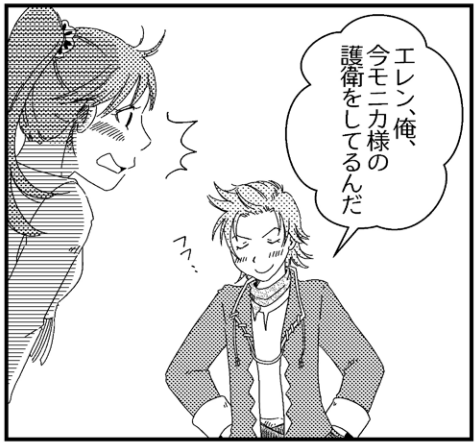
二度としないの？
うん、嫌な思いさせてごめん。
じゃあ恋人になったらしてくれる？

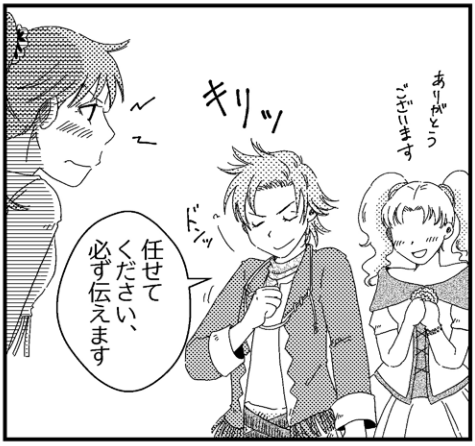

付き合って下さい・・・。
え!?僕でいいの？
ルージュじゃなきゃ嫌だ。





※注：本編にチラシはありません



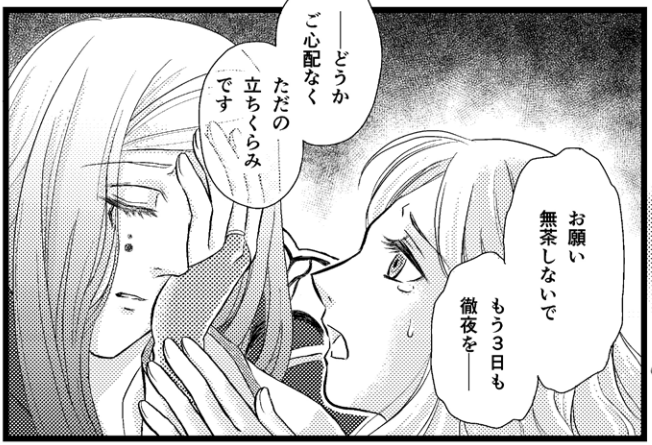


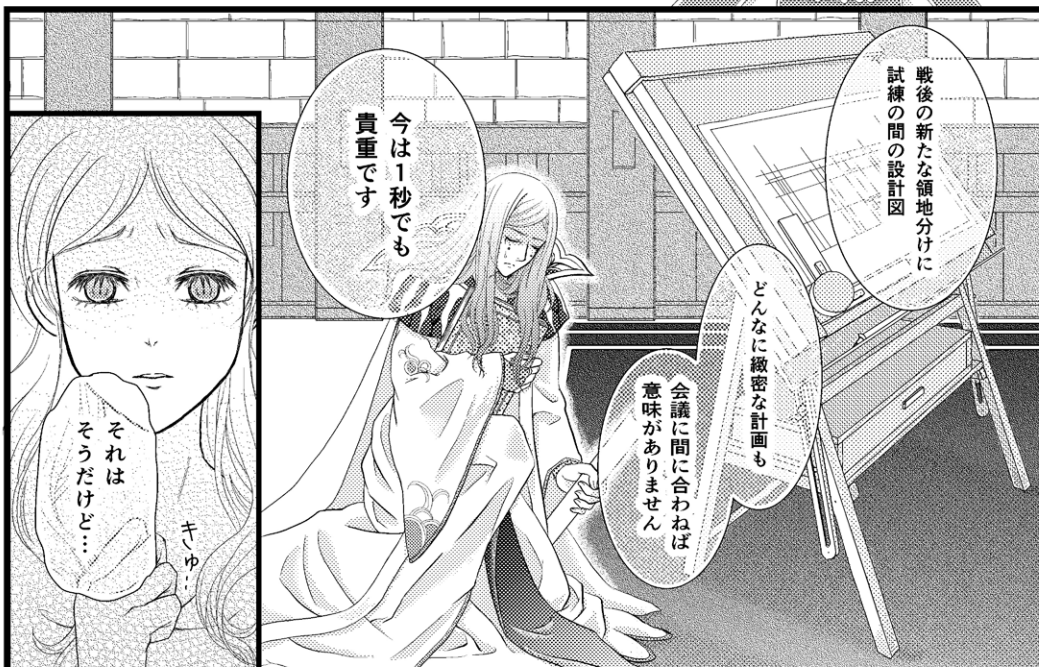
そんなユリエレが好きです

ヴァッサールx聖王

ランスのふたり

響喜(hibiki)





聖王様

皆の願いを
あなたが受け取り

私が形にする

それが私の——

役目であり
喜びなのです

ああ——
天に神が
いるのなら

お願い

どうか
この人と

ずっと一緒に
居させてください

私たちは

二人で
ひとつ

「二人でひとつ」

これは私の（2022年3月21日現在「ロマサガRS」の記述を中心に見た場合の）聖王とヴァッサールに対する認識です。

「ロマサガ３」の約300年前（「ロマサガRS」からは約600年前）、聖王が四魔貴族をアビスへ追い返して世界に平和と秩序をもたらした……という歴史上の物語、それが「聖王記」です。しかし、その具体的な内容は（現時点で）断片的に描かれるのみで、残る部分は書籍等に掲載された年表や断片的な設定などから推測するしかありません。

聖王と共に戦った仲間のうち、特に優れた働きをしたとされる三名が「聖王三傑」と呼ばれていますが、その中に唯一、聖王の意思（偉業）実現のためだけに存在したような人物がいます。それがヴァッサールです。
しかし彼の聖王への献身ぶりは、物語を普通に見ているだけでは、なかなか見えてきません。無欲な彼は、その偉業のほぼ全てを聖王に捧げ、その陰に慎ましく姿を隠しているためです。まるで太陽と月、日向と日陰のように……。

「聖王記」の内容を聖王とヴァッサールのみに絞ってプロット（あらすじ）に直すと、
『世界の進む方向が光（秩序）か闇（混沌）かを選択する重大な「宿命」を背負う唯一無二の少女（聖王）と、多様な能力と叡智を備えた美形の隠者（ヴァッサール）が出会う。少女は人々の願いに応えて世界に光をもたらす事を選ぶが、その実現方法を知らず失敗してしまう。隠者は少女に導きを与えて出廬し、己の持てる能力の全てを捧げて支える。二人は共に手を携え、ついに世界に平和と秩序をもたらした。その後、少女は世界を支えるためにこの世ならぬ永遠の存在となり、役目を終えた隠者は再び隠遁の生活に戻ったという』……となり、この二人だけで物語が成立・完結します。
つまり聖王とヴァッサールの関係性は、「聖王記」の物語が展開する上での「最大の柱」だといえるでしょう。

そもそも二人が出会わなければ「聖王」という存在が誕生せず、「ロマサガ３」にて聖王の功績とされるものの多くがヴァッサールの功績であり、さらに聖王軍全体を指揮できる人物がヴァッサールしか存在しないとなれば（少なくとも「聖王記」の物語の中では）むしろ二人がワンセットでなければ物語が動きにくいほどの強い関係性である……、というのが私の見方です。（ここまでは恋愛感情や愛情は是非物ではなく、一対一の強い信頼関係があれば成立します。）

さて、前述の「宿命」を背負うのは「聖王記」の時代には聖王ただひとりです。誰にも肩代わりできず、途中で人生を放棄することもできないため、聖王は壮絶な少女時代を過ごしています。過酷な「宿命」です。
そしてヴァッサールは彼女の「聖王」としての人生を共に歩みつつ、初めから終わりまでを見届けることの出来る（恐らく唯一の）人物です。そして彼自身にも彼女を最後まで命がけで支える覚悟が出来ています。（そう読み取れる言動が「ロマサガRS」には存在します。）

……ぶっちゃけますと、上記のプロット、聖王様の宿命と結末、そしてヴァッサールの覚悟と献身が、たまらなく切なくて愛おしすぎるのです。……お願い！ 聖王様と幸せになって!!

というのも、上記のプロットにもある通り、「聖王記」は世界に平和と秩序をもたらしてハッピーエンドではないのです。四魔貴族をアビスへ追い返した後、（恐らく、魔族の掃討戦を経て）、各地の復興の開始、聖王が生まれ故郷のランスに帰り、西側諸国の大会議（諸侯間の平定）、聖王三傑のうちの二人がそれぞれの国を建て、聖王が荒廃した東方を視察したのち復興を断念した……といった出来事が提示されています。（年表の出来事は資料によって年号や順序などに差異があります。）聖王の没年は不明で、聖王の墓とされる聖王廟（試練の間）が建築されています。
そして「ロマサガRS」では、（経緯は不明ですが）聖王が最終的に「世界の外」の存在（観測者）となったことが明かされ、東方の「見捨てられた地」の存在が強調されていました。であれば、聖王は東方から戻った後、程なくして「観測者」になったのでは、と考えるのが自然かと思います。

聖王は「宿命」を背負うとはいえ、あくまでも人間であり普通の生活に憧れていることが伺える描写がありますが、彼女はそれを一旦あきらめて世界のために戦い、そしてまた世界のためにこの世を捨てて「観測者」（世界に直接関与しない存在）となるわけで、世界のためとはいえ、あまりに切ない結末です。聖王は神や聖人ではなく普通の人間なのですから。

聖王は戦後、仲間たちとは別々の道を歩み始めますが、生まれ故郷のランスに帰った聖王の傍にはヴァッサールも一緒にいたはずだと私は考えています。……だとすれば、二人の間にはせめて真摯な愛情があってほしい。
過酷な宿命に翻弄され続け、世界のために戦い、最後は世界のために自らの身を捧げる聖王様に、せめて僅かな間でもいい、幸せなひとときがあってほしい……、そう心から願い、今回の話を描きました。

もし二人に幸せな時間があったとすれば、それはランスで大会議の準備をしている頃から、東方へ視察に向かった頃までのわずかな期間（１年あるかどうか）だったのではないかと思います。
聖王には実子がいないとの設定がありますが、実は私にとって二人の関係が一線を超えていたか否かはあまり大きな問題ではなかったりします。最後まで指一本ふれられなかったとしても、穏やかな温もりを与え合って眠っていても、激しい恋情に身を任せていても……どの在り方もそれぞれ美しいと思うのです。
少なくとも、世界のためにひたむきに働いている時、二人の心は確実に結ばれていたはずです。
全ては後世を生きる人々のため、先を見据えた準備です。それが可能なのもやはりヴァッサールしか考えられません。
ならばそれは、聖王とヴァッサール二人だけが成し得た、世界へ、そして人々への愛のなせるわざだったのではないか？
……そう思えてなりません。そしてその成果が約300年後の「ロマサガ３」の世界へと確実に繋がっていくのです。

響喜（hibiki）

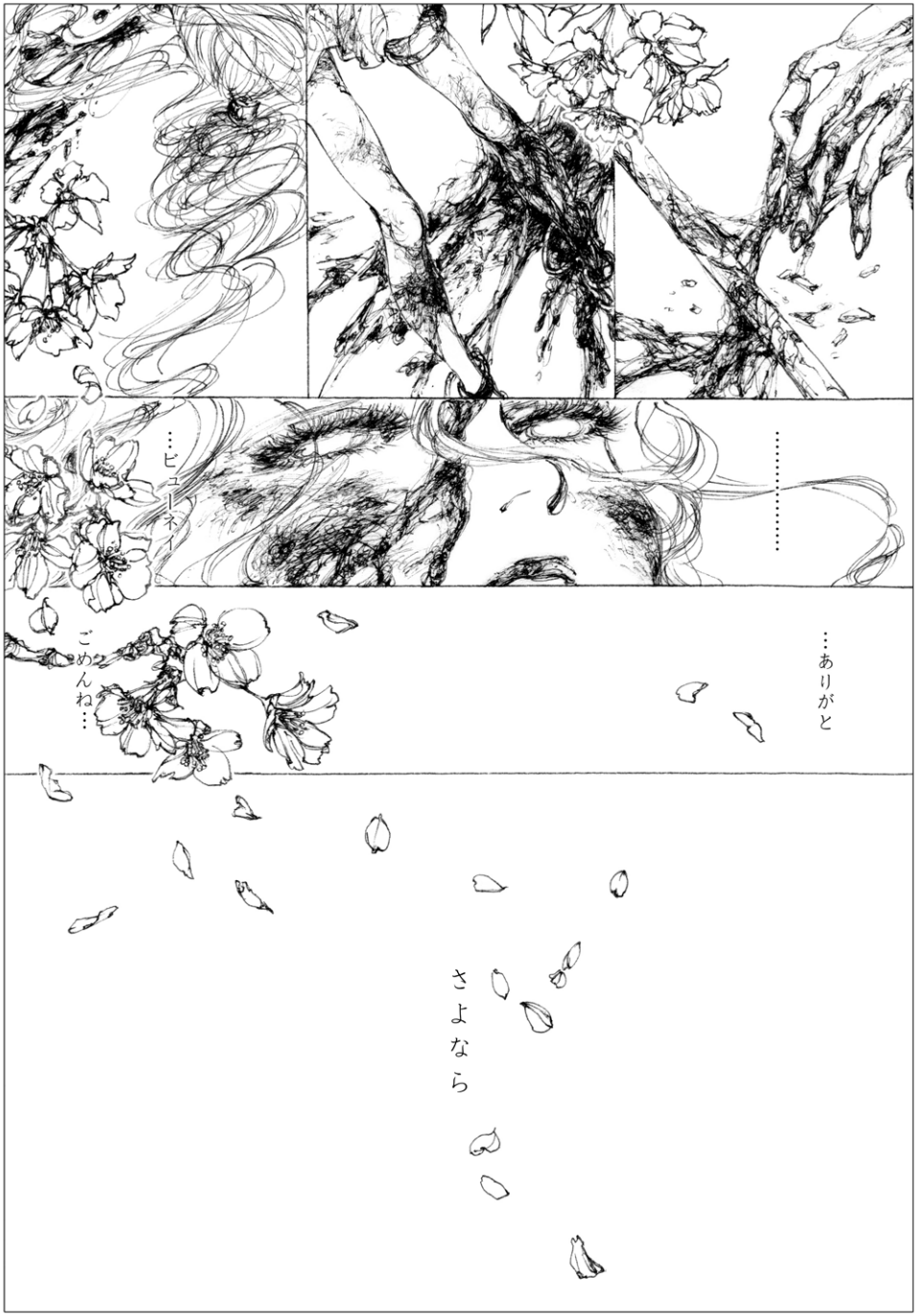
ゆらい

※作中に流血表現箇所があります。苦手な方はご注意ください。

そうだな
こっちの方が似合う
ふふ
ありがと
——前はね

この顔も身体も
全然好きじゃなかった
ビューネイがフォルのこと
「好き」「可愛い」って
言ってくれたから
フォルはフォルのこと
前より好きになれた
……フォル……

ビューネイ
ありがと
だいすき


……
…ビューネー
…ありがと
ごめんね…
さよなら

ビューネイ × フォルネウスという
異端的女男カプで参加させて頂きました。
恐縮です……

フォルネウスにどんなおようふく
着せよかなと色々資料漁ってたら
「フィッシュテール」のドレス
とゆうものをみつけてしまい……
もう選択肢それしかなくなりました。

レースの模様描いたりお袖もつけたり
本当はもうすこし凝るつもりでしたが
画面がごちゃあなりそうだったので
漫画ではまるっと省いて
よりシンプルなデザインになりました。

当初考えていた
もうすこし繊細な？つくりのものを
此処に描き残しておきます。

お陰様で最近
Twitter のプロモツイートが
ひらひらのおようふくだらけです。

ビューフォルについて
自分なりの根拠や馴れ初め等々
色々あるのですが
此処で語り切るのは不可能なので
Twitter で気まぐれにぽろぽろ
呟くことなどあるかもしれません？

ゆらい
@dora_yurai

SaGaFrontier

Rouge×Asellus　時

Acceso, Appassionato

暇乃余和

すっきりと晴れた空は、勿忘草の花弁より少しだけ深い色合いをしていて、近く夏が訪れることを予感させられた。

今日という日のために、この街そのものも飾りたてられ、平時とは異なる装いが誰の目にも新しく映っている。踏みしめられてきた年月の分だけひび割れた広場の石畳は、つるりとした艶を取り戻していた。街灯や門扉、店屋や人家の軒先、そしてこの街の象徴でもあるイルカ像には、赤、黄、緑など、色とりどりの風船がくくりつけられていて、いかにも非日常であるという空気を醸し出している。春からは遠ざかりつつある時候ではあるが、植え込みの花々は今が盛りだと言わんばかりに咲きに咲いて、それと競うかのように、青々とした葉のいくつもが太陽に向かって手を伸ばしていた。

ゆったりと練り歩く大人、ぴょんと飛び跳ねる子ども、あるいは——彼女と同じく円舞曲に合わせて舞い踊る人々は、誰もが普段よりもずっと洒落込んだ衣裳に身を包んでいる。潮風になびく燕尾服の尾は、陽光を受けて剣の切っ先のように閃く。くるり、と回転するたび、膨れ上がっては翻るドレスは、陽気に解けて開いていくつぼみによく似ていた。

この日のために結成されたという楽団が、弦の音色を主旋律として、優美な調べを奏でている。

男の左手、女の右手、まるで大きさの異なるそれらを重ねてから握る。たったそれだけで、胸が高鳴るのはなぜだろうか。舞踏に慣れない者も多いからと、緩やかな調子の曲ばかりが流れていて、しっかりと背中を支えられているのに、もう目が回りそうになっている。

くるくると廻る世界の中では、晴れた空も凪いだ海も、飾られた街もしゃれ込んだ人々も、全てが綯い交ぜになって、万華鏡で覗く景色のようだ。きらきら煌めく極彩色の奔流に身を任せていると、青い花のひとつを見つける。野にもあふれる、五枚の花弁の群れ。あれは何という花だっただろうか。誰かに教えてもらったかもしれない、元々知っていたのかもしれない、そのどちらかだったかさえ定かではない。今、どうしても答えを知りたくて、ターンのタイミングで離された右手で、彼女は宙に浮かぶそれを掴も

うとする。今度は世界が逆回り、しかし、あの丸い花に距離は近づく。

あと一歩、もう少しだけ、腕を伸ばせば。

幻相の花に触れる前に、白い指先を皮の硬い左手が再び握って、引き戻す。

またも世界は逆回転、繋がれた手の導きには素直に従う。そうさせるだけの力強さがあった。震える弦（いと）の音（ね）は思いの外力強く、その旋律の線を耳で追っているうちに、モザイク模様に見えていた辺りの光景が、はっきりとした輪郭を取り戻していく。

アルドラは改めて目の前にいる人の顔（かんばせ）を見つめてみる。

いつもであれば、そんな些細なことですらできない。この人があまりにもまぶしいから、今ではないいつの日かに伝えたいことがあるから、それが、己が身には畏れ多くもあることだから。何よりも、自分自身が、この人に恋をしているから。……理由はいくつでも見つけられる。

だけど、ほとんどぴったりと身を寄せて、互いの体温を分かち合うような距離感で、逆に言えば、逃れる場所がどこにもないこの状況では、アルドラ自身の赤茶けた目と、かの人の、澄んだ水の色をした瞳を合わせるしかなかった。季節はずれの紅葉のように、赤く染まった頬を隠すこともできず、ただただ焦がれる想いをぎこちない微笑みで誤魔化すのみ。それも、ダンスに慣れない身には残酷な、軽やかな円舞曲（ワルツ）に翻弄されているから、うまく繕えているかは微妙なところである。

手に手を引かれ、もう片方の手では身体の軸をまっすぐに整えられる。楽団の奏でる旋律をそれとなく意識すると、少しかじっただけのステップでも足が自然に動き出した。自身のものよりも、ずっと長い別の足がそれとなく先導してくれるから、楽だった。

とくんとくんと、いつもよりも早く心臓が脈打つ、それが心地いい。

手、胴、足を重ね合わせて、くるくる、くるくると華やかに飾り付けられた広場を廻る。

時折、片手がぱっと離れて振り回される。放り出された世界にて、ふわり、宙にでも浮いているような錯覚に襲われる。浮き上がったものは、重力に従って落ちるのみ。そのままバランスが崩れて倒れそうになる、その直前のタイミングで、また手を掴まれて引き寄せられる——ただ、今回は少しばかり、力が強すぎたらしい。細くて高いヒールの靴ではバランスが取りづらく、つんのめりそうになるところを、今日だけは銀の鎧を脱いで、燕尾服を纏った胸板と、大きな両手に抱き支えられる。

くるめく世界が、ぴたりと停まった。

楽団の演奏は淀むことなく流れているし、アルドラとミルザの二人以外は踊り続けている。
アルドラは、己よりもずっと高い位置にある、ミルザの顔を見上げてみた。
ミルザも同じく、アルドラを見つめている――ひたすらに穏やかで、優しいまなざしで。
手を伸ばして、少し乾いた頬と、薄い唇に触れてみたい。今ならば、それが許されるかもしれない。アルドラはそう思ったけれど、両腕ごと抱きしめられているような体勢なので、叶わない。
身体が火照っているのは、つい先ほどまで踊っていたからなのだろう。
胸の奥は、じわじわと炙られているかのような熱を持つ。かの人に与えられたその熱が、今のアルドラを動かしているといっても過言ではない。
恋という名前を付けられた熱に、浮かされている自覚はあった。
（今は、今だけは、私だけのあなた）
切れた息が整うまで、二人は見つめ合っていた。
吐息と吐息が混じり合う、そんな眩惑に落ちたのは、アルドラだけではなかった。

◇◆◇

事の始まりは、ロアーヌの姫君のこんな一言である。
「皆さんが着飾った姿を、ぜひ、見てみたいのです」
異界からの来訪者が現れるようになって、十五年近く。知らない誰かの声に誘われて、塔の天辺から降りてくるその人たちは、確かな強さとそれに見合う心の持ち主ばかりだ。全く縁もゆかりもない世界で生きる人たちのために尽くしてくれている。
その恩に報いるべきと、言い出したのは誰だったのだろうか。
異界の戦士たちを労り、そして鼓舞するための催し――いわゆる祝祭が開かれるようになったのは、塔士団と東の魔女が初めて交戦した後のことである。
それから、人にとっては短くはない時が経過し、あらゆる世界から戦士たちが喚び出され、『異界の戦士』という存在が人々にも馴染んできた頃、かつてのロアーヌの姫君が、唄うように言い出した。
「皆さん、素敵な方ばかりですもの。髪を結って、少しだけ白粉を叩いて。それにドレスを合わせたら、もっと素敵になるわ。
街も飾り付けて、舞踏会を開いてはいかがでしょう？」

ドレス、それは女の憧れ。
いくら世界が広くとも、あるいは、世界そのものが異なっていようとも、ある程度の共通項はあるようだ。晴れの舞台で纏う華やかな衣裳、それがドレスなるもの。男の方も着飾って、優雅な調べに心を乗せて舞い踊る、それが舞踏会。
かくして、モニカ姫の発案（鶴の一声）により、バンガードの街そのものを舞台にしたダンスパーティが開かれることになったのだ。
そうなれば、平静でいられないのは女の方である。
どんなドレスが似合うだろうか。これも大変重要な案件（こと）ではある。
しかし、それ以前に、誰とともにパーティへと赴くか。
こちらから誘うか、それとも、あちら（男）から誘われるのを待つか。これこそが女（女）たちにとって一番の関心事なのであった。
舞踏会の開催が告知されるや否や、既に相手（パートナー）のいる者、あるいは気概のある男は、早速このことを知らせに行ったし、待ちの体勢より攻めの姿勢を是とする女は、意中の男にその日の約束を取り付けた。
あいつは鈍いから仕方ないというぼやきとか、朴念仁はどこまでも朴念仁なのだという半分怨嗟でもう半分は諦念のため息、あの男にエスコートは仕込んでいなかったという後悔とか、あるいは思いも寄らぬ相手から誘われてどうしようという歓喜などが漏れ聞こえてくる。
さて、アルドラも勿論、舞踏会のことを耳にしていたし、ミルザと踊ってみたいという願いも当然持っていた。それと同時に、ここに来ても多忙を極めるミルザの邪魔をしてはいけないという分別の方が先立って、言い出すなんてとてもできない状況でもある。
（そもそも、ミルザと一緒に行きたいなんて言ったら……、告白してるのと同じじゃないか）
恋する人とともにいたいという想いも、その人の妨げにはなりたくないという祈りも、じわり身を焦がす恋心ゆえ。
そんな訳で、舞踏会のことは見なかったことにして、遠征に出たり、術などの修練に励んだり、時々は不貞寝なんてしたりして、バンガードでの日々を過ごしていたアルドラであったのだが。
その日は、たまたま塔士（ポルカ）からの指名があって、アルドラはミルザとともに出撃した。大した怪我もなく目的を達成できた、気楽な帰り道のことである。
「――そういえば、アルドラ」
今日は楽勝だったとか、帰ったらふんわりした白パンにかぶりつきたいとか、他愛のない話ばかりを繋いでいたの

だが、その流れの断ち切ったのは、他でもないミルザだった。
「舞踏会の話は聞いているか？」
「……何のことだ？」
ここで、アルドラにすっとぼける以外の選択が取れただろうか？
嘘を吐いてしまう、その心苦しさから、ミルザの視線から己の目線をそらしたのだが、相手はそれに目敏くも気付いた。榛の色をしたアルドラの瞳を覗き、同じ問いを繰り返す。
「お、ほ、他の女たちが騒いでいるアレのことか？
オレは……正直、興味ないよ。ダンスなんて術より分かんねえし。……ドレスは、オレには、似合わないよ」
今度は多分に本音が含まれている。アルドラは何せ育ちが悪い。それは、今の彼女を作り上げている過去であり、どうあっても覆せないもののひとつでもある。
身綺麗にして、ドレスで着飾り、音に合わせて踊りながら相手の腹を読む。そんな、いわゆる上流の暮らしとはまるで無縁であるし、これから覚える必要性も感じない。
何より、ミルザと一緒に舞踏会へと赴くことを望んでいながらも、実際にそうしている自分自身を、アルドラは想像できなかった。
だが、ミルザはどうも異なる考えを持っているようだ。
「君の身のこなしなら、少し練習すればダンスは問題ないだろう。
ドレスや他の装飾品は、ロアーヌ候が用意してくださるそうだ、これは聞いていると思っていたが」
異界の戦士の大半は身一つで召喚されている。よほどの理由がない限り、余所行きの衣裳を持ち歩いているはずがない。勿論、ミルザも銀の鎧と二振りの剣だけを持ってここに喚ばれているから、衣裳は借り受けるつもりなのだという。その点はアルドラと大差ないと言いたいらしい。
「そうじゃなくて……！　オレ、舞踏会とかそういうの、よく分からないんだよ。作法なんてのも、全然知らないし――、分かるだろ？」
「モニカ姫は堅苦しいものにはしないと言っていた。
それに、宴は楽しむものだよ、アルドラ」
行かない理由がひとつひとつ潰されて、その先に待っていることにきっと心が躍ると分かってはいるのだが、なぜか追いつめられているような焦燥をアルドラは覚える。
「ミルザがそんなに言うなら、行ってみても、いいけど、さ……」
すい、と目線を逸らす。
自分に宝石と等しい価値があると思いこんでいる、高飛

車な女みたいな言い草だ。苦し紛れに吐いた台詞に嫌味な響きを見つけてしまい、声が尻すぼみになっていく。

しかし、首肯したことには違いなく、ああ、結局は言ってしまったという後悔のような渋みを舌の上に感じる。

改めて、アルドラはかの人の顔を見やる。

ミルザはアルドラよりも年上だが、そのときに見せてくれた笑顔が少年のそれのように晴れやかであったから、アルドラは思わず見惚れてしまった。

目を丸くしたアルドラに、ミルザは気付いたらしい。次の瞬間、いつも見せるごく穏やかな笑みへと変じる。それから、やや乱暴な手つきで、頭をぐしゃぐしゃと撫でられた。やめろよ、と声では制止を求めてみるが、手足でどうこうするつもりはアルドラにはない。なされるがままだ。そして、改めて思い知らされる。

やっぱり私は、この人にはどうしたって叶わないのだと。

◇ ◆ ◇

服飾にそれほど明るくないアルドラのために見立てられたのは、赤いドレスだ。唇に引く紅のような色合いのそれは、影が混じると青味を帯びた。陽向で佇んでいれば実に赤々としていて、葉陰が落ちれば表情を変える様は、温度で色を変えていく炎のよう。

腰は幅広のリボンで締められている。元々、アルドラはすんなりとした腰回りの持ち主だ。コルセットなどは必要としていないし、葡萄酒色のリボンをぐるりと巻いて引き絞ると、その細さが更に引き立つ。

支度を手伝ってくれる女性らには、あらかじめ、華美な装飾品は邪魔になるから必要ないと、彼女にしては丁寧な言葉遣いで伝えていた。しかし、「もったいないから」という理由で、耳や手首、そして胸元を銀色に光る細鎖で飾り付けられた。背中のほとんどを覆うほど長く豊かな髪も、今日は編み込まれてひとつにまとめられているから、その輝きが隠れてしまうことはなかった。

（別のヤツに使えばいいのに、訳わかんねえ）

いつもとは違う出で立ちには、息が詰まる。

身体が重いと感じるのは気のせいではないだろう。

いつも通りには、そして思い通りにも動かない身から気を逸らすように、アルドラは周りを一瞥した。彼女でも見知った顔がいくつか見えてくる。

ふと、目に付いたのは、水にも氷にも見える髪の色をした女だ。普段着としているローブよりも、身体の線にぴったりと張り付く青いドレスを、何ともないように着こなしている。誰かを待っているらしいが、いつも通りの居丈高

に見えて、少し憂いを秘めた表情には何とも言えない艶がある。下手に声をかければ逆に呑み込まれてしまう、湖のような女だ。そんな女に声をかけた男にも、見覚えがあった。遅いわよ、なんて文句が先に出たようだけど、つららの先がほんのちょっとだけ融けて丸くなるような、そんな女の変化に気付いた者はどれだけいるだろうか。

楽団は既に演奏を始めていて、きっと優雅とでも表すべきなのだろう調べが流れている。舞踏会なるものはどんな世界でも通用する言葉のようだが、勝手の分からない者もいるらしい。音楽に何とか合わせて初々しく、あるいはたどたどしく踊り始めるものが目に付くが、勢い余って相手を投げ飛ばすものもいるようだ。着飾ってはいるが、この場にいるほとんどが戦士なので、何が飛び交っても驚くことではない。今もまた、どこかで見覚えのある黒眼鏡がなだらかな放物線を描いていった。せめて、海に落ちていなければいいな、と思った者がいるかどうかは定かではない。

そうして、男と女が舞踏なるものに興じてみたり、それに疲れて甘い飲み物で一息ついたり、あるいは訳も分からずただ騒いでみたりと、バンガードの中央広場は実に賑々しくある。そうなれば、ただ一人の人間を見つけることはとても困難であるように思われた。だけど、彼女はその人を見間違えることはまずないし、彼にしてみても、それは同じことである。

ただ、綺麗に飾り立てたところを、見たことはなかった。見てみたい、と思ったことは、一度や二度ではないが、それが許される状況下でもなかった。

すっと通る鼻筋からふっくらとした唇には、思わず触れてみたくなる魅力がある。顎から胸元に至るまでの線は細く、それなりに鍛えた男性であれば片手だけでも手折ることができそうだ。

その首から肩、そして背中の上半分の肌がむき出しになっている。遠くから見るだけならば、鮮やかな花のような色合いが特徴的なドレスだが、よく近づいてみると肌の露出がなかなかに多いことが分かる。

「……ミルザ？」

少しばかり離れたところから、平時とは異なる装いをじっと眺めていたけれど、彼女の方も彼に気付いたようだ。視界のうちに姿を認めると、目を大きく見開き、吸った息をそのまま呑み込んでから一瞬だけ動きを止める。それからは我に戻ったのか、いつもより少しだけぎこちない動きで、だけど、いつもとまるで変わらず、嬉しさを隠そうともせずに頬を綻ばせながら近寄ってくる。

今日は踵の高い靴を履いているようだが、それでも彼とは身長差がある。小首を傾げて、飴色の瞳で見上げられる

と、どくり、と己の心臓が拍を打つその音がはっきりと聞こえてくる。

「――アルドラ」

名前を呼んでみれば、照れたように頬が朱に染まる。

今更ながらに恥じらったのか、細い腕を伸ばしかけたところで引っ込め、髪の乱れを気にしたり、熱を持った頬に触れてみたり、そしてまたじっと見つめるなどする仕草の数々には、思わずその腕を取って、そのまま振り回したくなる魔性があった。

◇ ◆ ◇

そうして、ダンスに興じて（散々振り回されて）、一息ついて。

火照った身体を潮風が撫でた。きんと冷やされた果実の絞り汁を一口含む。ほんの少しだけ酸っぱくて、とびっきり甘い。疲れた身体にじわじわと染み渡っていく。

大したことはしていないはずである――命の奪い合いである戦闘などとは比べるまでもない。なのに、息は明らかに弾んでいたし、きっちりとまとめられていたはずの頭髪は少し乱れて、ふたつの頬はまだ紅潮したままだった。

何よりも、心臓はまだとくり、とくりと音を立てて、己の胸の内で確実に鼓動を刻んでいる。

肌の上にまとわりついていた熱は潮風の手で払われつつあるが、だからとて、身体の内側を巡る血汐は決して停まることなく流れている。

ゆるやかな旋律に合わせて、あらかじめ決められた型の通りに、くるくる、くるくる、巡って廻る、ただそれだけ。なのに、ひどく疲れたような気がする。だけど、決して不快ではない。むしろ……あの浮き立つような高揚感を、何度でも味わいたい。その誘惑には、どうしても抗えなかった。

青い空の上を、綿雲が滑りながら徐々に形を変えていく。楽団は一端演奏を止めた。場も慣れてきたということで、次からは少しテンポの速い曲になるようだ。

次は、もっと上手く踊れるだろうか？

「ミルザ、次の曲が始まったら、また一緒に踊ってくれる？」

甘えたような声が出てしまったかもしれない。だけど、今日だけはいいことにする。

ミルザが頷いたところで、その腕に自らの腕を絡めて、強く引きながら、アルドラは人と音があふれる広場へと歩き出した。

〈了〉

■5W1Hによるボルウン

・When

生き物がバタバタと死ぬ死食から15年後

・Where

モウゼスの北側と南で分断して一触即発な雰囲気で治安は悪そう(確実にケンカしている2人のせい)

・Who

→ボルカノ

手先が起用でアイテム作りの職人でもあるカズレーザー並の真っ赤な衣装の朱鳥術士でスクエニ特有な髪型ヘアスタイルは微妙にアレンジで、ちょこちょことは小物も使うおしゃれさんの模様※全身真っ赤だけど

→ウンディーネ

社会的地位も確立してて頭脳も美貌も兼ね備えた、まさに天に二物以上のパーフェクト超人な玄武術士スリットの深いチャイナドレスの様な法衣が刺激的！若い男に滅茶苦茶モテる！さいつよなお姉様！

・What

井戸を挟んで街を北と南で通行止めにしたり、常に喧々囂々で街中に迷惑をかけまくっている状態

両者共にお互い疎ましく思い、死者の井戸の中にある魔王の盾を欲してる似た者同士だったりする

・Why

腕の立つ主人公達に、お互い殺害する事を依頼（各2000オーラムの価値）直々に蹴りを付けない理由でもあるのかな？もう関係修復できない程に溝が深まったけども、自らの手でとどめを刺せない程に情があるから、他者に暗殺を依頼なのかな？そこんとこを御本人達に詳しーくカツ丼食わせてでもお訊きしたいお年頃

・How

選択肢や行動によっては、ぶちコロする事もケンカ両成敗する事も、そこはサガシリーズならではの自由さで色々とできる仕様なので、2人のお好みでどうぞ！

自分は初プレイ時にボルカノをぶちコロでウンディーネを仲間にしたけども『実は憎みつつでも好き好き同士で取り返しつかない事をしてしまったのではないか』と怖くなって他の主人公で遊び直しましたがwwwボルカノとウンディーネは、トムとジェリーの様に仲睦まじくキャッキャウフフでケンカしてて欲しい所。火星の砂を連投すれば魔王の盾も楽勝で取れる事を知らなそうなのも２人の可愛い所

沢木裕也

■個人的なボルウンの解釈と設定　沢木裕也

ウンディーネは仲間になってくれたり高嶺の花に見えても友好的で、魔王の盾に執着というよりボルカノを始末が最優先に思え、ボルカノが魔王の盾を欲しがり過ぎてるせいで先回りで盾を手に入れたがってる様な印象を受けたので、それなら何故にボルカノの方は魔王の盾を欲しがっているのかを、妄想込みでちょっと考えてみた。
朱鳥の術で才能が開花し、玄武の術の使い手である彼女の元には常に若い男が慕い、隊列研究で弟子達とキャッキャウフフで彼女の隣という居場所が無くなったかなと。
個人的には焦って童貞拗らせたボルカノがウンディーネにちゅっちゅで襲い掛かり、サンダークラップ辺りで迎撃され『アイツに釣り合う男に……いや、アイツを越える男にならないと、キスはおろかその先のプロポーズなんて夢物語だな』と、強さを追い求めて、小耳に挟んだ魔王の盾の事を知り貪欲に欲する様になっていたら嬉しい。
ウンディーネは『魔王の盾？そんな危ない物に興味を持ってはダメでしょう？あの子が手にするより先に手に入れないと』とメッ！する為であって欲しい。※ママか？
失敗しても良い様にという多少の理性は残ってそうだけど、モンスターに実験させている(実験台にしている)という手段を選ばず倫理もクソも無い非道さもあるので、何をするのかわからないので余計にウンディーネが心配したかも。※やはりママでは？
口論が平行線のままエスカレートして引くに引けず、本当に取り返し付かない状態まで険悪な状態に陥ってしまったのがゲーム中の状況だったら良いなと思う訳です。
ボルカノは書物から知識吸収(盲信)するタイプの童貞で、ウンディーネの事が大好きだけど、年齢差という問題もあり、男と思われてないのでは？と一方的な思い込みで愛情が愛憎になって、更に童貞を拗らせて面倒臭い事になっていたら凄く嬉しい。
ウンディーネは外面大人の女性で、内面は実はボルカノの事を大好きな純情乙女。
ウンディーネがツン全開ならボルカノが喧嘩腰で乗ってきて、珍しくデレても見当違いな勘違い(例:アイツが俺を好きな訳がない。どうせ馬鹿にしてるのだろう、人の気も知らずに！等と素直に受け取らない)で仲良くなれず、良い雰囲気になってもボルカノが童貞丸出しで台無しにするので、ウンディーネが激しい地団駄をタップダンス。
朱鳥術士達も玄武術士達も、果ては街中の住民全員
ウンディーネの乙女心を１ミリも理解できていない
ボルカノが童貞過ぎるのが全ての原因だと思ってる。
ケンカップルなのでコメディが似合うけど、美男美女なので、悲恋な愛憎劇でも絵になりそうではある。

■5W1Hによるバルメリ

※公式ビジュアルアーカイブスの設定も含みます

・When

ロマサガ3の死食後の、200と数十年後(……の、筈)

・Where

3の戦いの後、再生された世界のモウゼスが舞台

200年前までは諍いも特に無かった様なので、

・Who

→バルテルミー

小剣の扱いにも長けたポニテなイケメン朱鳥術士で、独学で術をアレンジもお手の物で、かなり腕が立つ部隊長を務める程で、全体知力バフのスキルも納得

→メリッサ

バルテルミー曰く強くて正しい心を持つ素晴らしい女性で、怒らせると怖いとか(怒らせた事があるのか)お嬢様な風貌でも実は部隊長でさいつよ玄武術士

・What

朱鳥術が効かぬ相手に悪戦苦闘中&絶望の最中、メリッサに命を救われるという形で運命の出会いをする後に朱鳥と玄武の混合部隊で一緒に活動で、そこで愛が育まれてたり初々しいやり取りがあったら嬉しい！ラッキースケベでも可！しかし、お互いが朱鳥術士と玄武術士同士の恋愛なので、周りが猛反対&大激怒

・Why

筋を通して術士引退届けを出すも、それでも両術士は２人を許せないのか暇なのか、執拗に２人を追い回す許されざる恋だとか、吊り橋効果とか、逆境という環境が２人のラブラブ度を高めてしまってる気もする

・How

無事に両術士達の追手をまき、『ねんがんの　マイホームを　手に入れたぞ！』という感じで二人は『家庭』を手に入れ、順調に愛を育み、可愛い子供にも恵まれて平和に暮らしましたとさ、めでたしめでたし。……とは行かず、その後はどこで嗅ぎつけたのかゼルナム族に襲撃をされ、悲しい事が起こってしまうが、ご自身でロマサガRSを遊んで確認して戴きたく。ネタバレ含むのでアバウトに説明すると、バルテルミーは裏の顔のあるオカマのサーカス団長になります（何故そんな事態に？状態ですが、公式設定です！）むしろここでのプレゼントークの方がネタバレなのは、内緒のお話ですwwww

沢木裕也

■個人的なバルメリの解釈と設定　沢木裕也

ビジュアルアーカイブスではバルテルミーの物語の補足もあり、実はメリッサに命を助けられたのは１度ではなかった事と、メリッサ側から意を決して玄武術士を抜けてバルテルミーと同じ状況になってでも彼を追いかけてきたという経緯が語られてるので、メリッサは姉さん女房でバルテルミーはメリッサの尻に敷かれてたら良いなと。バルテルミーは朱鳥術士姿の頃はのほほんとぽやぽやしているので、ちょっと抜けてるほんわか系の旦那とそれを支える良妻な図だったらとてもとても嬉しい。自分が！駆け落ち後は追手の警戒もあって状況が状況なので一軒家でひっそりと隠れ住んでると思うのですが、自給自足では入手できないものをバルテルミーが街まで足を伸ばし仕入れているのではと。なのでリン・ウッドファームとか経営してて、そこでとれた産みたて卵とか農園で収穫した野菜や果物、それらを加工して作ったメリッサ特製菓子等を売ってお金を仕入れるという、牧場物語ライフを過ごしていて欲しいお年頃。……で、可愛らしい青いちょうちょの描かれたリップとかを目にし、メリッサが好きそうだし贈ったら喜んでくれるかな？と、プレゼントとかして喜ばせてて欲しい。
メリッサは私服がドレスの様な感じなので力仕事は夫に任せて、家庭を守りながら農園に玄武の術を用いて水やりをしたり鶏達に餌やりしたり、冷蔵器具は技術的にまだ開発されてなさそうなので、箱型の保冷庫の氷を作って補充等してたりなのかなと。二人きりで一緒に居られた時間や家族との安らかなひとときは、きっと生きてきた中で『理想とも呼べる最高の幸せ』とは思うので、追手に見つからぬ様にこっそり２人きりでも家族と一緒でも、ピクニックやら紅葉狩りやら人生を最大限にEnjoyしていて欲しい所。もしもストーリー上で何事も無かったら、野球チームが組める程のびっくり大家族な程に生涯永遠にラブラブな仲良し夫婦であって欲しいと切に願う所。
ゲームで2人揃って実装された時、両者天井してでも確実に入手して一緒に使う！と息巻いていたのですが、最初の10連で２人同時に来てくれた時は『どんだけ仲良し夫婦なんだ！wwwww』と、それはもう笑い転げました。仲良しすぎるエピソードです。

バルテルミーの一人称は相手や時期によってコロコロ使い分けてる様なので、メリッサがどんな彼でもまるっと愛してくれていたらとても嬉しい。泣いて歓喜する。自分が！優しくて心強く精神的な面でも救われてるメリッサに対し感謝と惜しまず愛を捧げててくれたら嬉しい。自分が！
♪リコータ～喜びはひと～つ　マハ・リコータ～幸せはひと～つ…。

ハリード×エレン

太陽と羅針盤

～レオニード城編～

by sykariepy

行つけー！

副将エレン選手の勝利です!!
大将を残しての勝利
これは強い――ッ

一本！

それまでえっ

あれ？

俺出番なし!?

エレン様!?

最後の技は何ですか？

ナイアガラバスターを受け身の取れない体勢で投げたもの

ユリアン！ツヴァイク公に輿入れなんてやっぱりイヤ！

一緒に旅に出ましょ

ええええ

うえ～

ゴールドメダル授与　そして…

ポドールイ

吸血鬼伯爵の聖杯なんざ何で取りに行かなきゃなんねーのよ

俺寒いトコキライなのよ

ツヴァイク公はポドールイが自分の配下に収まらないのが気に入らないんだろうよ

旦那寒いのよく平気な

ポドールイは比較的ロアーヌ側についている自治領だしな

Baundaries
Kidoranto
Zweig
Podo
Zweig
Principality of Roan
Roane
Meurs
Chill Lake

俺は聖王遺物の聖杯に興味があるがね

私も見てみたいわ！

シカのシチューです

美味しそー！

何時？

ぼーーーっ

追加頼みましょうか

パンちょうだい

あ～もっと着てくれば良カッタ

これ！もも肉おいしいですね

酒飲みたい

お姉ちゃん！デザートも食べようよー

おい
エレン聞いてんのか!?
わ
何よ〜!
付いちゃったじゃない!
いきなり大きい声出さなくてもいいでしょ
お前が返事をしないからだろう
伯爵様
伯爵様
……
ハリードさん エレンさん少し変でしたね
…ボンヤリしてここの気味悪い女たちみたいだ
長居したくないぜ
ポドールイ

レオニード城

たのもー

仕方がないぶちやぶろう

※日中でも薄明か、太陽が沈んだ状態が続く現象

聖杯を？

…ようこそポドールイへ

私の部屋にあるのだが…

今は極夜※でね…お客人には体感しにくいかなもう夜も更けているのだよ

部屋を用意したので今日は休まれるとよい

直接見えるわけではないが……

ここに血を吸われに来た女がいるのかな

濃密な女の気配があちこちにする――

ジャンケンポイッ
くそおお
がーん
何で一人部屋があるんだよ
日頃の行いだな
けけけ
タチ…ミルフィーユを一人にはできないから
おじさんゴメンネ
一人部屋カワイソ
ブラックさんの隣は私がいますから大丈夫ですよ
エレンさんが心配なんだなあ
頼むわ
くっそー！気味が悪いだけで怖いわけじゃないんだぜ！
ガチャ
シーン
確かに時間の感覚がないな…
気味の悪い城だぜ早く寝ちまおう

ハー
キイ…
!!
しゅるしゅる
カさ
カさ
かちゃん

エレン
お前一体どうしたん…
ははっ…マジかよー……
魅了(チャーム)
ぼぉぉ
間違っても他の男の方に魅了(チャーム)されなくて良かった!!

しかしだが

これはこれでまずいでしょお

あの吸血鬼(ヴァンパイア)伯爵が

絶対どこかで見ている気がする

俺はそういうのは避けたいんだよ!!

あとこういう不気味なところで××な思い出を作りたくない

あの～エレンさん……

ハリード

あたし……

ハリードがすき……
……
わたし……
ああ
…ハリードが……
知ってるよ
ギュッ
魅了されてるがお前のそれ本心なんだろうなあ
ロアーヌからランス温海に海底宮 砂漠までここまで一緒に来たものなぁ
こうやって話してることお前は覚えているかな…
ま 忘れちゃっていいんだぜ
さてこの状態異常のエレンどうしたもんか…
魅了にしては控え目で可愛らしいが
…ハリード
一緒にいて…いい…？

……俺も好きだよ
ちゅ
これ以上はだめだぜ～絶対にあの吸血鬼伯爵が見てるからなー！
そわ そわ
ホラ　大人しくサッサと寝ちまおーぜ～…
……!?
なななな何この状況ぉ～～
はっ 恥ずかっ……
エレンの魅了は解けた
眠れるわけないよぉ～…
ど～やって部屋に戻ればいいのぉ!?
翌日は寝不足でヤミーに大苦戦！
くかー
くかー
完

珈琲と紅茶、どちらが好きかも知らないのに

夏海

「待っていてくれと頼んだ覚えはないからな」
「ええそうね、頼まれた覚えはないわ」
イタメシ屋のカウンターを挟んで、金髪の男女が睨み合う。一人は、この店の従業員であり、ライザの長年の相棒でもあるアニー。もう一人は、青い長衣に毛皮を羽織った男。同じ金髪でもアニーより色素が薄く、銀髪にほんの少し黄味を足したような色合いだ。
久方ぶりの再会のはずなのに、どうしてこうなるのか。
ライザだって、さすがにいきなりこの二人に甘い展開があるとは思っていなかったけれど、これはこれで想定外だ。

＊

この街で飲食店を営むなら、ランチタイムは他のリージョンよりも長めにするのが定石だ。サービス業や販売業従事者が多く、一般的な昼食の時間に食事ができない者も多いからだ。ライザたちがグラディウスの隠れ蓑として営業しているこのイタメシ屋もそれに則って、ランチは十六時まで、そしてディナーは十九時からとしていた。
ルーファスはディナータイムの仕込みの準備、ライザはフロアの掃除、アニーは食洗機から上がってきた皿やグラスの水気を清潔な布巾で拭き取っている。食器を曇りなく磨き上げるのはアニーの得意技のひとつだった。
十七時を回った頃だ。ワイングラスを全て拭き終えた彼女が、先日マンハッタンで新しく買ってきた、アンティークの青いカップを手に取り、その金色の取っ手の部分を磨くのに取り掛かった、その瞬間。
扉を勢いよく開ける音がした。この店の扉は古くて、思い切り開ければ外れそうになる。実際、外れたこともあった。それで「開けるときはお手柔らかに」と張り紙をしているのだけれど、殆ど効果はなく、常連ほど手荒く開ける傾向にあり、そのたびにライザやアニーが注意を促す。
「ちょっと、扉はそっと開けて、って言っているでしょ！それに夜は……」
遠慮のない開け方は常連のそれだったから、アニーもいつもの通り威勢よく注意を飛ばした。しかし、その言葉は最後まで紡がれることはなかった。

「ブルー」
それが、突然の来訪者の名前だった。

＊

「随分と久しぶりね。マジックキングダムの英雄さん」
席を勧める前に自分からカウンター前の椅子に座った法衣姿の男に、ライザは皮肉を込めてそう声をかけた。しかし、返事はない。
七年前、アニーとライザ、そして裏で仕込みをしているルーファスは、ブルーが印術の資質を集めるのを手伝った。共に行動し始めた当初は、口数が少ないながらも丁寧な口調と礼儀正しい立ち居振る舞いを見せて、特にルーファスは若いのにたいしたものだと褒めていた。しかし、打ち解けてくると徐々に慇懃無礼な面や暴言が目立ち、ルーファスの前ではそういう尻尾を出さないものだから、アニーとライザは腹を立てていたものだ。だから、先ほどライザが皮肉を込めて言った『英雄さん』という言葉に対しても、たっぷりと皮肉を返してくると思っていた。
しかし、男はただ静かに座っている。ライザはそれ以上何も言えなくなってしまった。聞きたいことは、山のようにあるのに。
アニーが手にしていたカップをカウンターに置く。その音が妙に響く。彼女もまた、聞きたいことがあるのはライザと同じ。いや、ライザ以上に、たくさんあるはずだった。二倍では足りないかもしれないくらいに。
印術の資質を取った後、ブルーは何かに追い立てられるようにライザたちの側から去っていった。これからどこへいくのか、何をするのかも告げずに。
ルーファスの料理をたまに食べにくる捜査官ヒューズによれば、あの後ブルーは双子のきょうだいと戦って、その相手を意識ごと吸収し、元々集めていた術と相反する資質をも得たらしい。
これだけでも人の理解の範疇を超える事態なのだが、話には続きがあった。彼らの故郷マジックキングダムは地獄なる人工のリージョンからやってきたモンスターたちの襲撃を受け壊滅、ブルーと双子のきょうだいは危険を顧みずに地獄へ突入し見事封印を成し遂げて戻ってきた。まるでおとぎ話か、十代の子向けの冒険小説の筋書きのような話だ。
その後ライザたちがブルーの姿を見たのは、公共放送の臨時特番内だった。彼はリージョンの代表として、僅かな生き残りで復興を目指すこと、そして地獄の監視を続けていくことを語った。放送後は、リージョン世界の安全を揺るがしかねない事態の隠蔽に批判も多くあった。

けれど、ブルーを含め現在マジックキングダムに残っている術士たちは何も知らずにただリージョンに尽くしていただけだった点、ぎりぎりのところでリージョン外に問題を『延焼』させずに済んだ点、全てを真摯に公表したことや、マジックキングダムが築いていた魔術文化と思想の尊重という面から、世論は徐々に『静かに見守るべし』という方向へと動いていった。特に、地獄封印以降、事態の公表や復興作業を全て率いている救国の術士ブルーには賞賛の声が集まっている。最もヒューズに言わせれば、『そういう世論を形成するのに俺も一役買っているわけよ。いろんな捜査で培ったツテがあるからさ』ということらしいが。

ともかく彼は今や英雄だ。最近では露出が減ったものの、二週間に一度は公共放送や雑誌やラジオに出演したりインタビューに答えたりしているのを見かける。当然、多忙でもある。きっともう会うことなどないだろうと思っていたのだが。

「あんたが連絡する義理なんてないもんね。こっちだって待ってないし」

え、とライザは手を止め、アニーを凝視する。

今の発言、大丈夫？

アニーは鉄の女と呼ばれるライザよりもドライなところがある。仕事で関わった人物について後に思い出すようなそぶりを見せることなど、少なくともライザの前では殆どなかった。その彼女が、公共放送でブルーの姿が映るたびに、その声がスピーカーから流れるたびに、ほんの一瞬、動きが止まって画面を凝視し、耳をそば立て、それから何もなかったかのように振る舞っているのを、ライザは見落としていなかった。さっきまで磨いていたあの、コーヒーにも紅茶にも合いそうなカップは、いつか彼が戻ってきたら出すつもりで買ったのだ、ということにだって気がついている。青と金。繊細な模様。それは彼の姿を思わせるに十分だった。あれだけは食洗機にかけずに手洗いをして、丁寧に磨いて。

だから、てっきり。

ただし短い同行の間に、二人の間に『何かが』あったとは思えなかった。本人にその自覚があるかないかすら、怪しかった。

けれど、それでも、今のは言い過ぎでは？

「当然だろう、待っていてくれと頼んだ覚えはないからな」

「ええそうね、頼まれた覚えはないわ」

睨み合う二人。何かあったか、と裏からルーファスが現れる。やがてアニーが視線を逸らし、ルーファスの入ってきた扉から出ていった。

「……何故だ」

ブルーは小さく呟く。
「何故、泣く」
思わずライザは声を上げそうになるのを堪えてブルーに近づいた。
泣いていた？　それじゃあ、やっぱり。
もしもそうなら、ブルー、貴方もう少し言い方があったんじゃ……？　あの子に、謝ってあげればよかったじゃないの。そう言おうとして……ライザは言葉を飲み込んだ。
彼の表情が、見たこともない様子だったから。叱られた子どもが、どうしたらいいのか分からず途方に暮れている、そんな顔だった。
ああ、そうか、この二人はお互いに、自分の気持ちの正体がはっきり分からないまま、この七年間。
さっきまでアニーが立っていたカウンターの内側に立ち、ブルーとライザの顔を見比べていたルーファスが、ライザを手招きする。
「アニーは何故泣いていたんだ？」
「……貴方の鈍感さも論外よ。話がややこしくなるから、ちょっと黙ってて」

＊

「えー、じゃあ何も言えずに泣かせて帰って来ちゃったの？　サイテー」
ルージュは喫茶店の窓際の席で双子のきょうだいブルーと向かい合いランチタイムを過ごしていた。話の合間にセットのサラダの葉をフォークで刺して口に運ぶ。瑞々しくておいしい。
リージョンを救い地獄から帰還後、分離する方法が判明し再び双子に戻ったルージュはそのまま旅に出て、今はここシュライクで恋人と共に暮らしている。
今日は、別々の道を歩み始めて以降初めて、ブルーの方から会いたいと連絡をしてきた上、資質集めをしていた頃一緒に旅をしていた女性に会いにいったら泣かれた、という爆弾発言が飛び出してきたので詳しく事情を聞いている。
融合していた頃、ルージュの記憶や思考はブルーに筒抜けだったので、恋人がいたことや、必ず帰ると約束していたことは全て伝わってしまっていた。一方で、ルージュがブルーの記憶や思考を覗くことは殆ど……ブルーが良しとした範囲でしか……できなかったので、ブルーに、わざわざ会いにいくような相手がいたなど全く知らなかった。
「そもそも何故泣いたか、分からない」
そう言いながらスープを啜るブルーは、頼りなく心細そうだった。ブルーの中にいた頃の記憶上は、いつも勇ましい表情を、またはしかめっ面をしていたのに。

ブルー、こんな顔もするのかとルージュは驚く。
「いや、君の言い方が百二十パーセント悪いでしょ。『頼んだ覚えはない』とか言うから」
「本当に頼んだ覚えはない。お前と違って、守れない可能性が僅かでもある事項について、俺は約束しない」
「……あの、僕だってあのときは負ける気なかったから、ちゃんと守るつもりで約束したんですけど」
「だが結果的に自分の力では果たせなかっただろう」
「はいはい感謝してます君が色々調べて手を尽くしてくれたおかげで分離できてこうして暮らせてますどうもありがとう。だから、今度は僕が君の恋のアドバイスをするよ」
「こ、恋……」
ブルーはスープを掬っていたスプーンを静かに置き、それから窓の外をぼんやりと見る。
「恋……なのか？」
「恋でしょ」
「分からん。分からんし、くだらん」
「七年経ってやっと取れた僅かな自由時間を割いて最初に会いにいく人って、好きな人……じゃないの？」
返事を待つが、なかなか言葉は発されない。待ちきれなくなってルージュは続きを述べた。
「くだらなくないよ、恋は」
「そうか」
ブルーは、表情を変えることなくスプーンを再び手に取り、スープを掬う。
「お前のように、ずっと一緒にいたいとか、大切だとか、絶対に幸せにしたいとか考えてないぞ」
「やめてくれないかな、普通は他人が知り得ない思いの丈や気持ちを口にするのは」
「ましてやもっと触れたい、とか、そういうことを考えたことはない」
「だからやめてってば！」
「そもそも、そんな、ふわふわした思いなど、俺は……知らない」
なるほど、彼はルージュの記憶と感情を共有してしまったことで、恋とはこういうものだという固定観念ができてしまい、未完成で未熟な自分の思いを同列のものとみなせないようだ。何をするにも前例を確かめたがり、調べたがり検証したがる彼らしい。ルージュにもそういう性質はあって、恋人によく『もっと思いのままに動いていい』と言われるけれど、ブルーと比べればだいぶ柔軟だ、とも思う。
「君のは、まだ育ってないだけだよ。もっとたくさん話したり、一緒に出かけたりするようになったら少しずつ変わってくるよ」

「お前は資質集めの合間にもなんだかんだ理由をつけて二人で出かけていたようだしな」
「でもちゃんと資質を集めたよ？　与えられた時間でやるべきことやってたから、文句を言われる筋合いはないな」
「だが俺に負けた」
「……」
　……いちいち腹が立つ、もうアドバイスするのやめようかな、と腰を浮かしかけて……このことを相談できる相手が自分以外にいないのだろうと思うと、見捨てるのも忍びなかった。椅子にきちんと座り直して、話題を少し変える。
「その人にさ、他の男性の存在がチラついたらどう思う？」
「チラつく、とは？」
「自分よりも仲がいい男の人がいるような感じがしたらどう思うかってことだよ」
「……」
　分かりやすく、ブルーは顔を顰める。
「そんな奴、いるのか、あいつに」
「いや……僕はどういう女性か知らないから、なんとも言えないけど……」
「そうか、心に決めた相手がいるかもしれない、のか」
「いないかもしれないよ」
「どうしたら分かるんだ」
「聞けばいいじゃない」
「聞けばいい……」
　ルージュの言葉を復唱し、固まってしまう。
　どうすればいいのか、想像がつかないらしい。
　いや、想像がついたとしても、相手に特定の相手がいるかいないかの見当もつかない程度の距離感らしいから、聞くなんて難しいだろう。
「無理かな、君には」
「何？　俺に無理なことなんてないぞ」
「いや、多分、今はまだ無理だって。もう少しいろんなことを話して、仲良くならないと」
「仲良く」
　また、復唱して固まる。
　ルージュに負けまい、自分にできないことはない、という気持ちだけはあるが、どうしたら関係を構築できるのかも想像がつかない様子だ。その『関係』は彼にとって人生で初めて築く種類のものなのだ。これまでの彼の言動を見ていれば、融合している間に彼の記憶を覗いていなくても、初めてなのだと容易に想像がついた。
　この男をこんなにも純粋な少年のように……いや、何も知らない赤ん坊のようにしてしまう人物。一体どんな女性なんだろう。いつか会ってみたいものだ。

そのためには、具体的で簡単で実践的なアドバイスをしないと。
「じゃあさ、まずはお詫びのプレゼント大作戦なんて、どう？」

＊

クーロンの夜は、輪をかけて治安が悪くなる。酒が入った者、元々どうかしているとしか思えない者、違法な薬物に手を出しているように見受けられる者……理性的とは言い難い者の姿が格段に増える。この時間はアニーが用心棒よろしくイタメシ屋の前に立っていることを知っていた。足早に、店へと急ぐ。
思った通り、店の軒下に彼女の姿があった。ややグレーがかった金髪を短く切り揃え、上半身を覆うものも下半身を覆うものもやたらと短い。身体のラインがはっきりと出るその姿に邪な気持ちを抱いて近寄るものは大体返り討ちに遭う。そうやってやりすぎて、彼女はディスペアに何度も送られている。
「アニー」
名前を呼ぶと、彼女は驚いたように振り返った。初めて会ったときのように、気安く近づくな、と一喝されるかと思い身構えたが、そうはされずに済んだ。
「……あんた、私の名前知ってたのね」
さすがに名前くらい知っている、と言いかけてやめる。ちゃんと名を呼んで、呼びかけたのは初めてかもしれないと思い当たったからだ。少なくとも、記憶にはない。
その程度の関係性で、本当に、恋などと言っていいものか。
一瞬ためらうが、軽く首を振って、その迷いを追い出す。決心してきたのだ、彼なりに。一つ一つ、積み上げていこう、と。
「先日は、悪かった」
「……何が？」
途端に声音が変わる。腕を組むその姿は、拒絶のようにも感じた。そんな態度ならもういい、と叫びたくなる気持ちを堪えて、ブルーは荷物の中から包みを取り出した。
「これは、詫びだ」
「だから、何の」
「待たせたことと、泣かせたことの」
「別に、待ってなんて……」
言いかけて、アニーは一度口を噤む。それから短く息を吐き、ブルーの差し出した包みを受け取った。ありがとう、と囁く声は雑踏に紛れて酷く捉えにくかったが、確かにそう聞こえた。

「……いいわ。私もあんたに見せたいものがあるの」
アニーは店の扉をそっと開け、ブルーを招き入れる。
「紅茶と珈琲、どっちがいい？」
「そうだな……」
どんな飲み物を好むか、それすら伝わっていないのだ。
今はまだ、この程度。
「俺は……どちらか選べるなら紅茶を飲む」
でも、一つ一つ、伝えていこう、とも思う。
「へえ、意外。私もよ」
まだ、恋かどうかは正直判断がつかないところもある。
そんな浮ついた思いを自分が抱いているだなんて、認めたくない、とも。けれど、ルージュの言う通り、少し話してみて……そして気が向けばいつか二人で出かけてみるのも、悪くない。その頃には、本当に恋なのか、そうでないのか、分かるかもしれない。
この結論の行方には、興味がある。
「ところでこの中身、何？」
「高級傷薬だ」
「き、傷薬？」
「また二、三人殴っているかもしれないと思ってな」
「あのね、人をバーサーカー扱いしないでくれる……？」

＊

「あのプレゼントは、何度思い出してもイマイチ」
柔らかな湯気と茶葉の香りに記憶を呼び覚まされ、彼女は笑った。あの夜も確か、この茶葉だった。紅茶派か珈琲派かも知らなかったあの頃は、今はもう遠い。カウンターを隔てて話していたのが、いつしか並んで座るようになり、そしてさらに時を重ねて、自室のソファーに並んで座っている。
「高級傷薬の何が悪い。狂戦士扱いを根に持っているのか」
「あのね、そこ、普通は、そういうつもりではなかったんだ、って否定するとこ」
「分かっている。当時に戻れるなら、もっとまともな理由が言えるぞ」
「へえ？」
当時に戻る？　そんな物語みたいな言い方をこの男がするところが、もう既に愉快だ。俺なりに結論は出たのだ、と何故か得意げなところも。
「アニーに少しでも傷がつくのが、許せん」
「……あくまでプレゼントの中身が高級傷薬ってとこは変わらないわけね」

完

何をするにも理由がいる

夏海

「これ、本当に似合ってる？」
「完璧完璧。このエミリア様が見立てたんだからバッチリよ」
イタメシ屋のレストランフロアで、チークブラシを片手に胸を張るエミリアと、対照的に視線が泳ぐアニーが向かい合って立っている。アニーの装いは緑のワンピースにパールのネックレス。足元はパンプス。普段の活動的な服装とは全く正反対といってもいい印象を与えるアイテムだ。
服装だけではなく、メイクもエミリアが請け負っていた。瞼はきらめき頬は淡く色づいている。今はモデルとして活動していないとはいえ、似合う服や化粧を選び施す能力は衰えていない。まるで雑誌の中から飛び出してきたかのようだ。
アニーがこちらを見る。助けを求めるかのように。
「いつもの格好でいいんじゃないかな」
「マンハッタンに行くならそれくらい着てもいいと思うわよ。きっとブルーも喜ぶわ」
ライザがカウンターの中からそう声をかけると、チークに染まった頬の色がさらに濃くなったような気がした。
「喜んだりなんて……」
アニーの反論は扉を開ける大きな音で遮られた。
「相変わらず豪快に開けてくれるわね、ブルー」
音を立てた主も、見慣れた姿でなくグレーのジャケット姿だ。エミリアは大袈裟な動作でアニーを前に押し出す。
「デートが待ち遠しくて仕方がなかったのかしら」
「デート？　そんなものではない。買い物だ」
「あのね、今日みたいのは一般的にはデートって言うの！あらどうしたのブルー、珍しく目を逸らしちゃって」
「いや、その」
ブルーは何かを言い淀み、口を開いて何か言おうとして……閉じる。視線は、壁へと向かう。
「もしかしてアニーがあまりに可愛くて戸惑っちゃった？」
ニヤニヤと笑うエミリア。うるさい、と呟いたきり黙ってしまうブルー。アニーはというと、先程まで目を泳がせていたのが嘘だったかのように、きびきびと動いてブルーの腕を引っ張る。もうこの話は終わり、というかのように。

「さ、行こ。時間ないんでしょ」
二人が去り、パタン、と静かに扉が閉じたのを見届けて、エミリアは呟いた。
「お互い満更でもなさそうじゃない？　私も帰ろっと。レンが待ってる」
そして驚異のスピードでテーブルの上のものを回収し、軽やかな足取りで去っていってしまう。
「皆帰ってしまったか」
奥の厨房から現れたのはルーファス。手には泡立て器が握られている。何か用意していたのだろうか。
「仕方がない、ディナータイムのデザートに回すか」
その言葉を受けてライザは、壁に貼られた黒板へ書き足そうとチョークを手に取る。何を作っていたのか聞こうと口を開くよりも早く、ルーファスが問いかけてきた。
「ブルーはなぜ紅茶に目覚めたんだ？」
「え？」
「赤いものは嫌いだと言っていただろう」
資質を求める旅をしていた頃はそうだった。けれど今日、ブルーとアニーの二人はマンハッタンへ「紅い」葉の茶を買いに出ているのだ。アニーはお店で出せそうなのを探しにいく、と言い、ブルーはマジックキングダムにも他リージョンからの来客が増えてきたので出せる茶がほしい、とのことだったが。
「旅を終えて、気持ちが変わったんじゃない？　赤いものも悪くない、って」
たしか、ブルーの双子の兄弟の名はルージュ。赤を討てと言い聞かせられ育った彼が、恋人と飲むために選ぶのは紅茶、というのはなかなか素敵だ。しかし。
「お茶を飲むにも理由が必要なのね、ブルーってば。あ、アニーもか」
「そうかもしれないな」
やけに素直に同意が返ってきてライザは驚く。いつもならこの手の話題を全く理解しないのに。
「コーヒー豆を挽いておいてくれ」
「はい？」
「メニューに書き足すのに、味見が必要だろう」
そう言うと、ルーファスはライザを残して厨房へと戻っていった。
お茶を飲むにも、理由が必要？
いや、まさかね。
ライザは一瞬浮かんだ感情を振り払うように首を軽く振って、ガラスジャーの中のコーヒー豆を二杯、スプーンで掬った。

完

Ro.K

ジョー！早く寝ろ

だってー念願の一人部屋〜

ベッド広〜い！

ゴロン

ゴロン

ひとりで寝れるもん！

影下里緒

ジョー なにかあったらすぐ呼びなさいね

はーい

おやすみなさーい

ジョーがいなくなっても俺達はこのままなのか

もうほかに部屋ないもの

さすがにジョーも大きくなってきて三人で寝るのも狭かったしね

二人なら多少ゆとりができるわ

川の字

ぎゅう ぎゅう

……

ジョー一人で大丈夫だろうか…

あのねえ

ジョーもだんだん年頃になってくればプライベートは守ってあげなきゃいけなくなるでしょ

子供を守ることと干渉することは別！

ビシッ

あなた過干渉気味よ

ほんと意外だったわ

……

ジョーが真ん中にいないと寂しい？

……

あなたとこんな形で一緒に暮らすことになるなんて思わなかったわね
何度目だそのセリフ…
ぴと
こうしてひとつのベッドで眠るのが当たり前になっちゃったなんて
二人だけで寝るの
ね
いつぶりかしら

今日は
ジョーに気を遣わなくても

おじさ〜〜〜ん
おばさ〜〜〜ん

やっぱり
ひとりで寝るの
さみしいよ〜〜〜〜

明日から！

わかったから
早く寝ろ

明日から
ちゃんとひとりで
寝るから！

はいはい

おやすみ
ジョー

End♡

執筆者コメント

※五十音順

アカツキユウ
@akatsuki_yu

I'm Me
@imme_winning

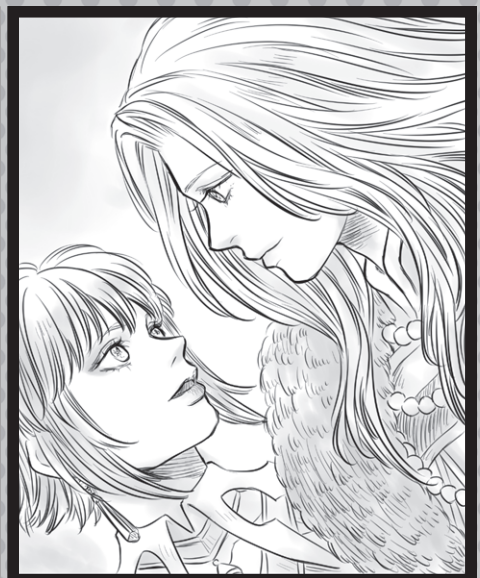
出海尚也
@fazz88

サガ男女カプ本発行おめでとうございます
いろんな話が読めるので楽しみです

いがらし

いがらし
@kyojushmzz

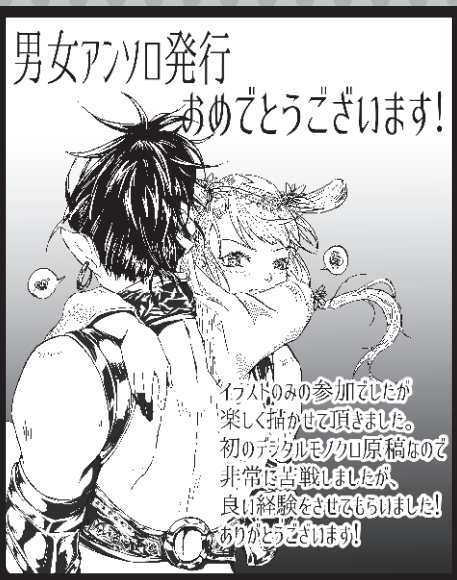
かいと



沖蠍
@okisasori

カシワメ
@kashi_wame

影下里緒
@kageshita_rio



黒猫

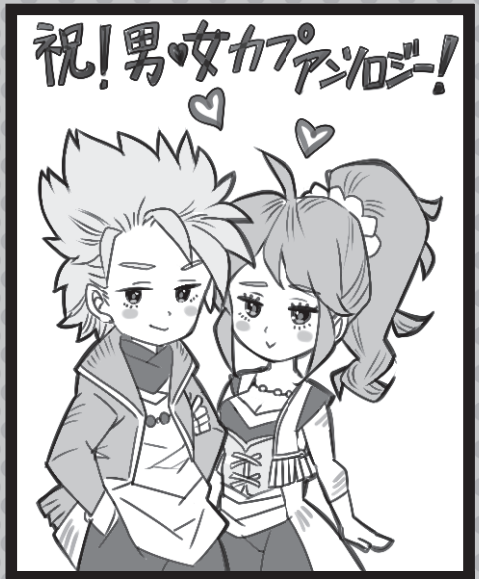
@KuronekoSagaRS

Kyabia

@kyabia06

こえだ

@chocobluewhite



くわんご

@kuwango3838

しいだ
@41da_agito

沢木裕也
@erdbeerejoghurt

サガ男女カプアンソロ
発行おめでとうございます！
参加させていただき
ありがとうございました！

サガフロンティアリマスター
うれしかったですね！
みなさんはもう遊びましたか？
アセルス編ではぜひ
ルージュを仲間にして
ルーアセを堪能してください
ルーアセはいいぞ……♡♡

じょぬ
@jaune_fullvoice

sykariepy
@sykariepy

RS1章のイベントで
「ミカカタとフェルヒルは
繋がってるじゃねえか！」
という自分だけの謎の確信を
当時得ていまして
それを漫画で描いてましたが
都合により2枚のイラストに
籠めさせて頂きました。
話は別の機会にのんびり描けたら…
バレンタインでまさかの聖王様ヒルダ様は
びっくりでした

そーか

@souka_romabath

水波

@wasser_welle

アンソロジー発行

おめでとうございます！

このような素敵なご本に参加出来て
本当に嬉しく思います。
大好きなバルメリとサルエレを
書くことが出来て幸せです。
主催者様、最高の企画を
ありがとうございました！

月雲

@yueyun_nebula

たお

@taotao_taotaota

男女カプアンソロ企画
ありがとうございます！！！

参加させて頂き大変嬉しく思います。
滅多にない機会なので、ロマサガ3リアタイ時に
ハマっていたミカカタを描かせて頂きました。
他、沢山の執筆者様の色々なCPが拝見できるのを
楽しみにしております！

普段は個人サークル「09.」で
サガフロ双子術士メインで活動しています。
ご興味ありましたら右記サイトまで遊びにきて
頂けると嬉しいです。

Tsubasa
@lievre_lievre00

サガ男女カプアンソロ発行おめでとうございます。
ハリード×ファティーマ姫の小説と語りを寄稿させてもらいました、
土取那智と申します。
ブランクこそありますが20年ハリ姫を推し続けてこのような合同誌に参加させて貰えたこと光栄に思います。
小説の方で登場した香水は、某推し香水企画にて姫様のイメージで選んでもらったものを元にしました。チューリップをイメージした華やかで瑞々しい香りの香水です。
これを機に少しでもハリ姫の魅力が伝われば幸いです。
読んでくださった皆様、主催の影下里緒様、本当にありがとうございます。

土取那智
@Romantic_Bard

サガ男女アンソロジー発行
おめでとうございます！

二人とも恋愛赤ちゃんなので
なんも分かってないけど周りから
見ると「明らかに好きだろ！」
みたいな感じの二人を書きました。

十年後くらいに結論見えてますかね。
その際は二人とも
「最初からちゃんと分かってた」
みたいな顔しててほしいです 笑。

余談
ルージュ嫁はご想像にお任せします！
学生時代からの恋人かもしれないし元仲間かもしれないし
旅先で知り合ったモブかもしれません。
でもブルー勝利ルートで恋人候補がいるなら
ルージュにも彼女いるし先にリア充化すると思います！

夏海（Natsumi）
@mikazukiko723

サガ男女カプアンソロ
発行おめでとうございます！

参加させていただき
ありがとうございました！
ルーアセが好きです
ソシャゲで水着に
なるとは思わなかった…

時
@shinyaniji

この度はアンソロに
参加させて頂き
ありがとうございました！
初めての参加でドキドキでした！
ロマサガ3のシャールとミューズの
ギャグという内容でしたが
ミューズ様こんな事言う!?と思われる程
キャラ崩壊しているかもしれません！
ですが私はこんな破天荒なミューズ様も
好きだ！と言う心情で描かせて頂いてるので
皆様にも私のミューズ様を好きになって
頂ければなぁと思っております笑
楽しんで頂ければ幸いです！
ありがとうございました！

パテ
@patesuri

新納ゆうま
@new_en

サガ男女CPアンソロジー
発行おめでとう
ございます！！

2021年リユニお正月イベントでの
アルドラちゃんとミルザ様のお話に
ドツボにハマってまっさかさま、
そのままの勢いでありがたくも
アンソロに参加させていただきました。
書いている間はなんだか五里霧中でしたが（汗）、
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。
(そして願わくば同じ穴に落ちてくださいな……)

サガシリーズが大好きです、男女CPは大好物です！
今回、たくさんの『ときめき』が摂取できる予感に
とってもわくわくしています！

この度は参加させていただき、
本当にありがとうございました！

暇乃余和
@Iria_grana

響喜（hibiki）
@Hibiki_202011

サガシリーズ男女カップリングアンソロ発行おめでとうございます。
トムサラの人ですが、実は好きなのでハリエレに挑戦してみました。

ハリードとエレン、どちらを主人公に選んでも強制加入。
この二人どうなる？と思わせつつ、かたや姫のこと、かたや妹の
ことでいっぱいいっぱい。
何かあるかもしれないし、何もないかもしれない。
二人の関係は幕が開いてのお楽しみ。
（フリーシナリオ万歳）

と、いうわけで。
・宿命の子だという事実には、ゲートを閉じていく過程で
　サラ本人だけが気づいていた。なのでエレンは何も知らない。
・周囲に知られることなく、密かに世界を守る決意を固めて
　アビス突入（トムサラーとしては大好物なやつ）
・最後のゲートはロアーヌのタフターン山
という設定で書いています。
原作で暗転から瞬間移動している部分の、個人的な妄想
補完となります。ずっと温めてきた(派手に幻覚見ていたとも言う)
ネタを形にすることができて、大変嬉しく思います。
書き慣れないキャラに苦戦しつつも楽しく書けました。
貴重な機会を頂き、ありがとうございました。

文月　はるか
@haruka_fumiduki

男女カプアンソロ、
発行おめでとうございます！

久々に、ボルカノと
ウンディーネのお話が書けて
幸せいっぱいです。
ウンディーネお姉様の掌の上で
転がされるボルカノはいいぞ…！

参加者の皆様の作品も、
楽しみでワクワクしております！
この度は参加させて頂き、
本当にありがとうございました！

藤凪みりあ
@lilisyurent

MAI
@tb_mai

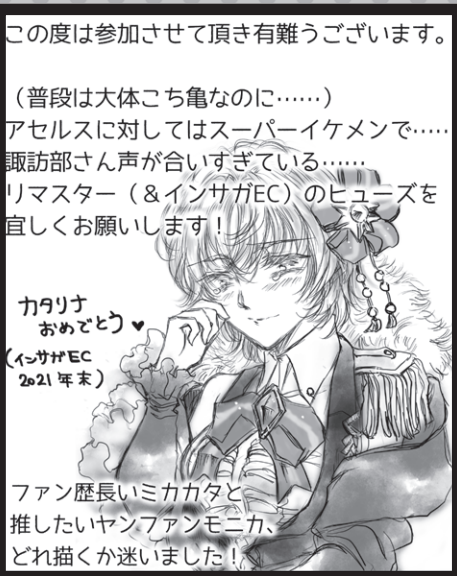
アンソロ発行おめでとうございます！
サガフロ2のギュスターヴ×レスリーのお話を
書かせていただきました。ヤーデ時代の両片想
い。ギュスレス導入編、みたいな気持ちで。
ギュスレスには一年ほど前にふっと再燃して沼
にドボンとハマっております。このカプの良い
ところは拙SSだけではなかなかつたわりきらな
いのでサガフロ2を遊んだことがない方はぜひ
ぜひ！プレイしてもらいたいなとリマスターを
待っている日々です。ほんと良いんですよ……
お互いのこと想いあっているのに、いろんな事
情があってそれを表に出せない二人…。
ロマサガRSの第二部ではレスリーが初実装＆ま
さかのメインストーリー登場＆ギュス様同時新
スタイル追加で狂喜乱舞でしたね。発売から20
年以上経った今でもこんなに狂ったようにハマ
ってるとは思いもしませんでした（笑）

狂ったように書いています（笑）→　pixiv id：43882908

マーレ
@mr61030129

ゆらい
@dora_yurai

桃櫻奈直
@nao_yanase



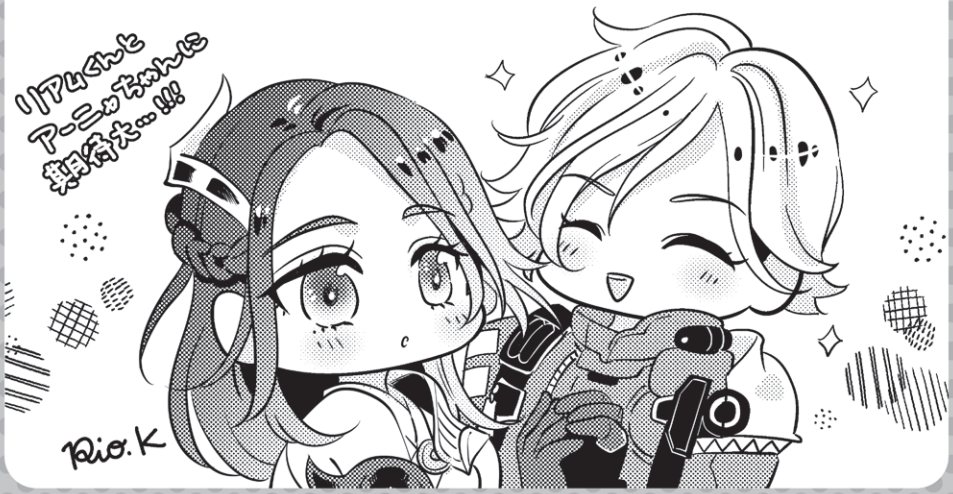
冷茶
@reichayuayu

りほいみ
@rehoimi

主催あとがき

こんにちは、サガシリーズ男女カップリングアンソロジーお楽しみいただけましたでしょうか？　主催をつとめました、影下里緒と申します。
この度は当アンソロにご興味を持っていただきありがとうございました。
Twitter上で思いつきで「サガの男女カプのアンソロ欲しくない〜！？」と呟いたら、思いがけず賛同してくださる方が多く、実際に募集を開始したらなんと主催含め36名もの執筆者が集まるアンソロとなりました。多くの方に参加していただけて大変ありがたく思います。「アンソロを通じておすすめカプと出会える場となるように…」と掲げたコンセプトにふさわしく、シリーズもカップリングも非常に多岐に渡るとても内容が濃いアンソロとなりました！
わたしは今までの同人歴の中で、アンソロや合同誌の主催を何度か経験していますが、初めての公募制で30名以上の執筆者と、今までにない規模になりました。編集にあたって、小説原稿についての知見を授けてくださり、また本文編集にも多大なご協力をいただいたアカツキユウさんに厚く御礼申し上げます。また、Twitterやフライヤー配布等で宣伝にご協力くださった方々、なにより素敵な作品をご寄稿くださった執筆者のみなさま、本当にありがとうございました。
ぜひとも、執筆者の方々へそれぞれご感想をお伝えいただけたらと思います！

主催　影下里緒



彼と彼女のRomance Tale

サガシリーズ男女カップリングアンソロジー

発行責任者：影下里緒（必殺・ぱんだくん）
編集協力：アカツキユウ（ALBA LUNA）
発行日：2022年5月22日
印刷：pixivFACTORY
告知サイト：https://pandakun.site/sg-mf-anthology/
告知Twitter：@sg_mf_anthology
連絡先：rio.kageshita@gmail.com

※当アンソロジーはファンによる非公式の企画です。
※無断転載、無断利用、作品をデータ化しての配布・販売、オークションやフリマアプリなどでの販売は固くお断りしております。

I'm Me	たお
アカツキユウ	月雲
いがらし	土取那智
出海尚也	Tsubasa
沖蠍	時
かいと	夏海（Natsumi）
影下里緒	新納ゆうま
カシワメ	パテ
Kyabia	響喜（hibiki）
黒猫	暇乃余和
くわんど	藤凪みりあ
こえだ	文月はるか
沢木裕也	マーレ
しいだ	MAI
sykariepy	桃櫻奈直
じょぬ	ゆらい
水波	りほいみ
そーか	冷茶